
【精霊憑きと魔法使い】

伊丹静生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【精霊憑きと魔法使い】

【Nコード】

N8850T

【作者名】

伊丹静生

【あらすじ】

不思議な力をもった武器、“神器”を生み出す能力を持つ“精霊憑き”の少年と、“魔法使い”の少女の物語。

厨二色強し。

第一閃『精霊憑きと魔法使い』（前書き）

随分前に書いたモノですので、三点リーダーの使用が無く、文章もいまいちと、多少読みづらいかもしれませんが、ご了承くださいを。

第一閃『精霊憑きと魔法使い』

第一閃『精霊と魔法使い』

「ばけ・・・もの・・・」

オレはそのとき地獄の中で理解した。

オレも目の前の男も『化物』なのだ。

だが、目の前の男は「違う」と言った。

「お前は精霊に、神に選ばれた。

だが『違う』。

私の求める精霊はお前ではない」

男はおもむろに右手の剣を振り上げ、そして、オレに向かって振り下ろした。

そこから先は覚えていない。

そこにあつたのは赫さを増しただけの変わらない地獄。

オレの左手には精霊——否、化物が握られていた。

左手の大剣に、血は付いていなかった。

アイア・シルストームは魔導師である。

もっとも、この世界では別段珍しいわけではなく男も女も一緒にして“魔法使い”と呼ぶ事になっているのだが。

特徴的な大きなポニーテールと、首に下げた水晶をあしらったネックレスを揺らしながら、

ファートスと呼ばれる街の大通りを歩いていた。

そこまで大きな街ではないとはいえ、人通りの多くなる時間の大通り、雑踏はうんざりするのに充分だった。

薄暗い路地に入って溜息一つ。

「まさか早々に迷子とは・・・」

どうやら、人を探しているようだ。

ロンガ・シーライドは剣士である。

もっともそれは自称であり、彼は剣どころか一本のナイフすら持っていないのだが。

耳を覆い隠すほどの髪は根元から毛先まで真っ白だった。

着ている服も白く、男には似合わぬほどに肌も白かった。

円形をしたファートスの街で、人通りを避けて歩きながら気だるそうに呟く。

「オイ・・・アイツ、どこ行きやがった」

こちらにも、人探しの途中のようだ。

ほんの少し前。

ファートスの街を取囲んでいる鬱蒼とした森——正確にはその森をくり抜くようにしてファートスの街を造ったのだが——で、アイアは森の大木に背中を預けていた。

歩けないほど痛む左足を憎々しげに睨む。

「くそ、崖から足を滑らせるなんて・・・」

まだ朝方なので、夜になる心配はしなくていいが、このままここにいては獣や怪物の類のいい餌食になる。モンスターその前にここを離れなければ。

焦る気持ちに唇をかむが、一向に足の痛みは治まらない。

魔術の修行は故郷で三年程こなしては来たが、別に旅慣れているわけではないので、彼女にはこの状況がすでに危険なものだとは解らなかった。

ズルリ、ズルツズルル、ズルリ

《ガルアアアアアアアアアアアアアア》

「 え ? 」

現れたのは、でかい、アイアを十数人は飲み込めそうな大蛇だった。

「な……ちよつと……今、魔法使えないのに！！」

万全の状態の彼女ならば。

追い払う事もきつと出来た。

だが、今は魔法を使用する際の媒介となる杖も折れて、怪我で立つ事さえもままならなかった。

《ガルァアアアアアアアアアアアアアアアア》

大蛇は吼える。

鎌首をもたげ、大口を開け、狙いを定め、弾丸のような速度で獲^ア物^イへ襲い掛かる。

「ひつ・・・・!!」

ズ、
バン

恐怖につぶつた眼を再び開けたとき、そこにあつたのは白い髪の毛の

[illegible]

左眼を縦に斬られた大蛇が痛みにも暴れる。

少年の左手には、身長と同じぐらいの諸刃の剣が握られていた。

「え……今、斬ったの……？」

その剣で、その持ち主が大蛇の眼を斬ったことは明白だったが、その剣に一切の血液や体液の類はついていなかった。

「なあ・・・アレ、お前の獲物だつたりするのか？」

少年は大蛇を指差し、唐突に問う。

激しく首を振って否定するアイア。

それを見て少年は

「そうか。じゃ、いただきます♪」

と、チロリと舌を出して言った。

《ヴァルルルルルル・・・》

痛みのピークを過ぎたのか大蛇は低く唸り、残った眼で食事の邪魔をし、片目をつぶした犯人を睨む。

——ダン——！！

助走もつけず、バネが弾けるように、少年は跳ぶ。

それに呼応するかのように、高い位置にあった大蛇の頭が、牙が、始めにアイアへ向かったのと同じ速度で再び襲い掛かる。

今度は獲物ではなく、害敵^{エサ}に向かつて！！

Φ

Φ

ガツガツ、ぐにつ、ブチッ、

ガツガツ、ゴクッ

「・・・えつと・・・その、ありがとう。助けてくれて」

アイアは迷ったように、目の前の白髪の少年に話しかけた。

「ん？ 別に。オレは腹減ってたからさあ。あの蛇、喰おうと思っただけ」

今や横たわる大木のような大蛇の屍を指差し言う。アイアが熾した火で焼いた蛇の肉をガツガツとむさぼりながら。

「・・・・・・・・・・」

アイアが言葉に詰まったのは、自分とほとんど歳も変わらないよ

うな目の前の少年の台詞が照れ隠しなどではなく、どうやら本気らしいからだった。

「（じゃあ、お腹が減って無かったら今にも食べられちゃいそうな私を見ても助けなかったって事！？）」

とは思ったが、結果的には助けられてしまっているで口には出せない。

「・・・じゃ、名前は？ 私はアイア。アイア・シルストームよ」

「オレは・・・ロンガ・シーライドだ」

もちろんその台詞は、噛み千切った肉をもぐもぐやりながら。

「・・・いきなりこんなこと言うのもなんだけどさ・・・」

少しばつが悪そうに切り出した。

「ん？」

「君・・・人間じゃないよね？」

その言葉に、ロンガはピタリと食事の手を止めた。

「確かに・・・普通の人間ではないな。」

今じゃある程度知られてると思うんだが、オレは“精霊憑き”^{スピリウル}つてやつだ」

「へえ・・・やっぱり精霊憑き^{スピリウル}か。初めて見たよ」

「やつぱり・・・？」

「うん。さっきの剣が“神器”^{スキル}だよな？ いつの間にか消えてるし。実は私、少し詳しいんだよ」

———
精霊憑き^{スピリウル}。生まれながらにして精神^{こころ}に、身体に、精霊を宿し、魔力によってその能力の一部を“神器”^{スキル}と呼ばれる武器の形で具現化することができる、能力者。

「ねえ、なんでこんな森の中にいたの？ しかも私がいたところよりずっと深いところにいたでしょ」

「・・・別に。お前みたいに迷い込んだわけじゃない」

「！？ なんで迷ったって解ったの！？」

「冗談のつもりだったんだが!？」
本気で。

「ま・・・まあ、いいわ・・・ あんたは街の方向とか分かる？」
「ああ。一応はな。オレもこの近くの街に用があるんだよ。迷うのが怖いなら一緒に行くか？」

「なっ、別に怖いなんて・・・」
そこまで言ってしまったから、アイアは顔を赤らめてうつむき、
「いや・・・やっぱ・・・一緒に行ってもらえると・・・助かります・・・」

そう、ぼそぼそと訂正した。

しばらくの後。

ファートスの街に着いた二人は別行動をとることにした。
といっても、今さっき会ったばかりなので親しいわけではなく、さらにロンガからしてみれば、ただ気まぐれで街まで送ってきただけなのだが、アイア曰く、礼をしないと気が済まないそうなので後で落ち合う約束をしたのだった。

「て言うか・・・ たった二行の空白で街に着くなんて・・・ 今まで迷いまくってた私は何なの？」

ぶつぶつ言いながら宿のチェックインを済ます。

「結構旅慣れてたみたいだけど、結局目的とか聞けなかったな・・・」

「やあ。久しぶりですね。ロンガさん」

貼り付けたようなにこやかな笑顔で、店の店主は言った。

「ほら。約束の」

ドサツ と、無造作にカウンターに置いたのは、金貨の詰まった袋。

「へえ・・・ホントに一ヶ月で集めてくるとは。一体どんな悪いことしたんですか？」

「御託はいい。さつさと話せ情報屋」

表向きは酒屋。裏ではアブナイ情報屋。この世界にはそんなのいくらかもある・・・ってことで。

ただ、ロングのいる情報（さか）一屋は金さえあればどんな危ない情報でも集めてくると評判だった。あくまでも裏社会で。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しかし、カウンターに座る男は一言も発さず、心なしか冷や汗をかいているようだった。

「・・・・・・・・？・・・・・・・・どうした。まさか集まらなかったのか？」

「いえ・・・」

そう言うわけではないんですが・・・」

チラリ、と開けっ放しの入り口を見やる。

それにつられロングも振り返るとそこにいたのは、

「・・・・・・・・！！」

筋骨隆々、スキンヘッドのいかにも悪役風な大男だった。

「貴様・・・バラしたのか!？」

再度振り返り、情報屋へ怒鳴る。

未だカウンターに座り、顔の笑みも消えてはいないが今度は確かに、

ダラダラと冷や汗をかいていた。

「いや・・・けっしてバラしたのではなくてですね・・・・・・・・」

「バレたんだよなあ・・・」

店主の言葉を引き継ぎ、店の奥から現れたのは、線の細いひよろりとした、これまた張り付いたような笑顔が特徴の金髪の男だった。
「駄目だよなあ、仮にも政府高官の情報を盗もうだなんて」

「……盗もうとしたただけなんだけどなあ……」

「だから見逃せと？ それは無理だね。」

「ご本人様から見つけ出して始末しろとのご命令だからな」

「なるほど……危険因子は潰しとけてかよ……」

「ハッ……その通り。やれ、ガーム」

その台詞を合図に、ガームと呼ばれた初めの大男は握りこぶしを高く振り上げて、

「スキル“神器”発動、【アクス・オフ・フレアリザード火蜥蜴の戦斧】」

と、言うと同時にロングに向かって振り下ろした。

バキィイツ！！！！

振り下ろされた腕にいつの間にか握られていた斧がロングからはずれて、店の床を破壊する。

その斧の刃は炎に包まれていた。

「スレリウル“精霊憑き”か……！！」

間一髪、斧をかわしてそう言った次の瞬間、

「ぐあああああああ！？」

右肩の鋭い痛みと共に体中に走る電撃。

「スキル“神器”【ダガー・オラ・スパーク雷光の短剣】」

膝について、齒を噛み締め右肩に刺さった短剣を引き抜くロング。その短剣を投げたのは、言うまでも無く後から現れた方の男である。

「く……」

ひよろりとしたその男は、下卑た笑いを浮かべてこう言う。

「どうした。お前もスキル神器を出さないのか？」

明らかに自分達が有利であることを確信している笑み。

「くっ……仕方ないか……」

その言葉とは裏腹に、ロングは楽しそうな笑みを浮かべそう言い、さらに続ける。

「……“スキル神器”発動……」

水平に上げた左腕の拳が光る。

「ブレード・オブ・シルフ【風霊の大剣】！！」

光が形作ったのは、大蛇の時と同じ、左右対称、諸刃の大剣。違うのは。その剣が纏う、風。その風圧だった。

大剣の具現化の直後、ひよろりとした男に貼り付いていた笑みは信じられないものを見た時の苦笑いに変わった。

「な！！！！　し・・・風^{シルフ}霊・・・！？」

「バカな・・・こんなガキが、四大元素クラスだと！！！？」

「ヒ・・・ヒイイイ・・・！！！！」

そろって驚きと恐怖の声を上げる、

【雷光の短剣】^{ダガー・オブ・スパーク}の男とガームという大男、そして蚊帳の外だった店の店主。

「^{スベリウル}精霊憑き」の能力は先天性だから、年齢は関係ないだろうが・・・」

機嫌を害したように言う。

「そうだ、年齢だ！　風^{シルフ}霊なんて高ランクの精霊を、こんなガキが使いこなせる訳ねえ！ガーム！　今のうちにぶっ殺すんだ！！」

「オオオオオオオオオオ！！！！」

火力を上げた燃える斧がロングハへ襲い掛かる。

ガギイイ・・・ン・・・

大剣を盾のように使い、難なく攻撃を受け止める。

「な・・・！！！！！！！！！！」

驚きの声はあっさりと攻撃を防がれたからではなく、その剣が纏う風によって簡単には消えるはずの無い火^{フレア}蜥蜴の炎が掻き消されたから。そして、その風圧によって斧本体が剣に触れる前に著しい減速を余儀なくされたからである。

大剣を包む風圧が上がる。

【火^{アクス・オブ・フレア}蜥蜴の戦斧】を薙ぐような一太刀で破壊し、そのまま右手を添えて突きの動作。

「くっ・・・！！！！」

ガームは間一髪、後ろに跳んでギリギリのところまで切っ先をかわした。

「吹っ飛べ！！！！突風！！！！」

「な！？　ガ、ガアアアアアアア！！！！」

大男は、盛大に吹っ飛んだ。

店の壁を破壊せんがごとき勢いで。

確かにガームは剣の切っ先はかわしたが、

圧縮された風による、大砲のごとき突きまではかわせなかった。

「フン。なんだ、結局雑魚か」

視線を金髪の男に向けるロンガ。

「それで？　お前は、どう料理されたい？」

「く・・・くそ・・・」

今や苦笑いすら消えた怒りと恐怖の顔で、本来なら取るに足らぬはずの少年を睨みつける。

「この・・・覚えてろよ！　絶対後悔させてやるからな！！！！」

最後まで名前が出てこなかった短剣の男はベタすぎる、いかにも悪役の捨て台詞を吐いて店の裏口から消えていった。

「なんだったんだあいつは・・・・・・」

風^{シルフ}霊を宿す白髪の少年はそうぼやいてから

最後まで震えていた店主に向かって、

「またいつか来るから、その時はよろしく」

と言に残したのだった。

ψ

ψ

太陽は沈みかけ月は上りかけ、いつの間にか時刻は約束を過ぎていた。

杖の新調したり旅の道具そろえたりしてたら遅くなっちゃった。
「無視して帰ってないといいけど・・・」

待ち合わせ場所は、街の中心の広場。

なんかベタな気が・・・

広場をくまなく見て回ったが、結局ロングの姿を見つける事はできなかった。

「・・・まだ来てないのかな・・・」

ボソツとつぶやきながら、自分でもばかばかしいと思いながらも狭い路地をのぞいてみたりする。

「・・・どうしようかな・・・」

諦めて宿に戻ろうかと思ったとき。

バチイイッ

「――！？」

首筋に走った鋭い痛みにも、その場で倒れてしまった。

Φ

Φ

太陽は眠りにつき月が顔を出し、いつの間にか夜と呼べる時間になっていた。

右肩の処置に随分と時間がかかってしまった。慣れてないことはダメだな、全く。

とつくに時間は約束を過ぎていた。

「今ならまだいるかと思ったんだが・・・」

やはり諦めてどこかにいったのか。

ふと、今朝知り合ったばかりの奴を焦るような気持ちで探している自分に気付く。

「バカみたいだな、オレは」

そもそも気まぐれで知り合った仲だし、本当ならこちらが無視してやるところなんだが

・・・・・・。

「このやるせない気持ちは何だ？」

「今までずっと一人で旅をしてきたしそれで不便もなかった。
むしろ連れなど足枷に他ならない。」

「こちらも諦めて、今夜泊まるところを探そうとしたとき。
そのとき。」

「家路につく人の群れの中で、見覚えのある顔を見つけた。
ひよろりとした背格好、金髪で、顔に張り付いた他人を見下すよ
うな笑顔。」

「間違いない。オレを襲った二人組の短剣の男だった。」

「その男がじやらりと、手に持った物を胸の前まで上げた。それは、
紛れもなく、アイアがつけていた、水晶の首飾りだった。」

「貴様・・・！！」

「オレが気付いた事を悟るやいなや、金髪の男は走り出した。」

「逃がすものか。」

「脚力には人並みならぬ自信がある。」

「しかし、男のほうも逃げきれるとは思っていなかったようで、い
まは使われなくなったと見える、廃墟となった教会へ逃げ込んだ。」

ψ

ψ

「追いかけてこは終わりか、ゴミクス」

「・・・俺にはアルフレッド・ラインって名前があるんだが・・・
今は関係ないか」

「・・・なんでお前がアイアの首飾りを持ってるんだ？」

「それは・・・本当に偶然なんだよ」

「頬を吊り上げたままアルフレッドは言う。」

「確かに俺達はお前を殺しに来たが、お前の顔を知ってたわけじゃ

ない。情報屋の店主から聞いたんだ。　だけど、お前の白ずくめは少し目立つからな。情報屋に行く前に少し見かけたのさ」

アルフレッドはその笑みをいつそう強くして、言う。

「それを、そいつが覚えてた」

ドッ――

「ガふ………っ!!」

ロンガの背後から、不意打ちをしたのは火蜥蜴^{フレアリザード}を宿す大男、ガームだった。

「ガハハ、どうだ【火蜥蜴の戦斧】^{アクス・オフ・フレアリザード}の味は。　喰らうのは初めてだろ」

「く……クソがあ……」

脇腹を切り裂いた傷と火傷は、急所こそ外れていたものの、二人の“精霊憑き”^{スプリウル}を相手にするには致命傷に近かった。

「【雷光の短剣】^{ダガー・オブ・スパーク}。　さて……死のうか」

手に稲妻を纏う短剣を持ち、教会の際壇上からロンガを見下ろす。その視線を、ロンガは睨み返し、憎々しげに言う。

「ふざけんなよ、クソが……」

獣のように低く唸って、“神器”^{スキル}を生成^{つく}ろうとする。

「【風霊の……」

「ウオオオオオ!!!!」

「っな!?!」

バギイン!

ロンガを狙って再び放たれた燃える斧の一撃は、教会の石の床にヒビをいれた。

攻撃をかわしたロンガへ、今度は短剣が飛んできた。

ドズッ　バチイイ!

右腕に刺さった【雷光の短剣】^{ダガー・オブ・スパーク}の電撃が、ロンガの身体にダメージを与える。

「ぐ、があああああ!!」

く……この……っ」

ロンガはヒザをつき、右腕に刺さった短剣を抜く。その短剣は床に音を立てるより早くかき消えていた。

「つく・・・（くそ、こいつら、まさか）」

「ハハハ、その顔、気付いたか」

その言葉の終わる前に、ロンガは右腕と脇腹から血飛沫を飛ばしながらも、床を蹴って二人と距離を取ろうとする。

「ガッハハ、にがさんぞお！」

回りこんだガームが斧を振るう。

ロンガはそれをかわすが、斧から飛んだ火花に怯んだ隙に左脚に後ろから短剣が突き刺さった。

「がっ・・・（やつぱりか・・・！）」

倒れそうになるものの、振り下ろされた斧をガームの腕をつかんで止める。

「フツ、バカめ」

バキイイ

しかし結局、ガームの空いていた左腕に殴り飛ばされた。

「（やつぱり・・・こいつら、オレに神器スキルを使わせない気だ・・・！）」

仰向けに倒れたロンガはそう確信した。

「ハハハハ、やつぱり。風霊シルフさえ封じればお前なんて大したことなかったか」

つかつかとアルフレッドが歩み寄る。

「剣から放たれる風でいくら斬ろうと血液一つつかず、その風圧は盾にも武器にもなる。そんな大層な“神器”スキルも使えなきゃ意味ないな」

ダガー・オブ・スバーク

【雷光の短剣】を逆手に持ちさらに迫る。

ブレイド

「大剣タイプの“神器”スキルはその大きさをゆえ、生成に時間がかかる。

この作戦を使うにはもってこいだ」

ロンガは仰向けのまま、荒い息を吐いていた。すでに右腕は刺し傷と感電でボロボロ、左脚もほとんど同じで、腹の傷は血を流し続

けていた。

「（隙だ・・・“スキル神器”を生成つくる隙さえあれば・・・！！）」

アルフレッドが腕を振り上げ、ロンガにとどめを刺そうとした、その瞬間、

「エイク・ブリザ・ウォク！！！」

バギン！！！！

そんな音と共に、アルフレッドの腕が弾かれると共に凍りついた。比喻表現ではなく。

実際に氷漬けになったのだ。

「ひ、あ、ああ、あああ！！？」

一瞬何が起こったかわからず、情けない声を上げるアルフレッド。

「だ、誰だ！？」

ガームが教会の入り口の方を振り向く。

そこにいたのは、自分達がさらってきた筈のアイア・シルストームだった。

「ロンガ！！ やれえええええ！！！！」

「おおおおおおおお！！！！！！」

アルフレッドの顔へ、下から打ち上げるような蹴りが炸裂する。

「ぐあ・・・！！！！」

「又！？」

さらに、吹っ飛んだアルフレッドに気を取られたガームの顔面へ渾身の左ストレートが直撃する。

「ぐぶあ、ああああああ！！！！！！」

一気に二人を同じ方向にぶっ飛ばしたロンガは、腹と右腕、左脚から血をダラダラと流しながらも、

「形・・・勢、逆・・・・・・・・・・転・・・・・・・・！！！！」

そう宣言した。

「ぐ・・・ガーム・・・とりあえずお前の【アクス・オフ・フレアリザード火蜥蜴の戦斧】で腕の氷を溶かしてくれ、痛すぎる・・・腕が千切れそうだ・・・！！！！！！」

「あ・・・ああ・・・わか・・・」

「その必要はねえよ、クソども！」

「「んな!？」」

そこに、血みどろになりながらも凶悪な笑みを浮かべて立っていたのは、当然、左手に【ブレード・オブ・シルフ風霊の大剣】を持ったロンガである。

「まあ・・・もう全力とはいかないけどさ、

オレの必殺技、ブレード冥土の土産に見てけよ」

そう言つて、大剣を強く握る。

剣が纏う風が強くなる。

強く。強く。強く。

やがて剣を包む様に回っていた風が、教会の内部全体を埋め尽くす程の、暴風に変わった。

「「「な・・・・・・・・」」」

ロンガの敵の二人のみならず、アイアまでも驚きの声を上げる。

さらに、嵐のように暴れまわっていた風が再び、ロンガが高く掲げた剣の周りに集まつて来た。

体中の傷から血が噴出す。

「ちよつ、ロンガ!？」

これだけの量の風——空気を操るのは並大抵の技ではない。

「ふうぜついつせん風絶一閃・・・・・・・・バイトテラ・咬・スラアアアアッシュ!!!!」

大剣を振り下ろすと同時に放たれたソレは

様々なファンタジーに描かれる「たぐい飛ぶ斬撃」の類・・・ではあったが、それらとは一線を画すものだった。

その風量は、その迫力は、その勢いは。

まさに竜巻。カマイタチ鎌鼬の竜巻。

《ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ》

巨竜の牙のようなソレは、唸り声を上げてアルフレッドとガーム、その背後の壁までも飲み込み、破壊した。

Φ

Φ

文字通り半壊した教会の中で、ロンガとアイアの二人はボンヤリと立っていた。が、その言葉通りなのはアイアだけで、ロンガの方はどう声をかけていいか分からないだけだった。

人を超える存在、“精霊憑き”^{スピリチュアル}。その真価を見てしまった人間^{ヒト}が抱く感情。

それは最早、猛獣や魔獣を前にしたときと変わらない、恐怖。

人間の使う“魔法”ですら、常識を超え、

使い方を誤れば使用者にすら牙をむく。

神の創り給う、人を超える存在の能力^{ちから}など理解される由も無い。

ロンガの旅の理由には、そんな感情を向けられることを嫌っての事もあるのだ。

やっぱり、怖いか？ 諦めをつけたようにアイアにそう問おうとしたとき。

「す……ごい………」

当のアイアは、感嘆の溜息と台詞をもらしたのだった。

「は……？　すごい……？」

「すごいよロンガ！　あんな魔法、私の師匠でも使えないよー！」

「いや、アレは魔法じゃなくて“神器”^{スキル}なんだが……」

「細かい事はどーでもいいの！」

「……恐く……ないのか……？」

「へ？」

「いや、あの能力^{ちから}とかさ……」

そういわれると、アイアは逡巡の後、

「うーん……確かにアレを自分に向けられたら怖いけど、別に口

ンガ自身を恐いと思ったりはしないよ？

それに、二回も助けられちゃったしね！」

そういつて、ロンガの腕にしがみつく。

「・・・・・・・・！！」

（ああ、そうか、恐れていたのはオレの方が・・・・・・・・）

そう安堵した直後、急激な眩暈めまいに襲われて

バランスを崩してしまった。

「え、ちょ、ええ！？」

ロンガはそのまま意識を失った。

それも当然。彼の負った傷による出血が、ついに立っていられる限界を超えたのだ。

Φ

Φ

翌日――

ガバツ！

と、毛布を跳ね飛ばして、白髪の少年はベットから起き上がった。

「・・・・・・・・？」

周りを見回して、自分のおかれた状況を理解する。

「ここは・・・宿・・・か。てことは、あの後・・・・・・・・」

ス――・・・・・・・・ス――・・・・・

「・・・・・・・・」

思考を寸断する警戒心ゼロの寝息。

ロンガの寝ていたベットにもたれかかるようにして、ポニーテールをほくくこともせずアイアは眠っていた。

「えーと・・・？」

傷の手当てとかされてる所を見ると、病院にでも連れて行ったか・・・？

いや、宿にいるところを見るとコイツが手当てしたのか・・・」
全く・・・仮にも男なんだけどな・・・

アイアを起こさないようにベットから降りて、部屋の戸に手をかける。

「何処に——行くの・・・？」

背後から呼び止められる。

「まだ聞いてないよ、ロンガの旅の目的」

ロンガは振り向かず、扉の木目を見つめて答える。

「オレの目的は・・・二つ。」

オレの能力に向けられる忌避の眼から逃れること、そして」

まさかコレを他人に話す時が来るとは。

適当に誤魔化してあしらうことも出来ただろうが、なぜかそんな気にはならなかった。

「とある奴を探し出して殺すことだ」

「・・・じゃあ、あの二人は」

「まさか“探し出す”過程で恨みを買うとは思ってなかったが、まあそういうことだ」

「これから・・・どこに行くの？」

「わからない・・・が、とりあえずセドソンの街にでもいつてみようと思ってる」

「私も・・・一緒じゃダメ・・・？」

「・・・多分・・・危険な道だぞ？」

まだ扉の木目から目を離さない。

そんなロンガの後姿を見ながらアイアは不適に笑った。

ロンガもそんなアイアの気配の変質に気付いたのか、ふと振り返る。

「私はさ、結構強情でね」

「・・・？」

「拒否しなかった時点で、あんたの負け！
なんと言われてもついてってやる！」

「なっ・・・はぁ!？」

急に破顔するなり、そんなことを言われては、うろたえるのも当たり前である。

「そうと決まったら旅の支度しなきゃ!

ここからセドソンまでは、丸一日はかかるよ!」

そう言うなり、立ち上がって、髪を結びなおす。

「ちよつと待て、そもそも何でお前はオレについてきたがるんだ!？」

「んー? ソレはまあ、またにしようよ。

もう四捨五入で三十ページになるしさ」

「!?!?!? 何の話だソレは!？」

アイアの言動に振り回されてる感を感じながらも、ロンガも共に昼前の街に出るのだった。

Φ

Φ

数十分後――

「そついえばアイツ・・・・・・迷子キャラだっけ・・・・・・?」
苦笑いしながら、人通りの増えてきた街を探し回るハメになる
ンガだった。

第一閃――終わり

第二閃『修道女と妹』（前書き）

前回到引き続き駄文です。
おまけに長いです。

第二閃『修道女と妹』

第二閃『修道女と姉妹』

わたしは知っていた。

誰よりも。あなた自身よりも。

あなたの辛さを。

私とも、お母さんともお父さんとも違う、先祖にたまたまその血が混ざっていたがために、その血があなたの中で覚醒したがために家を離れ、敵であるはずの教会で修道女なんかになった。

運命を呪うとはこのことか。

仕方がないのはわかってる。

でも、だからってこんなこと

だから、わたしはあなたを、あなたの血を

——決して許さない。

そろそろ昼の陽射しを放ち始めた太陽の下で“魔法使い”^{ウィザード} アイア・シルストームと、自称剣士、ロンガ・シーライドは肩を並べて道を歩いていた。

「ってロンガさあ、第一閃でも自分で自分のこと“剣士”って名乗ってないじゃん。

何処が自称剣士なのよ」

アイアは持っていた地図から目を離してロンガに言った。

「登場後初めての台詞がそれか…破天荒もいいトコだな…」

「そういえばさ、誰か探して殺す…とか物騒なことやってたけどさ、手掛かりとかはあるの？」

ロンガのツツコミ、完全無視。

「……まあ、はつきり言つて、手掛かりと呼べるものは全くない」
そこで怒らないロンガは、意外に大人なのかも知れない。

「え……じゃ、ゼドソンに行くつてのは？」

「完全に気まぐれ、というか気まぐれ」

「はい…？」

「ソレはあくまで最終目標。」

確かに少しずつ手がかりとかは集めてはいるが、見つかるまでは気まぐれで動くんだ」

「…じゃ、怨恨より気まぐれで動くんだ、ロンガは」

「そういうこと。」

もっとも、前回二人倒したせいで、追手とかが出てこないとも限らないからな。

行き先を判別させなけりや追われる心配も無い」

「一応はいろいろ考えてるんだ…」

「ああ、まあな。つてオイ。どこ行く気だ」

「ふえ？」

地図を持っているにもかかわらず、アイアは分かれ道で進む方向を間違いかけていた。

Φ

Φ

はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、

結局……逃げることもしか出来なかった。
ダメだ。このままじゃ。
早く——あの人を止めなければ。

これ以上、あんなことをさせる前に。

Φ

Φ

ソワッ——

「——！？」

「ん？ どうしたのロンガ」

「いや……なんか……」

《ド

ン》

「——ッ……！！！」

昼間の空気を揺らす爆発音。

見上げれば道を外れたところの森の一角から、白い煙が上がって
いた。

「……ロンガ、行ってみる？」

「ハッ、ここで行かない主人公ってどうなんだよ」

「それもそうか。」

「じゃ、行ってみよう！」

「何故テンション高い……？」

「って、おい、だからどっち行く気だ！」

思ったよりは、その現場の有様はマシな方だった。

広い範囲で木や地面が焦げていたりはしたが、中心地はクレーターの
ような窪みくぼを作るでもなく。

ただ、数匹の角の生えた狼型の怪物モンスターの死体と、女の子が転がって
いた。

「死んじゃ……いないな」

倒れている女の子を見ながらロンガは言った。

「一ナイフ（刃角）—ウルフ（狼）か……」

「そんなに強い怪物モンスターじゃないよね？」

「ああ。その辺にゴロゴロいるレベルだな。」

それに、コイツの傷は狼によるものには見えない」

「ふえ？」

「まあ、それより腹減らねえか？」

ブレード・オブ・シルフ

【風霊の大剣】を手に握ると、ロンガはそう言った。

「るあああああ！?!?」

「何!? 何事!？」

「落ち着けアイア。お目覚めみたいだぞ？」

「え……え……え……?」

赤毛のショートカットを揺らして、少女は

ロンガとアイアの顔を交互に見ていた。

「えーっと、うん。アイア、こういう時どうしたらいいんだ？」

「えええええええええ、丸投げ!？」

と、とりあえず……名前は？

イタミ

作者がカスでさあ、名前出てないと書きづらいつて

「（……ここでツッコんだら負けなんだろうか……?）」

パチッとロンガの熾おこした焚き火が爆はぜる。

「えっ……と、メイコ、メイコ・フレアライズです。 助けて……下さ

つたんですよ。

その、ありがとうございます……」

最後の方は消え入りそうな声だった。

「…アイア、先にオレ達の自己紹介からやるべきだったのでは……？」

「うるさい！丸投げしたくせに！

エイクー！」

「ぐあ！　いてえ！いや、つめてえ！？」

「いや、あの、えっと、え……？」

メイコは慌てながらも手と目で強烈に、「落ち着いてください」と訴えている。

「…ええと、私はアイアでこっちはロンガ。

よろしくね、メイコちゃん」

「あ…よ、よろしくです……」

あ、アイアさんも魔法使いなんですか？」

「うん、そうだよ。さっき使った魔法で判ったのかな

って、『も』？」

「ほら、狼の肉が焼けたぞ。

話は食いながらでいいんじゃないか？」

今にも涎を垂らしそうな顔で焚き火の中から、串に刺して焼いた肉を取り出しながらロンガは言った。

「へえ、じゃあメイコちゃんはセドソンに住んでるんだ」

「ちょうどいいな、一緒に行くか？」

「ええ、そうしてもらえると助かります。

私も魔法は使えるんですけど、まだ失敗が多くて……」

「そつえば、何で倒れてたんだ？」

「いや……それも…実は失敗しまして……」

顔を横に向けて、メイコは決まり悪そうに続ける。

「ちよつと…爆発を……」

「え……………」

「魔法つて失敗したら爆発するんだっけ？」

困惑するアイアとロンガ。

それを見たメイコも慌てて、

「あ、いや、アイアさんみたいな氷属性の魔法なら、そんなことは無いと思いますが……」

わたしのは……………」

そう言つと、服のポケットから短い、金色をした短剣のようなものを取り出した。

短剣…と言うよりは、短い長方形の鉄の棒に取っ手を付けたようなソレは、丸い宝石が並んで埋め込まれていて、どう考えても物を切ることは出来ない形だった。

「フェリ・ウオク！」

メイコが“火属性の弾丸”を意味する呪文を唱えると手に持った魔道具の先から火球が現れ、焚き火にあたるとその火力を上げた。

「へえ…火属性かあ……………」

「えへへ…まだまだなんですけどね」

横でソレを見ていたロンガが不思議そうに

「なあ、アイアが火の魔法を使つたり、メイコが氷の魔法使つたりは出来ないのか？」

と、言つた。

「出来ないことも無いけど難しい…かな？」

「はあ？」

アイアの代わりにメイコが説明する。

「えつと、“魔法”やそれを使うために必要な“魔力”には、いくつかの“属性”があるんです。人によってどの属性を扱うのが向いているかという適正が違ふんですよね」

「なるほど……………」

「ロンガ…さんは、魔法使いじゃないんですか？」
ウィザード

「あ、ロンガは……」

「ああ、オレは魔法使いじゃなくて剣士だ」
ウィザード

「……剣士……？」

怪訝な顔をするメイコ。それも当然。

魔法使いなら、魔道具を。

剣士ならば、剣を。

ロンガは一振の剣も持っていない。

「自称、だけどな」

ザリッ

という唐突な音はアイアが杖で地面を引つ掻く音。

「ねえロンガ、そろそろ行かないと日が暮れちゃうよ」

「む、そうか。じゃ、そろそろ出発するか」

「あ、はい！」

アイア、ロンガに引き続いて、メイコも立ち上がる。

「んじゃ、いきますか！」

「で？ 前回、丸一日かかるとか言ってたの誰だったかなあ……？」

「あ…あれ……？ 絶対その位かかると踏んでただけだなあ……」

「確証なかったのかよ！」

「まあ、いいんじゃないですか？」

早く着いたんですし、遅くなるよりは」

そう。セドソンには思ってたより早く着いた。

ただ、それが想像を超えて早すぎたのだ。

具体的には、丸一日かかると思っていたものが、日が暮れる前に着いてしまった。

「ふう……まあいいか。」

「お前は先に宿にでも行つてろ」

「ふえ……？ ロンガは？」

「オレは……まあ野暮用、というか？」

「まあ、後から行くな。」

「ところでメイコ。この街で、肉屋と衛兵所は何処だ？」

「えつと……肉屋はその道の所に、衛兵所は東西の門の近くにあります。」

「今さっきわたしたちが入ってきたのが東門ですね」

「おう、サンキュー。じゃ、また後でな」

「ロンガはそう言い残すと遠くへ走り去っていった。」

「そんな勝手な……」

「あの、宿はすぐそこにありますから」

「あ、うん、ありがとう」

「笑って答えるアイア。」

「じゃ、わたしはこれで。」

「ロンガさんにもよろしくお伝えください」

「あ、そうかメイコちゃんはこのに住んでるんだったね。じゃあね」

「」

——その時、私たちは気付いていなかった。気付くはずも無かった。

「私たちを見つめる、殺意の炎に。」

結局、ロンガが戻ってきたのは日も沈んで暗くなってからだった。

「ふう……疲れた……」

「ドチャツと音を立てて、持っていた布袋を机に置いてからベットの倒れこむ。」

「ちよつと……今までどこ行つてたのさ」

「いや、その袋の中……」

「ふえ？ コレのなかあ！？」

「違う……中……開いてみる……」

アイアは袋を取り上げて開いてみる。

「え……コレは……」

中に入っていたのは、結構な量の金貨や銀貨だった。

「ちょ、どこから盗ってきたの！？」

「人聞きが悪い！ちゃんと稼いだんだよ！」

「どうやってよ！」

「……簡単だよ。その辺の森で狼狩りしてた」

「狼……ってあの……」

「ああ、ナイフウルフだ。」

刈り取った首を衛兵所に持ってって、賃金貰って、肉を捌いて肉屋で売る。

コレで結構手に入る」

「……今までそんなこととして生計立ててたのかよ……」

「ああ、肉屋はともかくとして、最近は凶暴な怪物モンスターが増えてるからな。

衛兵所の奴らは奮発してくれるぜ」

ロンガは大きな欠伸あくびをして、仰向けになると、

「それより……どうやら火事が多いみたいだなこの街
と言っ。

「うん、焼け落ちた建物多かつたね」

事実、アイアとロンガのいる宿の周辺にも二つ三つ、黒く焼けて
原型をなくした建物があった。

「なんか気になるの……？」

「いや……なんと……なく……な……」

「ふーん……って、ロンガ……？」

白髪の少年はすでに寝息を立てていた。

「……………」

Φ

Φ

ソワッ

「……………!!?」

前にも感じたことのある、全身の毛が逆立つような感覚を感じて
ロンガは跳ね起きた。

「……………何だ……………」

音の無い、静寂の夜。

しかし、ロンガの本能は警戒を続けると命じていた。

「……………ッ!?」

不意に、窓から差し込んでくる月明かりを影が刹那に遮った。

そう思った瞬間――

窓の張られた壁が、否、宿の建物が、紅い炎によって縦に切り裂
かれた。

《ゴオオオオオオオオウ》

「なあっ!!!!?」

くっ……………アイア!!」

「ふあ!? え、何!? 夜這い!?!」

「んな訳あるか、くそっ!!!」

スキル
ブレード・オブ・シルフ
神器! 【風霊の大剣】!!!!」

左手から放たれる魔力が、強い光を伴って剣を形作る。風霊の宿
るソレは、完成と同時に風を纏い始める。

「風絶!!!!」

大剣が放つ突風を炎にぶつけて、炎が弱まった隙に、まだ寝ぼけ
ているアイアに担いで荷物を持たせ、窓――だった所から飛び出し
た。

「ちょ、ロンガ!ここ二階!!!!」

「三階だ、バカ！！！」

「バカとは何をお！？」

つかかるアイアを無視したロンガも、何も考えず飛び出したわけではない。

左手に持った剣を地面に投げつけて突き刺し、剣から放たれる風で器用に落下の勢いを弱めた。

「……ッッ！！！」

「ちょ、ロンガ、大丈夫！？」

「……ちよつと痛いけど……大丈夫だ」

すでに道には、宿の主人やその他の宿泊客が逃げ出してきた。そこにド派手な登場をしたのである。

否応なしに好奇の眼を向けられるのだが、

ロンガは気にする素振りも見せずに言う。

「アイア、その荷物の中にちゃんと杖、入ってるな？」

「あ、えゝつと…… うん。あるよ」

「よし。じゃあ追うぞ」

「追う……って誰を？」

「さっきオレ達が飛び出したとき、向ここのほうに逃げていくのが見えた。」

まだ追いつけるかも知れん」

集まり続ける野次馬や火消しでこった返す道の先を指さしてロンガは言った。

「いや、私寝間着なんですけど。」

髪も結んでないし……」

「んなもん気になるな」

「んなもんで……！！」

で、この荷物、服入ってない……！！

うそ、燃えた！？」

バツ——と赤く燃え上がる宿を見上げる。

「……！！」

アイアの驚愕と同時に、野次馬から上がる叫び声。

「あ！あそこ！子供がいる！！！」

「って、んなベタなあ！！！！！」

まさにご指摘の通り。

「でもロンガ！確かにベタだけどホントにいるんだってば！」

アイアの指差す先には、確かに、黒煙の立ち上る窓から微かに身を乗り出している子供がいた。

丁度、ロンガ達のいた階の一番端の部屋である。

「ち……あの背丈じゃ、飛び降りろってのは無理か……」

「ロンガなら助けられないの？」

「そうしたいところだが……」

チラッと、人ごみの中に一瞬眼を向ける。

「……！！ 教会か……」

野次馬にまぎれて、黒い礼服が数人。

—サーチエ（Sirtech）教の信者である。

——教会は魔力を「神に背く悪魔の力」として、魔法の使用だけでなく、“精霊憑き（スピリウル）”の存在すら否定している。

そんな者たちの前で能力を行使すれば、厄介なことになりかねない。

「でもロンガ！今はそんなこと言ってる場合じゃ……」

少し離れたところから、子供の母親らしい人物の叫び声が聞こえる。

「ああ、わかってるさ」

そう言ってロンガは地面を蹴って燃え盛る建物へ突っ込んでいった。

ψ

ψ

「チツ……せめて水ぐらいかぶって来るべきだったか……」
後悔しても今更遅いな。

その上、炎と煙で前も見えんし……

「ゴホツゴホツ……!!」

ち……まあ、この中なら分からだろ！」
ブレイド・オブ・シルフ

【風霊の大剣】を発動し、その風圧で炎と煙の壁を切り開いていく。

階段は……あそこか！

三段飛ばしで階段を駆け上がり、三階まで一気に上がる。
たしか、一番奥だったな……!!

《バキイイイツ》

ドアを縦に砕き斬ると子供の泣き声が聞こえてきた。

「そこか！」

つて……え……？

泣き声の発信者をみたとき、思わず絶句してしまった。
いや、発信者達というべきか。

「「「うわああああああん!!!!」」」

さ……三人も居やがる……!!!!

「ゲホツゲホツ!!」

くそ……煙も充滿してきやがった……

「あああ!!!!もう!!全員こつち来いやあああああああ!!!!」
「!!」

「へ、わあああああ!!!!」

驚く子供を無理矢理抱えてドアから出る。

外に教会の奴らがいる以上、さっき使った方法は使えない。
ってか、そもそも両手にガキ抱えてる時点で使えないんだが。

「二人までなら片手で抱えられるんだが……

うおっ!？」

焼け落ちた天井が炎を纏って落ちてきた。

「「「うわああああああん!!!!」」」

「だああああ！！叫ぶんじゃねええ！！！！
って、ゲエツホゲホツ……！！」

自分で叫んでむせてたら世話あねえな……
両手がふさがっては神器スギルも使えないので、無理に炎の中を行くしかない。

くそ……煙の吸いすぎだ……意識が……

子供達も咳き込み始める。

まずい、速く、はやく――

そのとき、

「おい、君！！大丈夫か！！」

炎の向こう側からその声が聞こえた時は流石に救われた気がした。

Ψ

Ψ

「ロンガ！ 大丈夫だった？」

「ああ……まあ、な……

でも逃げられちゃった」

悔しそうに道の向こうを見るロンガ。

「もう、今はそんな事どうでもいいでしょ？

あんたが持ってきたお金も火の中だよ。

これからどうすんのさ」

「……………お前、髪下ろしてると別人みたいだな……………」

「んな事あ今関係なあああい！！！！」

「ごあつ！！ コラ、杖で殴るな杖で！！」

「あ、あのっ！」

横からかけられた声に振り向く二人。

「あ、メイコちゃん！！」

「よかった……無事だったんですね、お二人とも……………」

そう言いつつも、その眼はずっとアイアを見つめていた。

「……？ どうしたの？」

「アイアさんって、髪下ろしてると印象全然変わりますね！」

「ブフっ……！！ ゲホッごほっ……！！」

盛大に吹き出すロンガ。

「っな…… そ、そんなに……？」

顔を真っ赤にして狼狽するアイア。

「フフフ…… よければ私の家へどうぞ。

服もお貸しできますよ？」

奥まった、日も届かなさそうな路地にあるそこは、家と言うより、隠れ家、と言った方がしっくり来るような場所だった。

一通りの家具がそろっている——逆に言えば、それだけしかない——殺風景な部屋の中でアイアはメイコが着替えをもってくるのを待っていた。

当然、隣にはロンガがいるが、彼は普段の服のままなので着替える必要は全く無い。

全く無い……事も無いのだが。

彼の服は昨日から変えてない上に、火の中への特攻もあり、随分と薄汚れて所々焦げていた。

「はぁ…… 何でこんな路地裏みたいな…… 家…… なのかココ？」

「ロンガ…… ちよつと失礼じゃない？」

そこに奥からメイコが服と淹れたてのお茶を持って現れた。

「フフ、仕方ないんですよ。」

私の家は、曾祖父の代から魔法使いウィザードですから、教会の眼の厳しいこの街ではどうしても隠れ住みたいになっちゃうんです」

「でも昔からこんなトコに住んでたわけじゃないだろ？」

出されたお茶を啜りながらロンガが言う。

「ええ、まあ……」

あ、それよりアイアさん、はい服！」

「ああ、ありがとね

……ええーっと……」

チラリ

「……………」

空気を讀んだのか、ロンガは無言のまま外に出て行った。

Ψ

Ψ

外に出たオレは、火事のことを考えていた。

どう考えても、建物を二つに割るような、あの発火の仕方はおかしい。

少なくとも普通の人間の仕業ではない。

だとすれば、あの火事は——いや、そんな事考えなくてもわかつてる——間違いなく、“スピリウル精霊憑き”の仕業だ。

“ウィザード魔法使い”の可能性も考えたが——今。

今この場で、その可能性は消えた。

Ψ

Ψ

路地から出て、しばらく行つたところの大通り。

当然、火事も収まっている上に、現場から離れたこの場所の、この時間に、人通りなどあるはずも無く。

故に。

ロンガは目の前に現れた、黒衣の人影を、

「敵」と見なしていた。

「^{スベリウル}精霊憑き」……しかもやる気満々か」

ロンガがそう判断する材料は何を隠そう、その人物の右手に握られた、巨大な剣——それも、今日の宿のように轟々と燃え盛る——大剣だった。

「ち……何だお前……何の用でもいいが、今日はもう疲れてんだ。またにしてくんねえか」

ジャキッ

人影が、大剣の切先をロンガに向ける。

明らかな敵意の表れ。

「……………!!」
けれどロンガの驚きは、全く別のところから沸いて出たものだった。

燃え続ける剣が、松明のようにその持ち主のシルエットを浮彫りにする。

女だった。早い話が、その体型が女でしかありえないものなのだ。

「……とりあえず……またにはしてくれそうに無いな」

「……………」

黒い革素材のコートは中心に大きく十字架があしらわれ、教会の関係者であることを示していた。

顔は同じく革素材であろう仮面に隠れてわからないが、その後ろからは赤茶色の髪の毛がふわりと腰まで流れている。

タン！という音は、その髪をなびかせて地面を蹴り、ロンガに襲い掛かる音。

「オオオッ

……………」
「くっ、^{ブレード・オブ・シルフ}【風霊の大剣】ッ！！！」

ガギイイイイイイ！！！！

剣と剣、風と炎がぶつかり合う。

ゴオオオオオオオオ！！！！

勢いのやまない炎と大きな刃を防ぎながらロンガは問う。

「ハ、今日の火事もお前か！」

どうやら狙いはオレなみたいだが、わざわざ建物ごと燃やす必要あつたのかよ!？」

「……手加減はしたさ。お前らだけなのがわかっていたら全力で灰にしてた」

仮面の裏から聞こえてくるくもった声はされどやはり、女のものであった。

「お前ら……って事は狙いはオレだけじゃないのな」
「……!!」

大きく後ろに下がって距離を取る女。

チャキツ

ロンガは左手に持った大剣の切先を相手に向けて続ける。

「まだまだ訊きたいことは沢山あるんだぜ」

「貴様に……答えてやることなど何も無い」
同じく彼女も切先をロンガへ向ける。

ゴツ

風と炎が勢いを増す。

「風絶……」「劫火……」

互いの必殺技が放たれる——その刹那——

「ちょ……ちょっと待ってください!!!!」

「……!!?」

息を切らして現れたのは他ならぬアイアとメイコだった。

「ハア……は、は、ゴホツゴホツ!」

全力で走ってきた上に大声で叫んだためか息切れするどころか、むせるメイコ。

「ロンガ、ちょ、ちょっと……待って……!」

アイアも息を切らしながらメイコの言葉を引き継いだ。

「メイコ……何故戻ってきたの?」

「……!!?」

ロンガの驚きは、されど無理も無かった。

なぜならその声は、先程までロンガの戦っていた女から発せられていたからだ。

「……お姉ちゃん………」

「なにいいいい！！？ し…姉妹！？」

「……………」

連続で驚きの声を上げるロンガに対し、すでにメイコから聞かされていたのか、アイアは言葉を発さない。

「私は……止めに來たの……」

もう……やめてよ、キョウコお姉ちゃん！！

これ以上……そんなことしないで……！！」

メイコの嘆願に、黒衣の女、キョウコ・フレアライズは感情のこもらない声で答える。

「…今更……今更後には引けないわ。

あなたが望むなら、今、此处で、終わらせてあげる」

右手の大剣が炎の唸りを上げる。

「！？ あぶなっ……！！」

「劫火（ごうか）一剣嵐（けんらん）！！」

炎が、無数の刃となり、まさに嵐の如く、メイコに襲い掛かった。

ポタッ… ポタッ…

「あ……ロンガ…さん………」

「へえ……身体を張って女の子を守るなんてカッコイイじゃない。

でも…いくら風の守りがあるからって、今の技を真正面から受けちゃマズいんじゃないの？（まあ、“受けきれた”時点で賞賛モノなんだけど）」

「ハ……風絶…一閃！！！！」

「フン」

「アイアア あああ！！！！」

「エイク・チェイン！！」

「なつ……!？」

突如、キョウコの足元に氷の鎖が現れ、地面に足をくくりつけた。

「フン！こんなもので、動きを止められる訳が！」

だが、その一瞬の隙だけで充分だった。

「風絶一閃！メガ・咬・スラあッシュ！！！」

《ゴオオアアアアア！！！！》

「くっ……劫火劍嵐！！！」

[illegible]

その夜最後の風と炎のぶつかり合いは、僅かな差だが、風の勝ちだった。

最後に残った風の刃の欠片が、キョウコの仮面を破く程度の。

だが、それがロングには、なぜか悲しいものに思えて。露になっ

「お姉……ちゃん……」

キョウコは声を放ったメイコの方には一瞥だけして、白み始めた東の空へ顔を向ける。

「ふう……いいわ、決着はまたにしましろう白髪のボウヤ」

「白髪って言うんじゃねえ、コレは銀髪だ！」

それからボウヤじゃねえし。

オレの名前はロンガだ！！

ロンガ・シーライドだ！！！！

そもそも、こっちは何で襲われてんのかもわかってねえんだよ！

ふざけんなあ！！！！」

ロンガが呼吸も挟まずに放った台詞には、軽い笑みだけを返して朝靄の中へ消えていった。

Φ

Φ

「ちょ、ロンガ！」

「どういうことだよ、オイ。」

アレがお前の姉貴！？

何なんだアイツは！

何で“スピリチュアル精霊憑き”が教会にいる！

何でオレを襲ってくるんだ！

お前は全部分かってて何も言わなかったのか！？」

「……エイク・ブリザ！！」

がき——ん

「があああ！！つ、冷たあああああ！！？」

「頭冷やせ、バカ。」

そんな一気に詰め寄られても答えられないし！　メイコちゃんが可哀想でしょうが！」

「あ、いえ……大丈夫です……」

順番にお話しますから……」

✕

✕

メイコの回想

「あの頃のフレアライズ家」

私のお父さんもお母さんも、二人とも立派な魔法使いだった。
ウィザード

毎日研究は欠かさなかったし、近くの森で怪物が暴れたりして街が危なくなると率先して戦ったりもしていた。

街の人や、教会の人たちには好かれなかったけど、私はそんな両親が誇りだった。

私自身はそんなに魔法は上手くはなかったけど、そんな両親の血を引いていることが誇らしかった。

きつと、お姉ちゃんもそうだったと思う。

私より七歳も上なのに魔法は私と同じぐらいしか使えなかったけれど、私よりもずっとずっと努力していたし、いつも私には優しくしてくれた。

私は、とても幸せだった。

あの日、私の四歳の誕生日までは。

メイコの回想、続き

「すべてが狂い始めたあの日」

今から言えば、十二年前になる。

その日、私はいつもより早く起きた。

何のことはない。ただ自分の誕生日に浮かれていただけだったと

思う。

隣で寝ていたはずのお姉ちゃんは、すでに布団から抜け出した後だった。

「お母さんももう起きてるかな」

寢室のドアを開ければ、短い廊下。

とたとたと、リビングへ急ぐ。

リビングのドアを開ける前に、私は視界が少し霞んでいることに気付いた。

目をこすってみるけれど、なんら変化はない。そういえば変なおいもする。

不審に思いながらもドアを開ける。

「ああ。おはよう、メイコ」

そこに、お母さんとお姉ちゃんは居た。

所々火が燦つて煙が薄く立ち込める部屋の中に、床に倒れ伏したお母さんと――

右手に大きな、火を纏った剣をもったお姉ちゃんが。

✽

✽

「^{スキル}器”の暴走……か」

ロンガが頭をかきながら呟く。

「あるの？そんなこと」

「ああ。^{スピリチュアル}“精霊憑き”が^{スキル}“神器”を使うときは普通、遺伝子に刻まれた感覚と、無意識になんだが、過去に使ったときの記憶を元に魔力で生成するんだけど、一番初めの発動は過去に使った記憶なんてあるはずもないし、そもそも^{そんなモノ}神器が使えらることも知らないから、その代わりに何か、強い感情や想いが引き金になることが多いんだ。

でも、幼い、心の不安定な時期にそんな発動をすれば、御し切れ

ずに滅茶苦茶な発動をしてしまう……なんてことがままある」

「へえ……」

「きつとお姉ちゃんもショックだったんじゃないでしょうか。かなり動揺してましたし」

「まあ、大体暴走やらかすと、人を傷つけるからな。相当な心の傷だろうよ」

「大人の精霊憑きスピリウルでも暴走つてするの？」

「さあ……大人になってから初めて発動させることもあるし、情緒不安定なまま使うとかするとあるかもな」

「……」

「で？ さっきの回想、もう充分長いけどまだ続くんだろ？」

「え、長い……ですか？」

「ああ、もう！」

まだ第二閃の中盤終わったトコなのに！

無駄に行数浪費しないの！

作者としてもそろそろ展開早めていきたいところなので、お願いしますメイコさん。

「は、はあ……わかりました」

当然、アイアの台詞後の作者のぼやきはメイコには伝わっていないので。お忘れなく。

✽

✽

メイコの回想、続きの続き

～そしてお姉ちゃんは～

どこに行っていたのか、外から帰ってきたお父さんに火は消し止められ、火事にはならなかったけど、お母さんは体の左半分に大火

傷を負っていた。

サラマンダー

スレリウル

お姉ちゃんが火竜を宿す“精霊憑き”だと分かった後も、お父さん、お母さんは変わらずお姉ちゃんに接した。もちろん私も。

だけとお姉ちゃんはそれっきり口数も減った、笑顔も減った、私の相手もあまりしてくれなくなった。

魔法も全く使えなくなつたみたいだった。

そしてお姉ちゃんは、何年か経つと家を出て行った。

その頃からだ、教会が異能者を取り締まる目がきつくなつていったのは。

メイコの回想、続きの続きの続き

（地獄）

五月の、暖かな日だった。

その日の午後、私は外から家に帰ってくるところで、家の中の異変に気付いた。

家に居るはずの両親の声が聞こえない。

代わりに何かが爆ぜる音。

煙の匂い。

「まさかっ……！！」

ドアを開けてそこにあつたのは、あの日の出来事をそのまま地獄にしたような空間だった。

燻るところか燃え続ける家具、壁、床。

全身火達磨で倒れるお母さん。

真つ二つにされたお父さん。

十字架をあしらった黒いコートでそこに立つお姉ちゃん。

「ああ、お帰り、メイコ」

「な……なん……で………？」

ジャキッ

「せめて、せめてあなただけでも逃げて、メイコ」
お姉ちゃんは、泣いていた。
「逃げてメイコ。私の前に現れないで。
でないと、あなたも殺しちゃう」
「なん…で、あ、ああ、ああああ、
ああああああああああああああああああああ
あああ……………」

※ ※

ああああああああああああああああああああああ
あああああああああ
「え、ちょ、メイコちゃん!？」
「な、おい!！」
回想の途中、メイコが頭を両手で鷲掴みにするように耳を押さえ
て、両眼をギリギリと見開き、うつむいて震えながら叫びだした。
「だ、大丈夫か…………？」
「あア、ああああ…………、
だいじょ…う、ぶ、です…………」
「全然大丈夫に見えないよ！
汗もびっしょりじゃない！」
「ハア、ハア、ホントに、大丈夫、です」
「……………つらいか？」
「……………つらい、ですが…きっと、お姉ちゃんもつらかったんでしょ
うね。
私は……………解ってあげられなかった」
「……………」

ロンガは悲しそうな眼で、息を整えるメイコを見つめていた。

「それから…私は、にげて、にげて、コレだけ持って逃げて、ココに逃げ込んだんです」

短剣のような魔道具を机の上において、言う。

「ココもこの魔道具も、お父さんが魔道の研究に使っていたものです。」

それから、後から知ったことですが、あのコートは、教会の中でも“断罪者”と呼ばれる人たちが着る服だそうです」

「“断罪者”？」

アイアの疑問符にロンガがその辺の本棚にあった本を取り出し、項を探して音読する。

「『別名、肅清者、教会の異端、魔力やその使用を「異端」の技として認めていないサーチエ教会が、異教の取り締まりや、街を守るため特例として異能力の使用や戦闘を認められた集団』……だ、そうだ」

「つまり…異能者の掃討のために、異能者を使うってこと……？」

「そういうことです……」

「大方、自分に宿るチカラを罪にでも感じて神とやらに許しを請うたんだらうよ」

「でも…いくらなんでも、あんな、他人を巻き込むようなやり方でいい訳がないです。」

教会がよしとしてるのが信じられません」

「まさか、この街で焼け跡が多いのは……」

「……全部、お姉ちゃんのせいです……」

初めは元いた“魔法使い”^{ウィザード}の家、残った人たちが同志の死や教会を恐れて移住すると、旅でやって来た“魔法使い”^{ウィザード}や“精霊憑き”^{スピリット}が泊まった家。

でもまさか、他にたくさん人の居る宿まで襲うとは……

ごめんなさい！私があそこに泊めなければ襲われることもなかったのに……！！」

目に涙を浮かべて謝るメイコ。

「まあ、そんなことはどうでもいい」

「「どうでもいいって!!」」

「それより解んねえのは、なんで両親まで殺す必要があったのか、いくら“断罪者”とはいえ、教会のイヌになつたわけでもないだろうが」

「なにか弱み握られてるんじゃない？」

「メイコちゃんだけはわざと逃がしてるし」

「ハ、かもな。」

「で？　メイコちゃんとやらはどうしたい、いや、どうして欲しいのかな？」

「え……」

「（あ……この顔は……）」

アイアはロンガと始めてあつたとき、大蛇と対峙したときのロンガの表情を思い出していた。

「お姉ちゃんを……助けてください」

今までで一番意志のこもった声で、メイコは言った。

Φ

Φ

「で？　助けるって言ったって、あんたにどうにかできるの？」

次の日…厳密には同日の午後、町の往来に行くアイアは、いぶかしむような口調で隣のロンガに言う。

「まあ……囚われの姫を助け出すわけじゃねえから、物理的手段だけじゃ無理だよな」

「だから、あんたに説得とかが出来るとは思えないんだけど？」

アイアの言葉にロンガは笑って答える。

「まあ、『拳で語り合う』とかいう言葉があるくらいだし、何とかなるんでねえ？」

「適當！！！？」

あんだ解つてんの！？

今回は自分だけの問題じゃないんだよ！？」

「解つてる。わかつてるさ。でもな、アレがいまさら言葉でとまると思うか？」

十中八九とまんねえよ。それも解つてる」

「……………」

だから、とロンガは続ける。

「だからオレが、一発ぶっ飛ばしてやるんだよ。教会とやらも気に入らねえしな」

その台詞は、左手の拳を右手で受け止めながら。

「ロンガ……………」

「あの……………ロンガ・シーライドさまでございますね？」
「！！！！！！」

突如、後ろからかけられる声。

振り向くとそこに居たのは、白いローブの男。細く黒い髪の毛をボサボサにのばし、鋭い目でこちらを見つめていた。

「ワタクシ、キロ・ウッドビレッジと申します……て、そんなことはどうでもいいですね」

突如現れた謎の男。けれどロンガはその男の首に、ロザリオが掛けられているのを見逃さなかった。

「教会……………か……………？」

「……察しがいいですね。」

ええ、キヨウコ・フレアライズ様がお待ちですよ」

「ロンガ……………！」

ロンガは、前に出ようとするアイアを遮って言う。

「ここはオレ一人で行く。」

お前はメイコと一緒に居ろ」

「え、ちよっと！何でよ！！」

昨日の傷も治ってないのに！！」

「ハア……お前の魔法、氷ばっかだろ……」
「あ」

「あの炎の大剣に通用なんてしないし、メイコは戦うどころか、一人でほっとくのも心配な状況だ。」

「だから、オレが一人でぶっ飛ばしてくる」

「……………わかった。」

「…無事で帰ってくるよね？」

杖で小突いてくるアイアにロンガは、

「そんなもん、言わずとも心得てる」

そう胸を張って答えた。

「さあ、案内してくれるんだろ？」

そういつて、キロの方を向く。

「はい。」

キヨウコ様は大聖堂でお待ちですよ」

Φ

Φ

「大聖堂……言うだけあってデカイな……」

もちろん、建物のでかさでビビるロンガではない。

「では、ワタクシはこれで」

頭を下げてから去っていくキロという男。

「ハ、まあ、巻き込まれたくは無いよな」

ロンガは門の取っ手に手を掛けた。

「ようこそ。ロンガ君」

サーチエ教の聖堂には、信者席というものが存在しない。信者はミサなどでは石でできた床に正座をし、ひれ伏すようにして神に祈

るのだ。

この地形条件は、心の底から神など信じていない二人にも好都合だった。

つまり――

「先に確認しときたいんだけどさ、ココ……そんなに簡単に崩れたりしねえよな？」

――好き放題暴れることが出来る、と。

「安心して。それに今日は他の人は誰もいないし、信者もたまにしか大聖堂には入らないわ」

キョウコは長い髪の毛を後ろに流しながら言う。その顔には仮面はつけられていなかった。

「なるほど、邪魔は入らないってわけだ」

「私も、君が一人でできてくれて嬉しいわ。」

……思いっきりやり合いましょうか」

「カタカナで言うな……誤解を招くだろ」

ロンガの左手が、キョウコの右手が光に包まれる。

「そう？」

「じゃあ、思いっきり殺り合いましょ……！」

光が、さらに強くなる。

「“神器”^{スキル}発動……！」

そろそろ声、そして、

^{ブレード・オブ・シルフ}

【風霊の大剣】……！！」

^{ブレード・オブ・サラマンダー}

【火竜の大剣】……！！」

形作られる、二振りの、されど形の全く違う、大剣。

ロンガとキョウコの視線が交錯する。

^{ブレード}

両者共に大剣タイプの神器、宿る精霊は互いに四大元素クラス――

「（パツと見、互角ってトコかしら……）」

^{デフォルト}

「（基本性能は五分――差がつくとすれば……）」

両者の剣が、虚空を斬り裂く――

「風絶一閃……！！」「劫火剣嵐……！！」

ガアアアッ

炎と風の刃が激突する。

「なっ……！！？」

五分に終わるかと思われたその激突は、実にあっさりとロンガの負けだった。

「うおおおおー！！！」

ドガガガガアア！！！！

間一髪、劫火剣嵐をかわしたが、みっともなく床に手を着くハメになった。

「ほらあ、言っただじゃない。思いつきり殺^ヤり合いましょってさ」

「ハ……前は本気じゃなかったのか……」

（てか、そもそも“メガ”でギリギリだったんだ、押し切れるとはおもってなかったが……こうもあっさりとは……）

「ホラ、次行くよ？」

二方向からロンガを挟むように放たれる火炎。

「ハ！ただの炎で、オレに通用するわけねえだろ！！」

ロンガも剣を振り、風圧で薙ぎ払う。

地面を蹴り、キョウコへ接近する。

轟、と襲い掛かる炎をかわし、防ぎ、

ガキイイイイ！

剣による小競り合いに持ち込んだ。

ギリギリギリ……

「お前……なんで断罪者なんかになったんだよ……？」

剣の切先はどちらにも動かないまま。けれど攻めたはずのロンガは逆に押されていた。

何せ、身長と変わらない大きさの剣が燃え盛る炎に包まれているのだ。その熱量は半端ではない。

「それをきいてどうするの？ 何も知らないボウヤの癖に！！！」

「ぐっ……」

さらにきつくなる炎。

今も、逆巻く炎を風で防いでいなければ、ロンガはとつくに消し炭になっっていることだろう。

「劫火!!」

「なっ!!? 剣を振らずに……!!?」

「剣嵐!!!」

ゴガガアア!!

「がああああ!!!!」

高く吹っ飛ぶロンガ。

そこにさらに追い討ちがかかる。

「劫火剣嵐!!!」

逃げ場の無い空中で、ロンガの眼には襲い来る炎がはつきり映っていた。

「ぐ……!!」

Φ

Φ

メイコの隠れ家で、アイアは向かいで机に伏したままのメイコを眺めていた。

「……メイコちゃん、生きてる?」

「はい……生きてます……」

「何か食べる?」

「いえ……食欲無いです……」

そっけない返事にアイアは溜息を返す。

今日アイアが戻ってきて、キョウコが使者を通じてロンガに宣戦布告をしたと聞いてからずっとこの調子なのだ。

「何で……お姉ちゃんはあることやってるんでしょうか……」

「多分……何かを守るため……じゃないかな」

「守るため……ですか……」

顔を上げずにアイアの言葉を反芻する。

「どうしてそう思うんですか？」

「うーん……なんていうか、ほんとーに、なんとなくんだけど、そんな必死な感じがしたんだ」

「必死、ですか」

メイコは顔を上げた。

「じゃあ、私は、どうすればいいんでしょうか」

「さあ？それは自分で考えなよ」

ニコリと笑ってアイアは言う。

「さあ、つて……（いきなり適当ですか）」

「ねえ、メイコちゃんさあ……」

「はい？」

自分のポニーテールの毛先をいじりながらアイアは頬を緩めて言う。

「行っちゃおうか、教会大聖堂」

Φ

Φ

ガラッ

瓦礫を払って起き上がる。

キョウコの攻撃は、ロンガを容赦なく壁面に叩きつけていた。

「く……」

ブレード・オブ・シルフ

【風霊の大剣】を横に振って持ち直す。

体中傷だらけだった。

「ふーん……やっぱりタフだねえ……」

「ハ、それほどでも」

ボタリ、と血の塊が床に落ちる。

「お前……やっぱり強いな……」

「それはどうも」

ニコリ、と笑み。

「ハ、劫火剣嵐……単純に炎を刃にするのではなく、小さな炎の刃の集合体か」

「へえ、気付いたんだ。流石ね。」

そう、劫火剣嵐は【ブレード・オブ・サラマンダー火竜の大剣】の炎を固めて圧縮して作った小さな刃の集まり。

その刃の一つ一つが小さいけれど爆発性があることも……気付いたでしょうね」

「なるほど、固体でないもので刃を作ろうとすれば、どうしても切断力は落ちてしまう。けれどコレなら殺傷力は補えるってわけだ。」

（それどころか強くなってる気がするし！

しかも一つの塊じゃないおかげで、相殺するのも難しい……）」
歯噛みするロンガ。だが、その類は吊り上っていた。

「（やっぱ楽しい！！小細工じゃねえ、知恵と力を使って戦う感覚！！）」

ハッ！次こそオレの番だ！！！

喰らえ、ギガ（バイト……）一咬・スラッッシュ！！！」

「！！！！！」

切先が、地面すれすれを通る軌道で、薙ぐように振られた剣から放たれた風絶一閃。

《ゴオオオオオオオオオオオオ》

それは、“メガ”のときのような、一つの塊とは違い、いくつかの風の刃が纏まってさらに大きな刃を形作っていた。

「望むところだッ！！」

劫火！！！！剣ッ嵐！！！！」

おもいつきり剣を振って放たれたソレは、今まで一番デカく膨大な熱量を誇っていた。

「「おおおおおおおお！！！！！！！！」」

《ドガアッ！！！！！！！！》

大聖堂を揺らす、大きな音。

魔力により生成された風と炎が、互いに限界を超えて弾けた。

「ぐっ……！！（五分……！？あの子は……！！？）」

埃や煤で数瞬遮られていた視界が明ける。

そこにロンガはいなかった。

ただ、キョウコとロンガの間、ちょうど中間辺りの床には深々とロンガの大剣が突き刺さっていた。

「逃げ……ちがつ……！！！」

反射的に、上を見る。

《ゴオオオオ》

その剣は、はっきりと風を放っていた。

それどころか、その剣を中心に、大聖堂を埋め尽くすほどの風が逆巻いていた。

「うおおおおおおおお！！！！！！！！」

上空から風を纏って落ちてくる、否、突っ込んでくるロンガ。

「風絶！散刃！！！！」

「さ……散刃……！！？」

壁に、床に、天井に、風による刀痕がついてゆく。だが徐々に、風の刃が精製される範囲がロンガの周りに限られてくる。

やがて、ロンガ自身が幾筋かの刃を纏うような形になった。

「おおおおおおおお！！！！」

「あああああ！！！！ 劫火剣嵐！！！！」

もう幾度目かもわからない——風と炎のぶつかり合い。けれど——

「（な、破れ、ない……！？）」

“炎を押し固めた刃の集合体”である劫火剣嵐が、ロンガの腕、いや身体に纏わる風の刃に削り取られていく。

「な、なんで……っ！！」

いや、劫火剣嵐は相殺以上の働きはしていた。ただ、ロングの風の刃の数が減らないのだ。

$$\Phi$$
$$\Phi$$

結果から言えば。

た。

風絶散刃。この技は、地面に突き刺した剣を中心に風を発生させ、ロンガの意志で魔力を込めて、風の刃を作り出すものである。

状攻撃が可能なのだ。

で押し切ることができなかった。

難しく、炎を削り取ることはできても、狙ったところに正確に当てるのは難しかった。

ロンガが魔力の連続使用に限界を感じる直前、乱暴に放った、文字通りの一閃だった。

「ち……気にいらねえな」

腰掛けたロングが話しかける。

消費がデカいってことだ」

ロンガの身体は、キョウコ以上にボロボロだった。

「……あのままやってれば、魔力切れでオレの負けだったんだ」

「……………」

「なのにお前は、途中でわざと炎を緩めただろ。そのおかげで、散刃を打ち込む隙ができた」

「……ただ……『疲れた』と思っただけよ」

「……………訊いてもいいか、なんで“断罪者”になったのか」

✽

✽

私が、初めて“神器”^{スキル}を使ったのは十一歳のとき。

そのときから私には、いや……多分その前から、私には居場所がなかった。

もともと少ししか使えなかった魔法も、その日からなぜか全く使えなくなった。

魔法使いの家系だけで、教会や信者達からは白い目で見られるのに、“更なる異端”が家に居ることが世間に知れたらどうなることか。

何年か経ったある日。

夜遅く外から帰ってきたお父さんの機嫌は悪かった。

「教会のカタブツどもめ……」

「異能者狩りだと？ふざけやがって……」

「お父さん、異能者狩りって何の話です？」

「どうもこうも、この街から魔法使いや魔術研究者を残らず追い出す気だ。」

すでに何人が断罪者が集まってる」

「……ココも危ないんじゃないんですか？」

「……あの子のこともありますし……」

聞いてしまった。

「そうだな……“スピリチュアル精霊憑き”がいるっただけで、教会からしたらもう家ごと、格好の迫害対象だ。全く……不幸な子だよ」

聞いてしまった。

キィ

「……!」

もう寝ていると思っていたのだろう、小さく開いた扉の音にお父さんとお母さんは驚いた様子で振り向いた。

「キョウコ……」

聞いてしまった。聞いてしまった。

きいてしまった。きいてしまったきいてしまったきいてしまった。

——もう、この家にはいられない。

氷

氷

「なるほど、それで家を飛び出して協会に助けを求めたわけだ。

親を殺したのも教会の?」

「ええ。『穢れた血で神の加護を受けることは許されない。自らの血族の血をもって、穢れとの決別をせよ』なんて、大層なことを言われたわ……」

「……」

「でも、メイコだけは……メイコだけは、どうしても……」

キョウコの目には、涙が滲んでいた。

「アイツは……結構しっかりやってるみたいだし、気にしなくてもいいんじゃないか?

お前らならこの街出てもやってけただろ」

「逃げるの? 教会から? はあ

……無駄よ。私が“断罪者”を続ける理由の一つが、人質よ。も

ちろん正しい意味じゃないけれど、本気になれば私やメイコの命なんて軽く吹っ飛ぶわ」

「……ふざけるな」

「……！！」

「何だお前、結局怖いだけか？」

バカ言ってんじゃねえよ。

少しでも今の状況を変えたいと思うなら、自分で変えに行ってみやがれ！！自分の足で歩いて見やがれ！！

臆病なお前に巻き込まれる奴らはたまったもんじゃねえんだよ！

！

「ロンガ……」

そうね、ホントにそう。もっと早く……気付いていれば……」

そこまで言っで、キョウコの意識は途絶えた。その目から流れた涙が顔に筋を残していた。

その顔を見下ろしてロンガは、

「ハ、辞世の句でも詠んだつもりかバカめ。

急所も一応外れてるし、それほど大きな傷でもない。すぐに治療すれば、大方死なんだろう」

そう独り言を言った。

ロンガの耳には、二人分の足音と、扉を開く音が、はつきりと聞こえていた。

ψ

ψ

二日後――

私たちはゼドソンを出ることになった。

一命を取り留めたキョウコさんは、メイコちゃんとも仲直り（？）してみた。

これからどうするのか、どうやって罪を償うのか、二人で話し合
っていくそうだ。

「アイアさん、ロンガさん、またいつかお会いしましょう」

「うん。今度はもっとゆっくりお話しようね！」

「ロンガ、ちよつと……」

「ん？」

キョウコさんに手招きされ、耳を近づけるロンガ。

ボソボソツ

「~~~~~!!!!!!」

一気に真っ赤になった。普段の肌が白いせいか、すごく分かりや
すい。

「え！？なに、何言われたの!？」

「フッフ、それは秘密よ、アイアちゃん」

「……ホントに何言ったのよお姉ちゃん……」

ロンガさん茹であがった海老みたいだよ」

「ハ、な……にやんでもねえよ……」

その程度の台詞で囁む辺り、絶対なんでもなくないだろう。

ψ

ψ

セドソン西門で別れを惜しむロンガ達を、遠目から見つめる視線
があった。

西門近く、喫茶コース。

その窓際の席で、コーヒーをすするキロ・ウッドビレッジ。
キョウコがロンガを呼ぶために遣った、教会信者である。

「ええ……はい。いまからセドソンを出るようです。……ええ、
“
サラマンダー
火竜”は負けたみたいですが生きてます」

テーブルに置かれた、罎體をかたどった蜘蛛。その腹から出る二

本の太い糸。その先端は膨らんで小さな玉になっており、キロはそれを耳にはめていた。

「成長率で言えば“風^{シルフ}霊”よりも“火^{サラマンダー}竜”のほうが今回はよかったようですね。

もつとも、“風^{シルフ}霊”の方の基本スペックも侮れませんが……………はい……………了解です。

次は直接接触してみます。

……大丈夫ですよ、殺してしまうことは無いでしょうが、こちらが負けることはもつと無いです。……ええ、それでは」

長らく、独り言のように何者かと会話してから、キロは向かいの席に座る女に声をかけた。

「グラム、そろそろ行くぞ」

「ん、わかった」。

でも後、三皿は食べさせてえ」

グラムと呼ばれた女の前には、すでに建築材料十二皿の塔ができていた。

「……どう考えても食い過ぎだ……」

キロと比べて数段は若い、いや、幼いこの少女の何処に朝っぱらから十五皿もの料理が入るといのか。

しかも、すべてディナー級の量と、バカにできない金額の物だった。

「ハア……あ、そうだお前、ムラマサはどうした？」

「ん、それならあそこ」

そういつてグラムは、店のカウンターのほうを指差す。

全身真っ黒なソイツは、なんと店の主と談笑していた。

しかし、そいつには小さな翼があり、大きな耳があり、拳句の果て、二本の尻尾があった。つまり、翼の生えた黒い猫又、である。

「ムラマサ、そろそろ行くぞ」

「ん？そうか。うむ。楽しかったゾ店主よ」

小さいせいか、その翼には飛行能力は無いらしく、普通の猫よろ

しく、床に下りてキロのほうへ歩いてきた。
「さあて……」

では、「暴食のキロ」始動しますか！」

暗雲が、立ち込め始めた。

――終わり

第二閃――

第三閃『黒猫と精霊憑き』

第三閃『黒猫と精霊憑き』

自分は捨てられたのだ、と思った。

このくだらない能力ちからを持つ前のことは思い出せない。

多分……非力な怪物モンスターだったのだろう。

その非力さゆえに、バカな人間どもに捕まって、なにやら実験台にされたようだ。

消毒液の匂い。白衣の人間。目に映る手術道具、魔術道具。

死に逝く同類たち……

口くな餌も貰えず、自分もすぐ同類たちと同じところに逝くのだ
と
思
っ
て
い
た。

しかし、

「ったく……此処の奴らは……おい、大丈夫かお前」

予想を裏切って、差し伸べられた救いの手。

だから。

そんな馬鹿者の力になれるのなら、

自分の……小生の、このくだらない能力ちからも悪くない、と思った。

Ω

Ω

がさがさ、ガサ

「えーっと……」

セドソンからいくらか道を行った所で、アイアは荷物を漁っていた。

「……何をしてるんだ？」

アイアの後ろの木の、さらに後ろから現れたのは白い髪、白い肌、白い服の少年、ロンガ。

「んー、探し物……あ、あつた!!」

アイアが荷物の中から引つ張り出したのは水晶のネックレスだった。

「ああ、それか。」

そういや着けてたなそんなの」

「ふう……火事で燃えてたらどうしようかと思った……」

「大切なんだな」

「うん。宝物なんだ——って、着替えた？」

アイアがやつとロンガの方へ振り向くと、彼の服装は若干だが、前と違っていた。

「ハ、まあ、せつかく貰ったし、前のはボロボロだしな」

ロンガの着ていた、白い半袖の服は、戦闘やら火事の建物への特攻やらで、ぼろきれに近い状態になっていた。

それを見たメイコやキョウコが仕立ててくれたのだ。色は結局白だが。

「うーん……長袖ってあんまり着ないんだよね……寒いのが平気だしな……」

「でも似合ってるよ？」

それにしてもいろいろ貰ったね」

「ああ、そうだな……」

ロンガ達がキョウコ達に貰った物は服だけではない。

食料や貨幣、その他色々、である。

「で、次はドコ行くんだっけ？」

「とりあえずこのまま行けばファフロットだな」

「ファフロット？」

「ああ、ぶつちやけ次行くトコ決めてなかったからな……メイコが勧めてくれたんだ」

「何かあるの？」

「なんか古代遺跡……が近くにある……らしい……」

そう言いながらロンガは、空を見上げて何かの匂いを嗅いでいた。

「……どした？」

「……急ぐぞ、一雨来そうだ」

Φ

Φ

ロンガ達の大分後ろ、二人と一匹の奇妙な一行はいた。

「ム、一雨きそうじゃ、いソいではどうか」

唐突に言葉を発した、二本の尻尾を揺らしているソレは当然人間ではなく。

小さいが翼を持った、黒猫だった。

「げーマジで？ ……降り出す前に追いつけるかな……」

その猫、ムラマサの目線遥か高く。

ボサボサの髪をかきながらばやくのは、ロンガ達の前に教会信者として現れた事のあるキロ・ウツドビレッジ、という人物。

「あははは、多分無理じゃない？」

目線はキロよりも頭二つ低く。

間延びした声で、キロの希望を打ち砕いたのはグラム、という名の少女。

「グラム……元はといえば、お前があの後追加で十皿も喰うからだろ……」

イミルさんから貰った旅費がもう尽きそうなんだが……」

「だいじょーぶだよ。あのおじさんからお小遣い貰ったし」

そういつて、グラムが掲げたのは、金貨や銀貨が大量に入っているであろう皮袋。

「……てめえ……」

んなもん持ってたったら、食費ぐらい自分で払えやあああああ
あ……！」

黒猫が溜息。

「……サきが思いやられるの……」

Φ

Φ

ザアアアアアア——

「ハ……結局は降られると思ってました……」

雨宿りのため仕方なく道を外れ、森の巨木の下に避難した二人。

「まあ、あの流れで降られないのは二次元の世界じゃ掟破りだね」

「小説は二次元……なのか……？」

「それにしても、ヒドイ雨だね」

アイアはそう言いながら、荷物の中から地図を引っ張り出す。

「（こいつ、またサラツとオレの突っ込み流しやがった……！！）」

「え……と……」

多少憤るロンガを気にすることも無く、アイアは地図を睨む。

「……アイア、それ上下逆だ」

「ふえ、あ、地図って上下あるっけ……？」

その言葉に、ロンガは苦笑いを隠せない。

アイアはしばらく地図をジッと見つめていたが、突如、地図を

ロンガに突き出し、

「わ……私には無理……」

と言う。

「ハ？（無理って……何が無理なんだか）」

ロンガは受け取った地図を、雨に濡れないよう注意して開く。

「お、この近くに村があるな……」

どうせ樹の下じゃ、雨を凌ぐにも限界があるし、ちょっと行ってみつか？」

「えゝ……どっちみち濡れるじゃん……」

そのとき。急に吹いた風が、森の木々を揺らした。

「……行くか？」

「……行かせてください……」

樹が揺れれば、当然、水滴も落ちる。

結局、アイアもびっしょりだった。

Φ

Φ

その看板には『デイルズ』と書かれていたようだった。

アイアは、二つに割られ泥まみれになったその看板を杖でつつき、
呟く。

「廃……村……？」

「……だな」

最早木材の塊となった家屋を眺めながら、返答を返すロング。

「多分……怪物^{モンスター}か、争いか……」

どちらにせよ、雨宿りどころじゃないな」

雨はまだ降り続けている。

「荷物は一応濡れても大丈夫なようになってるけど……このままじや風邪引きそうだよ」

「ハ……そうだな、とりあえず屋根の残ってる所探して休むか」

Φ

Φ

キロー一行がデイルズに着いたのは、そのしばらく後だった。

「わぁ……ボロボロだ」

「酷い有様ジャの」

「ちっ……アテが外れたか……」

雨宿りさせてもらおうと思ったんだが」

キロの歩みに、泥が跳ねる。

それを気にも留めず、気だるそうに傍らの奇妙な黒猫へ視線を向ける。

「奴らの匂いとかわからないか？」

「小生は犬ではないシ、この雨ではな……」

そもが、奴らの匂いなど嗅いだことが無いゾ」

「あ、そうか」

ドビシャツ

「!!?」

後ろで、盛大に泥が跳ねる音。

振り向くと、

「うう……」

グラムが木片につまずいて泥の中につっぷしていた。

「おいおい……何やってんだよ、もう……」

「えへへ、転んじやつた……」

「ドロドロじゃねえか……」

「……ん……?」

「どしたの？」

「見るムラマサ。気付かなかったが……」

「ム、なるほど。コレは運がいいの」

キロの頬が両側につりあがる。

「どうやら、予想より早く帰れそうだ」

キロとも、グラムとも、当然ムラマサとも違う、二人分の足跡がそこにはあった。

Φ

Φ

デイルズ村、廃屋の中。

「とりあえず、雨がやむまでこの中だな」

「うう……早く服乾かしたい……」

「……外出てようか……？」

「……」

「……なんだその目は」

「意外に空気読めるんだよね、ロンガって」

「どういう意味だ、コラ」

『いい気なものじゃな』

「「！？！？！」」

突如響く、不吉な声。

「何！？」

「おい、アレ……」

崩れ落ちた玄関から外を覗くと、降りしきる雨の中、一匹の黒猫がちょこんと座っていた。

「黒猫……？なんか不吉……」

「そうか？オレの住んでたトコじゃ、黒猫は幸運の象徴だったぞ？」

「なんか尻尾二本あるし……」

あの猫が喋ったの……？」

「とりあえず普通の猫じゃないな。」

尻尾の多い怪物は珍しくないが……」

当の黒猫は雨の中微動だにせず、二人を見つめている。

「おい、そんなとこにいないでこっちに来いよ」

と、ロンガが廃屋から身を乗り出した瞬間。
彼の身体は宙に浮いていた。

「な……！！？」

「が……っ！！！」

ドシャアアアアア

泥の中に叩きつけられ、呻くロンガ。

その数瞬後、アイアが杖を持って雨の中へ躍り出る。

「誰……！？あんた達！！」

おそらくロンガを吹き飛ばした張本人であろう、幼い印象の少女。
その僅か後ろに控えるのは……

「あんた……確か……！！」

「改めまして……」

ボサボサの黒い髪を、手袋をした手でかきあげて、彼は名乗る。

「キロ・ウッドビレッジだ。」

ロンガ・シーライドに用がある」

「オレに……用……？」

泥の中から立ち上がったロンガが不審そうに言う。

「そう、お前に用がある。」

そんなわけでお嬢さん、通してもらっよ」

キロの足元の泥が跳ねる。

「——ッ！！」

あっという間に、ロンガとの間にいたアイアをかすめ、距離を縮めてしまった。

「こいつ……速い……！！」

「ロンガ……！！」

ヒュザ！

「……！！ 痛ッ……！！？」

ロンガのほうへ振り向いた、アイアの右頬に“何か”が切り傷をつけた。

「キロの邪魔しないであげて、おねーちゃん。」

次、向こうへ行こうとしたら……首を飛ばすよ」

にこやかな顔で、恐ろしいことをサラッと口にする。

「く……」

アイアは杖を構えたまま、齒噛みするしかなかった。

殴りかかるキロの攻撃をかわしたロンガは、応戦するべく自らに宿る能力を発動する。

「スキル 神器」【風霊の大剣】！！！」

左手から溢れ出る魔力が、光を放ち、風を纏う巨大な剣を具現する。

「へえ……やっぱ ブレード “大剣” だけあってデカいな……重くないの、ソレ」

「……ぶつちやけ重い。だが安心しろ。扱いには困らねえ。

それより、教会のヤローがオレに何のようだ」

その顔は、不機嫌そのものだった。

「やめてくれよ。確かにあの時は仕方なく教会の一信者として名乗ったが……」

その顔は、嫌悪感に満ちていた。

「神なんてクソくらえだ。信じる信じない以前に、ダイツキライだね。」

そもそもオレも スピリチュアル “精霊憑き” だ」

「……なんだ、気が合いそうじゃねえか」

そっついながらもロンガは切先をキロに向ける。

「おっと……何の用か」 だったな。

それは……」

一呼吸。

「オレと戦って生きてたら教えてやるよ」

「残念だけど……邪魔しないでって言われてそう簡単に引き下がる女じゃないの、私は」

「そう……じゃーどうする？」

グラムの間延びした声は、されど殺気を帯びていた。

「なんとしてでも。邪魔してやる……！」

両手に持った杖を振りかざし、魔法使用の為の呪文を詠唱する。

「エイク・ブリザ・ウオク（氷属性：冷気の弾丸）

エイク・ブリザ・ウオク

エイク・ブリザ・ウオク……！」

「（連続同時詠唱……！？）」

「三連……！」

アイアの魔導具である杖が振り下ろされると共に、三つの冷気の塊が、グラムへ襲い掛かった。

アイアの魔力により生成された冷気弾を、それと同じくらい冷めた目で、グラムは見つめる。

「（氷による物理ダメージより、“凍らせる”ことを優先する 冷^{ブリザ}気の呪文かあ……

……つまらない）」

ス……と、グラムの右手が肩の高さまで上がる。

「……？」

「ウィドン・アスピ（風属性：槍の呪文）」

その瞬間、命中する直前だったアイアの冷気弾がすべて、かき消された。だけでなく。

「ぐ……！！？」

図太い風の槍が、アイアの胴体をかすった。

ニコリ、とグラムは微笑む。

「（やっぱりこの子……強い……）」

諦めたように、溜息をつくアイア。

次の瞬間、泥が跳ねるのも構わず、ロンガ達とも、グラムとも違う方向へ全速力で駆け出した。

「キロお」

近くでロンガと睨み合うキロに声をかける。

「ああ、追え。オレはコイツと戦ってるから」

「うん。わかった」

「……………」

「さて。こっちもおっぱじめようか」

「……………ああ、その前に一つ」

「なんだ？」

「あの女、お前の趣味か？」

「……………！ ま、頼れる相棒、ってところさ」

ズグ、とキロの足がわずかだが、泥に沈み込む。

一瞬で距離を詰め、後ろに引いた右手の拳を打ち込む。

「（素手……………！？）」

ガキイイイン

雨の村に響く金属音。

キロのしている手袋は、手甲なみの硬度があるようだった。

「“神器”^{スキル}は使わないのか……………？（手袋をしているとは言え……………リ

ーチの長い大剣相手に、素手同然でやる気か？ 何考えてる……………）」

大剣でキロの拳を押し返そうと力を入れた瞬間。

ビキ

「……………！？」

キロの顔には、凶悪な笑みが貼りついていていた。

右手を押し付けたまま、左の拳底をロンガの剣に打ち込む。

ビキッ

「な……………」

ビキイイイッ

粉々に砕け散る大剣。

「ちいいっ！！」

キロの追撃を、ギリギリのところであわして、泥に深い足跡を残し距離をとる。

「ち……あたると思ったんだけどなあ。

いい運動神経してるじゃねえか」

軽い口調でキロは言う。

「……バカな……」

（魔力で生成したものは言え、鋼を超える強度の大剣を……^{フレード}拳底で砕いただと……！？

しかも……あんな軽い一撃で……！）」

「ホラ、次のを生成しなくて良いのか？」

「うるせえ、考えてんだよ！」

「悪いが、シンキングタイムは長くないよ」

「うおっ……！」

ボクシングのように、連続で拳撃を放つキロ。

「チッ、とりあえず……」

「ん、」

ゴッ、バキイイイイイイイ

攻撃を避けるばかりのロンガに、キロがほんの僅かの焦りを感じ、生じた隙。

ロンガの右ストレートが顔面にクリティカルヒットした。

「ごぶあああああ……！！？」

泥の中へ転がり落ちるキロ。

「が、き……きさまあ……」

鼻血をどくと垂れ流しながら立ち上がる。

「ハ、わりいが、素手の喧嘩でも負ける自信は無いんでな」

「なるほど……さすが、あのクソ重たそうな大剣を振るうだけはある。怪力だ……」

「（とは言っても……奴の能力がはつきりしない以上、あまり近づきたくはねえな……）」

「（さて……二度とあんなの顔面に喰らうのは勘弁だな……やっぱ

慎重にいくか……)」

両雄の視線は、雨の中、交錯する。

Φ

Φ

「は——は——……」

「おねーちゃん、もしかして体力無い？」

「！ うっさいわね！！ 敵に心配されたくないわよ！！」

「でも、どうしてこんな所まで？」

キロたちと大分離れちゃったじゃん」

「……どうせあそこにしても、あんた達の邪魔なんて出来ないし、むしろロンガの邪魔になっちゃ悪いからね」

白けた眼でメイコは応える。

「ふーん……でも、勝つのはキロだよ」

「……それはどうかな？ ロンガだって強いんだから。」

それに……ここなら私も本気で戦えるわ」

鋭い眼で、グラムを睨む。

二人の視線が、雨の中、ぶつかり合う。

それが合図だったかのように。

アイアは杖を、グラムは手を、雨粒の落ち続ける天に掲げた。

「一エイク（氷属性：）……」「一ウイドン（風属性：）……」

「一ブリザ（冷気の）……」「一ブロー（轟風の）……」

「一ウオク（弾丸）……」「一アスピ（槍）……」

ぶつかり合う、二つの魔法。

しかし、アイアの魔法は、あっさりと掻き消える。

「ぐっ……！！」

風の槍は、アイアの肩をかすった。

「くっ……（ダメだ…風の魔法に冷気の魔法じゃ、打ち勝てない…」

… それに……」

グラムが、緩く開いた手をアイアに向ける。

「……！！また……」

「—ウイドン・レオ・ブロー・ウォク（風属性：轟風の巨弾）
……！！！」

ドゴオオオオオオオ……

Φ

Φ

バラ、バラバラ、バラ

虚しく崩れていく【ブレード・オブ・シルフ風霊の大剣】。

ロンガの左手首は、キロに掴まれていた。

「（振り払え、ない……？」

いや……力が入らない……！？）

ドッ

キロの拳底が、ロンガの下顎に決まる。

「があ……っ」

受身を取りながら、空中で再度“神器”を生成する。

風纏う大剣は、泥の中に足と片手がつくのと同時だった。

「ち……（何だったんだ今の……）」

「おいおい……いくつ目だその大剣。」

そんなデカイの、生成するにも限度があるだろうに

「とりあえず、敵のお前が気にすることじゃ……ねえっ！！！」

「ん？」

ゴウ……！！

ロンガが縦に振り切った剣から放たれた風の刃が、地面の泥すら

巻き上げて、キ口を襲う。

「……無駄なんだなコレが」

キ口は左手を前に突き出すだけで、他は一切動かない。

風の刃はその左手、否、手袋に触れるだけで、ただの風と化した。

「……！！なるほどな……」

剣の切先を後ろに流し、ロンガは突進する。

「こいよ、お前の剣はオレにはきかねえ」

「ハ……それはどう……」

ザグッ

キ口の目前で、斬り上げる軌道で放たれた斬撃は、降り続く雨でぬかるんだ地面に食い込んだ。

「……かなっ……！！」

「……！！？」

剣が纏う風圧が強くなり、ロンガが思いつきりその剣を振り上げる。

強い風に、やわらかい地面が抉られ、泥が激しい波のようにキ口を襲った。

「ぐ……」

後ずさり、顔にかかり、目に入った泥をぬぐうキ口。

「……は……！！！！」

しまった。と思った瞬間は、少しばかり遅かった。

がら空きのキ口の胸へ、思いっきり泥を蹴って、ロンガの斬撃は放たれた。

Φ

Φ

「あ、防げたんだあ」

「く……間に合った……」

「エイク・レオ・ロウル（氷属性：巨壁の呪文）、巨大な氷の壁を造りだし何とか防ぎきったものの、分厚いソレは半分近く挟られていた。

「（やっぱ、“弾丸”じゃ、破壊力はあっても、貫通力は無いなあ……）」

グラムが、手を突き出し、次の呪文を唱えようとしたとき。

「ねえ……あんたも“魔法使い”^{ウィザード}なら知ってるよね？」

氷の壁の向こうからアイアが話しかける。

「氷属性から派生した氷属性は、ある程度なら水も操れる……ってさ」

「なにを……」

「エイク・リセド」

アイアがぼそり、と呟いたその呪文。意味するのは…… 解氷。

水となつて弾けた氷壁が、地に落ちないうちに、杖を前に――落ちる水の流れの中に突っ込んで、さらに呪文を唱える。

「エイク・ガトル・ウオク（氷属性：雹弾連射）……！！」

水が、すべての水が、大量の雹弾となつてグラムに襲い掛かかる。

「なっ……く、きゃあああああ！！！」

盛大な音を立てて、廃材の中に崩れ込んだ。

Φ

Φ

「……………！！ はあ……はあ……………」

キ口は脇腹を押さえ、片膝について喘いでいた。

されど、その顔には笑みが。

「クク……やっぱりお前もきつかったんじゃないかねえか……そらあそうだ、もう六振り目だぜ、その大剣」

ロンガは、地面に突き刺した剣を支えに、こちらも片膝をついてい

た。

「ハ……きつちり数えてんじゃねえか……

でも……………」

「？」

「きいたな、オレの剣」

その眼には、鋭い闘志が。

「ククク……だが、オレの有利はかわらねえぞ？」

痛みに震えてはいるものの、その声には、戦いで優位に立つ者の自信がこもっていた。

「気付いたんだろ？オレの能力」

「……この、身体の中が空洞になるような感覚……魔力を奪う能力^{ちから}か」

「そのとおり。正確には“触れた魔力を吸収し蓄積する能力^{ちから}”。

^{グロブ・オブ・ベヒーモス}

【暴食獣の手袋】。それがオレの“神器”^{スキル}の名だ」

ゆつくりと立ち上がりキロは言う。

「魔力と生命力は密接な関係がある」

一歩、ロンガに近づく。

「つまり、急激に大量消費すれば、生命活動に支障をきたす。ってことだ。

お前は、決して魔力消費の少ない“神器”を連発で生成した上に」

また一歩。

「さつき、掴まれたよな？オレに」

「ハ……直接魔力を奪った……って訳か」

「そう、そのとおり」

また一歩近づいて、左の手のひらをロンガに見せ付けるように突き出す。

その行動に、ロンガの脳は超速で回転を始める。つまりは、『予感』する。

「（奪った魔力は……）」

「吹っ飛ぶか？」

ヴォミットブローー！！！！

「るおおおおお！！？」

キ口の左手から放たれる、高密度の魔力の散弾。

ロンガは思いつきり、剣もその場に置いて、両手まで使って後ろに跳び退る。否、飛び跳ねる。

ほんの数瞬前までロンガのいたところは、放射状にごっそりと抉られていた。

「あぶな……」

「まだかわせるか……」

キ口は少しばかり苛立っていた。

そもそも、最初は地道にロンガの魔力を奪い、立つ事も出来なくてやる予定だったのだ。

それをコイツは……

「ああ……もういい、もうダルイ。

出て来い、ムラマサあ！！！！」

「——！！？」

少しばかり、ではなかった。

すでにキ口の苛々は、沸点ギリギリだったようだ。

雨空に、響いたキ口の声。

数瞬遅れて、茂みの中から現れる、小さな黒い影。

「あつ……！！さっきの猫！！」

「フウ……全く。結局小生が出張る事になるとは……

自分に合わぬ戦い方をするからじゃ」

小さな羽根を震わせて、化け猫はばやく。

「悪かったよ。

そもそも、この能力自体オレの趣味じゃねえんだ。それに相性が

悪い」

「ン？」

「魔力量が多い……ってのもあるが、魔力の回復速度が異常だ」

「ナルホド」

「風絶一閃——!!」

「「どおおおおお!!?!?」」

キロとムラマサの間を、巨大な風の刃が通り抜ける。

「おい、この際その猫が何でしゃべるのかとかどうでもいい。かかってくるならさっさとかかって来い」

「どうやらこちらも。苛々していらっしやるようで。」

「OK、じゃ、第二幕といきますかあ!!」

その声を合図とするかのように、ムラマサが上に飛び上がる。

ゴキ、メキビキバキピキ

「え……!?!?」

パシッ、とキロが右手で掴んだ、ムラマサだったもの。

反りを持つそれは、大振りの、鞘に納まった日本刀。

もつともロンガ達の世界には、『日本』という国など存在せず、したがって『日本刀』という概念も存在しないのだが。

「猫刀^{マオトウ}」ムラマサ……オレのもう一人……いや、もう一匹の相棒さ」

「ハ、喋るばかりか、刀に変身とは……」

何なんだその猫……で？ただの刀でもないんだろ？」

「そのとーり」

キロは鞘に納まった状態のその刀を左手で引き抜くと、

「コイツは、魔力を加えることで、その魔力に『変質』を与える。

——つまり、こういうことだ」

ほとんど手首のスナップだけで、軽く振る。

ロンガの背後の細い木が、真つ二つになって、堕ちた。その切り

口は、鑢をかけたようになめらかだった。

「……………!!!!」

「“放つ”だけから“切断”への『変質』。コレがムラマサの能力。

そして——」

チャキ

「なに……?」

ガラガラガラ……………

木屑や木片の山を崩して、起き上がり、目の前のポニーテールを睨む。

「さすが、おねーちゃん……… っところかな。

連射^{ガトル} の呪文の弾数をあんな方法で増やすなんてさ」
頭から流れた血が、右目を越え頬まで流れている。

「……… なんで？ キミは何で戦ってるの？

あのキロって人のため？」

グラムとの戦闘が始まって以来、ずっと消えない疑問の一つを訊いてみる。

「……… そう。キロは私を救ってくれた。
だから私は」

自らの右手首を掴むと、

「キロの為に戦ってる」

無造作に、引き千切った。

「ふえっ、ちよっ、何やってんの！！？」

飛び散る鮮血。グラムの肘から下は、左手に掴まれて、垂れ下がっていた。

「焦らなくていいよおねーちゃん。

こういう風にできてるんだから」

「でき……… てる……… ？」

見ると、左手の中の右腕は、全く別のモノに変化していた。

「呪式魔導具【ブラッドボックス】開放」

血液が集まってできたような、赤黒い立方体は、グラムの魔力に反応し、縦に横に、乱雑なリズムで回転する。

「なんて……… 禍々しい………」

ああ、そうそう、と、右腕に内蔵されていた魔導具を開放した少女は言う。

「コレ、キロに使っの止められてるんだ。だから、黙っててね。

って言っても、おねーちゃんが生きてたらだけど」

「なっ、物騒なことをさらりと……」

アイアの言葉は無視し、左手の半浮遊状態で回転をする魔導具を天に掲げる。

「ああ、もう！」

アイアも杖を握りなおし、グラムと対峙する。

「ウイドン・レオ・」

黯いハコが、不規則な回転の速度を著しく上げてゆく。

「サイ——」

ズドオオオオオオオオオ……

「……！！！！？」

グラムの切り札は、出す前に、巨大な地響きで遮られた。

「まさか」

二人の思考にできる、一瞬の空白。

「……キロ！？」「ロング……！？」

女の勘は鋭い。

このときグラムが、持っていた右腕だったモノを元に収め、アイアより先に、アイアには追いつけない速度で走り出したのは、彼女にとって大きな幸運であり、同時に小さな不幸だった。

Φ

Φ

鎌鼬を伴って放たれる、大質量の風の奔流。

その場だけ、超局所的に竜巻が来た、と言っても、事情知らぬ他人なら信じるだろう。

しかし、大地にそんな傷跡を残した大技も、魔力の回復が完全ではなかったためか、威力は四割減。そればかりか、魔力の枯渇による筋弛緩で、身動きすら取れない。

「くそ……そう易々と“テラ”なんかやるもんじゃねえな……………」
いつの間にか雨のやんだ曇天を、泥の上に大の字で見上げる。

その首を掠めるように、地に突き立てられる、反りのある刃。他でもない、キロ・ウッドビレッジである。

「油断した。全く、やってくれる」

満身創痍。触れた魔力を吸収し、ソレに攻撃性能を加え吐き出す“神器”【暴食獣の手袋】は両手共に消え、特に左腕はボロボロで、もう二度と——ということは無いだろうが、当分の間は役目をなさないだろう。

「さて……とりあえず、オレの勝ちだが……お前、『七罪星』って知ってるか？」

「しち……ざい……せい……？」

大地に身体を投げ出したまま、ロングは上から落とされた固有名詞を鸚鵡返す。
おつむ

「ああ。ぶっちゃけるが、オレの目的は勧誘だね。協力する気は無いか？」

「……何の為にだ」

「それは今は言えない。というか、オレも事実よく分かってないんだ」

「は？」

『ハ』ではなく、『は？』

泥の上に大の字、という情けない格好でありながら、『こいつなに言ってるんだバカヤロー』と、本音のこもった視線と共に口から漏れた音。

「まあ、それでも……探してるんだろう？」

■■■■・■■■■■■■■

「キロの言い放った人名は。刹那、ロンガの思考を停止させた。」

「てめえ、どこまで知って——」

チャキリ、という音が、ロンガの反応を遮った。

「もう一度訊く。協力する気は無いか」

「なんのことはない。キロが右腕を動かせば——即ち断れば——オレの首が飛ぶ。それだけだ。」

と、ロンガは今の状況を冷静に、正確に観ていた。

Φ

Φ

一方、冷静ではあるものの、自分の居る場所さえ、正確に攫めない憐れな迷子が一人。

「あの子……あんなに足が速かったなんて……キロって人よりも速いんじゃない……」

その気になれば、ロンガ達から離れることなど叶わず、あっという間に追い付かれていただろう。

「あれ……？ココ、ドコだ……？」

自身の憐れさを今更気付いたアイア・シルストームだった。

Φ

Φ

グラム・ブロックエッジが目撃したのは、まさにその瞬間だった。

答えはNO。それも、思いつきりの侮蔑と、意地と、見栄を込めたNO。

その返答に、キロは、

「そうか。じゃ、」

泥に刺さっていた猫刀ムラマサ。それを上に引き抜くと同時、放り上げた。

くると、ロンガの上で回転しながら落ちる、堕ちる、オチル。もう駄目か。思わず眼を瞑った、その刹那。

ドスン

鳩尾に、ムラマサが突き刺さった。

「キロおゝ」

「ん、おお、グラム。……一人？」

「大丈夫。殺してないよ。って、キロこそ大丈夫!？」

キロ左腕を見た瞬間、血相を変えて走ってくる。

「げほおっ！げほ、げほ、がは……」

何者かが咳き込む声。

「げほ、…ハ…… どういうつもりだよ、まったく……」

そこには、腹を抱えてうずくまる白い奴。

「そんな眼で睨まれてもノお。恨むなら小生でハ無く、キロじゃろ」
落下する最中に、猫の形態に戻ったムラマサは、宙返りよろしく、落下の勢いでロンガの鳩尾に突き刺さったのである。

「どういっつもりか、と言われてもな。オレにお前を殺す気はもとよりなかったんだ。」

まあ、その一撃は左腕の借りかな」

「ハ、随分安い借りだな、オイ」

多少痛みと魔力枯渇から回復したのか上体を起こす。

「ん、だつてさ」

「ホリイ・チーユ」

GRAMの左手が優しい光に包まれる。その光を浴びたキ口の左手の傷が、みるみるうちに塞がっていった。

「ほら、わりと簡単に治るし。つっても、少々リハビリがいるだろうがな」

「治癒……魔法……？」

「さて、ま、オレはお前の勧誘には失敗したわけだが。ロンガシライド。お前がアレを追うなら、きつとまた合う事になる。

どっちにせよ、お前はまだ力不足だ」

言つて、ロンガに背を向ける。

「おい……」

「ああ、そうだ、どうせ旅の身なんだろう？

“ヒフトフ” って街に行つてみる、いいところだぜ、ありゃあ」
最後に一度だけ振り向いて、

「じゃ、またな」

と言つ。それに続いて、

「またね、おにーちゃん。多分あのおねーちゃん、迷子だから迎えに行つてあげなよ」

「精進しろヨ、若者よ」

Φ

Φ

ハ……あの猫は一体何歳なんだ……？
そんなことより。

あの魔法少女め、最後に余計なことを……

しかしいつまでも放っておくわけにも行かないので、ゆっくりと立ち上がる。

「ヒフトフ……か」

「あ、ロンガあ……！」

「……！ハ、ウソ、マジ？」

ロンガの視界に現れたポニーテールの迷子。

あ、いや、もう迷子じゃないか？

「よかった、戻ってこれたよあ」

「何、涙目で『奇跡が起こった』みたいな顔してやがる。普通だバカ。……まあ、お前にしたら奇跡か」

「むう。って、あいつらは？」

「去ってったよ。なんか、意味深なこと言ってな」

ふう、と溜息一つ。

「アイア……」

「ん？」

「どうやらオレは、まだまだ強くならねばなららしい」

自嘲の薄笑い。

気持ちを切り替えるように、ロンガは頭を振る。

「さて、ファフロットだったな。しばらく休んだら出発しよう」

「ふえ……さすがロンガ、切り替え早っ」

ホント、笑ってしまう、切り替えの早さだ。

ロンガにとつて、目的の為だった旅が、いつの間にか目的の達成を先送りにしても、続けていたいものになっている。

この時間を縮める、訳の分からない奴らの誘いなど言語同断である。

でも、そういえば、と。

ロンガをそうさせた一番の要因である、隣に座る方向音痴。

コイツが旅をする理由はなんだ？一度訊いた気がするが、たしかはぐらかされた。

まあ、いい。また機会のあるときでいい。

「時間は――ある」

「ん、なんか言った？」

「いや、なんでもねえよ」

空を覆う雲は割れ、其処から射した日が、なぜか気分を軽くさせた。

「あ、そうだロンガ、“ヒフトフ”って知ってる？」

第三閃――END

第四閃『魔法使いと妹』

第四閃『魔法使いと妹』

「猫が刀に？変身？」

先刻まで降っていた雨が嘘だったかのように晴れ渡った空の下、銀髪の“精霊憑き（スピリウル）”ロンガ・シーライドと、ポニールルの“魔法使い”アイア・シルストームは、廃村デイルズを後にするところだった。

「ああ、なんかこう……『メキメキ』っ……と……」

「その擬音でどう刀に変わったのよ」

「いや、ホントなんだから仕方ないだろ。そんなトコ文句つけられても」

「まあ、いいわ。そうね……多分それは、“呪具”じゃないかな」

「“呪具”？」

「うん。正確には“呪式魔導具”って言って“魔導具”は、その名の通り魔を導く道具。“魔法使い”が魔法を使うために必要不可欠なモノなんだけど……」

人間は元来、魔力を扱えるようにはできていない。世界に溢れる、“常識を破壊する”エネルギー、魔力。それを何とかして利用しようと、先人が英知を働かせた結果が“魔法”という技術なのだ。

「“呪具”っていうのは、その存在自体が魔法のようなものの」

ロンガは渋い顔。

「……解るように言ってくれ」

「つまりは、そこに在るだけで魔法のような効果や、能力を発揮する道具ってこと。」

ロンガから聞く限りじゃ、“ムラマサ”という刀の形の呪具が、

魔力の攻撃性質を変化させる能力を持っていた……ってことじゃない？」

「なるほど……でも猫に变身する刀……いや、猫に变身する刀か？そんなのあるのか？」

「同じ事二回言ってるよ！？『刀に变身する猫』ね。うーん……それも呪具の効果なのかもしれないし、別の何かがあるのかもしれないわね。（あの女の子が使ってたのも……確か呪式魔導具って言ってた……）」

「そこに在るだけで魔法……ねえ……」

「精霊憑きの“神器”^{スキル}も呪具に近いよ」

「なんか呪具って響きがなんか嫌だな……」

だが、その定義なら、神器^{スキル}もやはり呪具なのか。と、ロンガが半ば無理に納得していると、

「それにしても、風を纏ったり魔力を吸収したり、精霊の能力って多彩ね」

と、唐突にアイアが言う。

「ん？ちよつと待て。お前、本当にオレ達が精霊を宿してるなんて思ってたええよな？」

「え！？違うの！？」

驚きの新事実。

「まあ……覚醒と同時に自分の“神器”^{スキル}の能力や名前が自然と理解できたり、奇怪な能力を見てると、精霊がいるって方が説明がつくんだが」

そこで一度言葉を切って。

「表向きは、そうだな……それこそ、自分の魔力でその“呪具”とやらを生成しているに過ぎないんだよ」

「その能力の出所が精霊なんじゃないの？」

「ハ、魔力の影響で、凶暴化したり、異常な能力を持ってる動物を怪物^{モンスター}っていうのは知ってるな？」

怪物^{モンスター}。かいぶつ——化物。

大昔、世界に溢れた魔力で、そうなった動物や植物を、人間はそう呼んだ。

「しってるけど……………」

「それと変わらないんだ。通常種たる人間から異常に進化した怪物^{モンスター}。それが“精霊憑き”だ^{スピリウル}」

ロンガは、少し心苦しそうに言い切った。

「……………」

「ハ、精霊、ねえ……………」

呟きながら、ロンガは廃村デイルズでアイアと交わした会話を思い出していた。

※

※

「ヒフトフ……………って知ってる？」

アイアの口から出た名詞は、街の名前。

それも何の因果か、キロとかいう、よく分らん奴に『行ってみろ』とか言われた、その街だった。

「ああ……………名前は聞いたことあるな。（ってか今さっき聞いたんだが）」

「それで、そこに連れてってもらいたいんだけど……………」

「ん？いや、別にかまわねえけど……………」

何故急に？ 言う前に、アイアが訳を語る。

「いや……………なんとなく……………」というか、ロンガ風に言うなら気が向いたから、というか」

気が向いたから。体のいい言い訳ではあるが、ロンガ自身、多用するので追求もできない。

「で？じゃあ、行き先変更？」

「いや……ココからじゃ、直線でも距離があるし、一度ファフロットによった方が」

「……………」

違和感。間違いなく決定的な違和感。

「お前——なんでそんなことが分かるんだ？ 地図もロクに読めなかったくせに」

「……………」

そうである。アイアには、方向感覚、というより、“目的地に辿り着く”という結果の為の能力が著しく欠けているのである。

「お前——」

「いや、大したことじゃないんだけど、一度家に帰って調べたいことができたというか、なんだかんだで近くまで戻ってきてるみたいだし……………」

「まだ何も言っていない。それどころか鍵括弧も括れてない」

少し間を空けて、ロンガは再度口にする。

「お前……少なくともヒフトフト、その周辺……多分ファフロットにも、行った事があるな？」

それも何度も、と付け加える。

少し迷ったように、やがて観念したように、アイアは答える。

「私……家出してきてるんだー」

決まり悪そうに、頬をかきながら。

「家出ですか……………」

また、なんとも……………」

ポニーテール。方向音痴。家出少女。

「（ハ、なんかコイツばかりキャラが濃くなってく気がするのとは気に入らないなあ）」

そんな感想を抱いてしまうロンガ。

「白髪、大剣、……………えーっと……………」

「……勝手に人の心読んだ拳句思いつかねえのかよ！なんか傷つく

なあ…… しかも『大剣』はキャラ付けになり得るのか……？って
かそうだ、白髪って言うな！！」
「ツッコミキャラ？」
「なっ たつもりはねえ！！」

※ ※

「うつひゃー、でつかー」
ファフロットは、大きな川が流れ、その恩恵で流通の中心として
栄えた街だった。

「ハ、なんか、今までで一番都会だな」
今まで通ってきた森の終わり目、街の全貌を見ることができ
る崖の上で、アイアとロンガは肩を並べていた。
「さて…… とりあえずココ降りねえとな」

ガザッ

「……………」
背後の草むら。何かの足音。
「…… ったく…… ココまで無事に来れたってのに……」
現れたのは。

《ブルル…… ブルファアアアアアア！！》

化けイノシシ。体中に骨の棘が生えた、異常なイノシシ。モンスター怪物だ。

「ああ、もう！！！！ なんて脈絡の無さだ！！」
嘆くロンガ。

「この作者は『伏線』って単語を知ってるのかな……？」
「知らなかったら小説書きとして失格だ！！！！」

言うなり、ロンガはアイアを担ぐと、

「え、ちょ、何を！？」

「ハ、こんな奴こんなところで相手にしてらんねえよ！！！！」

硬い地面を蹴って――

「ひゃっはあああああああああああ！！！！」

「まじかあああああああああああ！！！！」

崖からダイブした。

「ちよつとロンガ！！宿の三階とは大違いだつて！！」 “ぐちゃっ

”で、“ぐちゃっ”てなるって！！」

「ええい！ わざわざ引用符でグロさを強調するな！！ この程度の高さなら原形は残る！」

「原形だけ残っても意味ないんだよお！！」

当然ではあるが。ロンガも残るのが原形だけでいい筈は無く。

「神器」^{スキル}【風霊の大剣】！！！！」
^{ブレード・オブ・シルフ}

崖の壁面に突き刺された剣が、ガリガリと、ガリガリと、岩を削りながら、落下のスピードを緩めてゆく。

「……………」

「……で？」

宙ぶらりんだつた。

右腕にアイアを抱えて、左手で大剣の柄を握り、ロンガは宙ぶらりんだつた。

「『で？』もなにも……………降りるんだよ」

「ふえ、きゃっ！」

ドサリ、と地面に落ちる。

何のことはない。少しばかり停止位置が高かっただけである。

「よっ……………」

崖に足をかけ、剣を引き抜いて共に、地面に降りる。

「……ハ。やっぱそうなるか……………」

ロンガの眺める魔力の結晶、風霊を宿す大剣の神器は、凄絶な刃こぼれをしていた。

「……………」

「……エイク・ウオク」

「ごふああー！」

氷の塊が、ロングの後頭部を直撃する。

振り向くとそこには、ふくれっ面で涙目になってへたり込んだアイアがいた。

「ハ……なんだ？」

頭を摩りながら、恐る恐る訊いてみる。

「……あんたねえ！！」

何も、あんな方法で逃げなくてもよかったんじゃないの！？

「まあまあ、腰抜かしたまま涙目で怒られても……」

『可愛いだけで恐くないぜ？』そう言う前に口をつぐんでしまったのは、アイアの眼が鋭いプレッシャーを放っていたからでも、握り締めた杖に殺気を感じたからでもない。

「（オレ……絶対こんな軟派なキャラじゃなかった……！！！）」

「まったく……ツッコミキャラにあるまじき暴挙ね」

「いや、だからなったつもりは無いと」

「ま、いいや。ホラ、そんなトコで頭抱えてないで——って、ありや？」

「どうした？」

「……マジで立てない……」

「……」

ますます頭を抱えるハメになるロングだった。

Φ

Φ

一方——

日の暮れかけたファフロット。

「……食いすぎだグラム」

「むう、もごまが、もぐ、そんな事むぐ……ない、むぐぐ……もん」
そういった少女の両手には、具を挟んだパンがまだ山ほど抱えられていた。

「それが食いすぎでなくてなんなんジャ……」

その台詞はグラムの足元から。

小さな翼と、二本の尻尾を持った黒猫、ムラマサである。

「それより、キロよ。ホントに今日の最終便なのか？」

ボサボサの黒髪をした男は答える。

「ああ……そろそろ出る頃だな」

「むう、もうちょっとゆっくりしたあい」

「そうは言ってもなあ……」

そのとき、後ろから、

「あ、あの、もしかしてっ」

「「ん？」「ん？」

声をかけられ振り向くと、そこには一人の少女。

「もしかして、旅の方ですか？」

「ん？まー、そんなところか？」

「あの、こんな人、見かけませんでしたか？」

そういつて差し出した一枚の顔写真。

「「！……！！」「」

「あの……どうですか？」

「……ん、ああ、ちよっとわからねえな」

「そうですか……」

「いや……まあ、もうしばらくこの街で探してるといい。じきに見
つかるさ」

「……？はあ……」

「じゃ」

そういつて去っていくキロ一行。

「あ、ありがとうございます！」

その声は後ろから。

キロは振り向かず、手を振って応えた。

「いやー、しかし……………似てたな」

「うん。にてたねー」

「ウム。髪形変えたらそっくりじゃ」

「世間は狭い、とはこのことが……………」

「しかし、何ゆえホントの事を言ってやらんのじゃ？」

「ん……………まあ、なんというか、そんなに関わらない方がいい気がするな……………」

「それにどうせ、もうじき来るでしょー？」

「キロの誘導にあやつらが乗ってこればじゃけどな」

「なあに、絶対乗ってくる。今までアイツにとって手掛かりなんて無いに等しかったんだ。ここで乗ってこないなら——所詮その程度、ってことだろ」

「それにしてもさあ、さっきの子……………」

「ああ……………」

「ム？」

「絶対キヨウダイだよな（ね）」

Φ

Φ

ロンガ達がファフロットに到着したのは、日が暮れた直後だった。道中、アイアを負ぶったロンガが『重い』と口を滑らせ、後頭部に杖の打撃が決まること都合四回。

流石に四回目には、アイアもロンガの背から降りたが。

「……………どした？」

傍らで頭を押さえてうずくまるロンガに声をかける。

「ハ……なんか、今回オレの扱いが酷い気がする……！！ しかも後頭部ばっか……」

「気のせいじゃないの？」

「……はちゅ割方お前のせいだよ……！！」

「八割方、ね」

ちなみに残り二割は作者のせい。

「一割は自業自得だと思うけど……」

と、まあ、宿探すなら早くしないと、野宿だよ」

「ハ、昔なら野宿が当たり前だったかな」

「……………」

夜、とは言え、未だ人通りの絶えない時間。

街の通りを二人は歩く。

珍しくも、アイアが前で――

「ねえ、ロンガはさ、誰か……人を探してるんだよね」

「……ああ。正確には探し出して、そして、殺すんだ。今までソイツに対する怨みだけは忘れたことが無い」

「ふーん……やっぱり、それは忘れられないの？」

「あたりまえだ。何の為に今まで――ここまで来たと思ってる」

「でも……なんか淋しいよ」

「……お前は？何の為に旅……家出なんてしてたんだ。しかも半ば強引にオレについてきやがって……」

アイアは軽く笑って振り返り、

「迷惑だった？」

と言う。

「……いいや」

笑い返すロンガ。

「ふふ。んー、まあ……実は私も人探しなんだけどね」

「ん、そうなのか？」

ロンガの応えに、

「確かに家も大嫌いだけど」

そう付け加える。

ロンガにはそちらの方が本音に思えた。

「……………」

前を歩くアイアの顔は、ロンガからは見えない。

「……………あ!！」

「!?! どうした!?!」

もう一度振り返ったその顔は、苦笑いだった。

「……………ココ、どこかわかる?」

ψ

ψ

夢を、みた。といっても、夢だと判ったのは当然、夢が覚めた後のことだが。

上下左右三百六十度真つ白の部屋……………いや、部屋なのかどうかも怪しい空間。

白色がまぶしすぎて、壁への距離どころかその存在すら判らない。その、?い部屋セカイの中心に、オレは居るようだった。なぜか、自分の居る場所が中心だということには確信を持てた。

「なん……………だ?何処だココ……………誰もいないのか……………?」

「いるよ」

「……………!?!」

背後から声。振り返ると、子供がいた。

薄緑の服を着て、耳まで覆い隠す布の帽子をかぶっていた。性別は——わからない。

クスクス

その子供が、こちらを見て笑っていた。

「誰だ？お前はココが何処か知ってるのか」

クスクス……

笑い声。

「『ココが何処か』だって？それはキミが一番よく分かってるはずだよ、ロンガ・シーライド君」

今思えば何故なのか。この子供がオレの名前を知っていることに、そのときは何の疑問も抱かなかった。

「……………じゃあ、お前は、誰だ？」

「それも」

子供は笑う。

「キミがよく知っているはずだよ」

子供との距離は少し遠い。けれどはっきりと、声は聞こえていた。

「……………」

少し考えて、次の問いを口にする。

「ココから、この部屋セカイから出るにはどうしたらいい」

クスクス、クスクス……

子供の笑い声が大きくなる。

「このセカイから出る？何を言ってるんだキミは」

嘲るように子供は言う。

「なにも解ってなかったの？薄々感づいてるんだろ？　ただはつきりとは認識できてない」

「……………？　何を言って——」

そのとき、視界に入った“何か”。

球形をした何かは、宙に浮く穴のようにも見えた。真っ白のセカイで、オレと子供以外に、ソレだけが色を持っていた。

「よかった、戻ってこれたよぉ」

「何、涙目で『奇跡が起こった』みたいな顔してやがる。普通だバ

力。……まあ、お前にしたら奇跡か」

「これは……確かデイルズの……」

その“何か”は、アイアとの会話——記憶を映し出していた。気付けば、そこらじゅうに、色のついた球が浮かんでいた。

「あたりまえだ。何の為に今まで——ここまで来たと思ってる」
「でも……なんか淋しいよ」

「これは……ココは……」

「そう。ココはキミの精神世界。意識の底にある、カタチの無いセカイ」

「……お前の後ろにあるのも……」

子供の後ろに、幽かに、いくつかの球が見える。

「あれは……」

その球に、その子供に近づく——が。

「なんだ……!？」

一步、また一步と近づいても近づいても、その子供との、その球との距離は縮まらない。

「言つたろ？ココは意識の底のセカイだと。」

意識の底つてコトは、浅い無意識でもあるんだ。主導権は基本キミの意思にあるけれど、キミが本当の無意識下においているモノはその例外なんだよ」

「何なんださつきから!!他人のコトを知ったようにペラペラと……!」

……!!

「待て……何でオレの精神世界で、オレのまったく知らない奴がい

るんだ……」

クスクス

「さっきも言っただように、ココは意識の中でも無意識に限りなく近い領域だからね。」

ボクも、キミの無意識下の産物なんだよ」

「別の人格……か、なにか……か……？」

子供の目は、少し悲しそうだった。

「そんな安いモノと一緒にしないで欲しいな……ま、ボクも存在を忘れられたままなのは気に入らないし。知りたいんだろ？無意識に封印した、自分の記憶を」

後ろに浮かぶ例の球体を指差して言う。

「……………！！」

「ボクに勝てたら、教えてあげる」

ψ

ψ

朝。空は曇り。

「う、ふあああ……」

木賃宿の粗末な寝具のせいか、身体が少し痛い。背を伸ばせば、ペキペキと音が。

何か夢を見てた気がするんだけど、なんだったかなあ……

「あれ、起きてたの？」

開いた窓から外の街を眺めていたロングに声をかける。

「ん、ああ……」

応えつつも、窓の外から眼を離さない。

「何か面白いものでも見えるの？」

「ん、ああ……やっぱ都会だな。」

「こんな時間から外に人がいる」

「ああ、朝市でもあるんじゃない？」

「『あるんじゃない？』って、お前、この街には来たことがあるんだろ？」

「んー、でも久しぶりだしなあ」

「いや、ホント久しぶりなんだよね。」

「すると、ロンガは思案顔で言う。」

「ここからヒフトフまではどれくらいなんだ？ 地図を見る限りじや、まだ大分距離があるだろ」

「船で川を下るんだよ。時間的にはそんなにかからないよ？」

「なっ！ふ、船え！？」

「！！！！」

「それは、思わず身を縮めてしまうような大声だった。」

「何、どうしたの、大きな声出して」

「ハ、な……にやんでもねえよ……」

「その程度の台詞で噛む辺り、絶対なんでもなくないだろう。」

「って、そーい船つつつても、金とか大丈夫なのか？ メイコ達から貰ったのも、そこまで多くは無いだろ」

「……………」

「おい、ちゃんと中点は三点リーダーに変換しろ」

「……一話目は中点のままだったじゃない」

「過去の話蒸し返すんじゃない！」

「あんときは、作者も無知だったんだよ！」

「じゃあ直せばいいのに、作者。とは、口には出さない。」

「何だか解らないけど、誰かが『それは言わないお約束だ』とか言ってる気がする。」

「ハ、それは多分作者本人だ…… 多分面倒臭いだけなんだろうけどな！」

そうじゃなくて、とロンガは続ける。

「だから金は足りてるのかってことだよ」

「別に豪華客船に乗るわけじゃなし、たいした額にならないよ」

「要は川を下ればいいのだから、小さな船を借りるだけでも事足りる。確か半日ぐらいで着いた筈だ。」

Ψ

Ψ

そろそろ日の昇りきる頃。

二人は宿を出て街を歩いていた。

「で、どうするよ、とりあえず船着場か」

「そうね…… そろそろ、ポケツツコミの関係をはっきりさせたいわね」

「何の話をしている！？」

見れば、アイアは何か物思いにふけていた。

「もつとこう…… 完全に“ポケ”か完全に“ツツコミ”か、どちらかのキャラがもう一人いればうまくいく……と、思うんだけど、どう？ロンガ」

「だから何の話をしてるんだお前！

この作者の実力じゃ、どうせ中途半端なキャラしかできねーよ！

！むしろ無駄に人数増やすな、收拾がつかなくなるだろ！！」

「『ふやすな』と、私に言われましてですね」

なぜか敬語だった。

そのとき、アイアは、街に行く人の群れの中に、何かを見た。

それが何だったのか、ロンガには分からなかったが――

「ロンガ！ちょっと走ってくる！！」

「ハ、はぁ！？ いきなり何を……！？」

真剣、というよりも、非常に焦っているような顔。

「あつ！ちよ……」

走り去るアイア。ロンガならば、本気どころか軽く走れば追いつける筈だが、あまりに突然の行動だった為か、ただ呆けていることしかできなかった。

「……………」

思考停止。

いくらか呆然として、呟いた独り言。

「欲求不満……………か？」

大きく溜息をついて、空を見上げる。

「あ、あの、もしかしてっ」

と、声をかけられたのは、まさにそんな時だった。

Φ

Φ

「はぁ、はぁ…………」

アイアは路地の壁に手をついて、息を整えていた。

「馬鹿な……………なんで、なんで……………はぁ」

杖で身体を支え、長く息を吐く。

全力疾走だった。

「なんで、キアラがいるの…………」

嘆くようにアイアが呟いた言葉は、弱々しく、風に流されていった。

Φ

Φ

キアラ・シルストーム。

ロンガの横にいる、アイアより頭一つ——ロンガからすれば頭二つ——背の低い、髪の長い少女は、そういう名前らしい。

で、何故そのキアラがロンガの前ではなく横にいるのか、だが、キアラが若干拳動不審気味にロンガに声をかけた後、

「こんな人、見かけませんでしたか？」

と言つて、差し出した写真に写っていたのは、見覚えがあるところか、今さつき猛ダッシュで消えていった旅の連れである。

「ハ、なるほど、アイアの妹か」

そんなわけで、その旅の連れとの関係を訊いたり、軽い自己紹介などした流れで、当のアイア・シルストームを二人して探すことになったのである。

「つまり、家出した姉貴を探しに出てきた、というわけだ」

「ええ、そうです。まったく、何も言わずに家を飛び出して……

でもよかったです、えつと……」

「ロンガ、な」

「よかったです、ロンガさんと会えて」

「ハ、まあ、肝心のアイアには逃げられたわけだが……逃げるようなことなのか？」

キアラに声を掛けられて気付いたが、アイアはおそらく、街の人ごみの中でキアラの姿を認め、反射的に逃げ出したのだろう。

「でも、逃げることに無かったんじゃないか、あいつ……」

「そうですよねえ？話を聞く限りじゃ、家に帰ろうとしてるんですよ？」

実の妹の姿見て、声かけるよりも逃げるって……」

「（なんだろう、コイツ、詐欺師か偽善者かの匂いがする）」

ロンガがそんなことを思っていると、キアラからじつ……と、見

られていることに気付いた。

「……………」

「いえ、お姉ちゃんが」

「まだ何も言つてねえ」

さすがに、鍵括弧ぐらい括らせてやるべきだったか。

と、勇み足なツツコミを反省する。

その辺り立派なツツコミキャラである。

「で、お姉ちゃんが何だつて？」

「え、あ、いえ、単純に、お姉ちゃんと一緒に旅をしてるって言うから、どんな人なのかなーと……」

「ハ、まあ、考えてみりゃ、明らかに怪しいよなあ。銀髪の青年だぜ？」

もちろん『銀髪』のところに力を込めるのを忘れない。

「いえ、そういうことじゃなくて——」

「つて、ちょっと待つてくださいね？」

言つて、キアラはすたすたと、流れてくる人込みをかわして、道の反対側の路地へ向かう。

「…………？」

待つていろ、と言われてもどうしようもないので、ロンガもついて歩く。

果たしてそこにはアイアがいて——ロンガが「さすが妹。姉探しはお手の物か」などと、感心したのも束の間——

パアアアン！！！！

「こつたらところで、何晒しとんじゃ、アイア姉ええええええ！！！！」

思いつきり、アイアの頬を、実の姉の頬を張った。

「ひiiiiiiiiiiii！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいiiiiiiii！！！！」

もう一つは、これはアイアにも関係があることだが、シルストーム家は、富豪じみた金持ちの家だった、ということ。

そして。

キアラが現れて、アイアとロンガの旅路に影響が出たことは二つ。一つは、アイアの顔が少し憂鬱そうになった、ということ。もっとも、勝手に飛び出してきた家に、もうすぐ自分から帰ることに、少なからず気が進まないのもあるのだろうが。

そしてもう一つは。

ヒフトフへと、川を下るために乗る船の代金の心配が要らなくなった、どころか、“豪華”までいかなくとも、しつかりとした客船に乗れたことである。

「アイア姉え、家帰ったら、お父さんとちゃんと会ってね？」

その声には、ドスが利いていた。

ロンガからはその顔は見えないが、背後からでも充分、黒いオーラがうかがえる。

「は、はい……」

「ロンガさんは、お客人としてあたしが話をつけますから。ご心配なく」

一方、ロンガに向けられた顔はカラリと、晴れやかだった。

「ハ、ありがたいな」

こつも、同じ空間にいる人間に対して、全く違う話し方ができるものなのか。

「でも、いいのかアイア」

「ふえ？」

「妹がいるってコトは、別にオレがお前を連れてく必要は無いぞ？」
「何言ってるの、あんたもどうせヒフトフに行くんでしょ。ていうか……」

そこまで言うと、アイアはロンガに詰め寄り、キアラに聞こえないよう、声を潜め、

「私をキアラと二人つきりにする気!?」

絶つ……対、嫌よ!!」

と、後ろのキアラをこっそり指差し言う。

「（仲悪い……のか?）」

船は川を下り、ロンガとアイア、そしてキアラの三人は一路、ヒフトフへと向かう。

Φ

Φ

「……よかったですかね、“風^{シルフ}霊”以外にも、“オマ^{ウィザード}ケ”がついてくるみたいです」

ヒフトフのとある洋館の中。

キロは、目の前の椅子に座る男と会話をしていた。グラムとムラマサの姿は、無い。

「かまわないさ」

座ったままで、男は言う。

「その“魔法^{ウィザード}使い”が、グラムちゃんを退けるくらいランクの高い者なら寧ろ大歓迎だ」

ギシリ、と椅子が鳴る。

その男の身の丈は、キロを遥かに超え、その筋肉は、服の上からでも威厳にも似た存在感を放っていた。

「……直接会ってみて、ハッキリしましたよ……聞かされたときは、正直冗談だと思ってた」

「ん?何のことだ?」

「あんたが、アレの——父親だって話ですよ」

大男、イミル・ルカーソンは、邪悪な笑みを、浮かべていた。

—
E
N
D

第四閃

第五閃『揺れる夢と極寒の魔法』

私の髪は、軽い癖毛で、毛先が軽くはねている。

妹の髪は、羨ましいぐらいにストレート。

姉の髪は、私よりもっと癖が強くてボサボサだ。

それでも、髪の色合いは、若干の違いはあれど、みんなほとんどおんなじで。

性格も違う三人で、顔以外で似ている所はそのぐらいしかなかった。

けれどそんなもの、それで充分で。

私はどのキョウダイも、そんなに好きじゃなかった。

Ω

Ω

川を下る船の上。

耳を覆い隠す、白い髪を風になびかせながら、ロンガ・シーライ

ドは船の手摺に体重を預けていた。

「（もうすぐだ……）」

今までずっと、捜し求めてきた。

「イミル……」

口にするのも忌々しいが、その名を口にすることで恨みを、怨みを、確かなものとする。

「イミル・ルカーソン……」

会える確証は無い。けれど、予感はある。

「ロンガさん？」

背後から声。振り返れば、キアラがいた。

旅の連れ、アイアの妹。

実際、アイアとキアラはよく似ている。

多少、アイアのほうが背が高く、お互い腰まである髪の毛を、アイアは纏め上げてポニーテールに。キアラは切りそろえてさらりと流している。

「なんだ。アイアはどうした？」

「えーっと、あのバカ姉え、ちよつと酔ったみたいで、船内で休んです」

「ハ、そうか……」

キアラには、ロンガの顔が心なしか、青ざめているように見えた。

「ロンガさん？気分でも……」

遮って、ロンガは、

「ああ、いや、だいじょ……う、ぶおおえ、ええええええええ……」

……

吐いた。

「え、ちょ、ロンガさん！??」

手摺から身を乗り出し、川に向かって吐く。嘔吐する。吐く。

「お、おえっ……カ、は。う、げぼあっ……おええええ……」

「だ、大丈夫……ですか？」

キアラが背中をさすり、心配そうな声を向けてくる。

「はああ、はあ……。くむっ、ご、おえ、ええええええええ」

「まだ吐く!? ホント大丈夫ですか!??」

ロンガは船が苦手だった。

Φ

Φ

「あはは、なるほど、『船』って聞いたときに、慌ててたのはコレかあ」

「うええ……ぎもぢわるい………」

船内ロビーに並ぶ長椅子の上で、ロンガは寝転んでいた。船内にいる他の客がたまに視線を向けてくる。

一方、アイアは気分がよくなったようで、笑顔でロンガの隣に座っている。

「アイア姉え、笑い事じゃない。

ロンガさん、はい」

と、キアラが水を持ってきた。

「ハ、悪いな……」

水を受け取り、一気に飲み干す。

「なんで、酔うって言わなかったのさ」

「いや……船なんて久しぶりだからな……」

「まさかここまでとは思わなかった？」

アイアが言葉足らずなロンガの台詞を補足する。

「ああ……」

「（こんなに元気の無いロンガ初めて見た……）」

「……まだヒフトフまで結構ありますよ、頑張ってくださいね……」

キアラが気遣うように言う。が、それはロンガにはキツイ言葉にしか聞こえなかった。

「ハ……マジか……」

天井を仰ぎ、大きく溜息をついた。

「しばらく寝てたら？」

「……ああ……悪いが、そうさせてもらえるか」

アイアの提案に、力なく頷いたのだった。

ψ

ψ

夢を、見た。流石に、昨夜見た夢の続きなんて、見れる筈がない
と思っていたが、しかし。見たのだ。

上下左右三百六十度真つ白の部屋……いや、部屋なのかどうかも
怪しい空間。

白色がまぶしすぎて、壁への距離どころかその存在すら判らない。
その、？い部屋しよの中心に、オレは居るようだった。なぜか、自分
の居る場所が中心だということには確信を持てた。

「ハ、前と同じ……か」

オレの、精神世界。意識と無意識の狭間の、カタチなき世界。

「やあ、来たね」

またも背後から。

誰かは考えるまでもない。あの子供だ。

クスクス

前と同じ笑い声。

「ハ……前回、ものすごく中途半端なところで眼が醒めちまったか
らな……」

振り向いて、子供のほうを見る。

前と同じ、薄緑の服、頭を覆う服より濃い緑の帽子。

「確か……お前に勝てば、お前が何なのかも、オレが無意識に閉ざ
している記憶とやらも、教えてくれるんだっけ？」

クスクス

さっきより大きな笑い声。

「なにをいつてるんだい？ロンガ・シーライド。そのどちらも、ボ

クが教えるんじゃないよ」

「……………」

オレが沈黙を挟む余地を作ってから、子供は告げるように言う。

「キミが。自分で。気付くのさ。」

まあ、そのうち一つはすぐにも理解できると思うけど」

オレの記憶を映し出す、色のついた球は、そこかしこに浮かんでいる。

「…………で?『勝つ』とか『負ける』とか言っただから、何かしらで戦っただろ?」

何で戦うつもりだ?

取っ組み合い…………じゃあ、オレに分がありすぎる気がするが。

クスクス…………

子供の笑い声。嘲笑にも聞こえた。

「本気で言ってるの?」

え……………

子供の右腕が鋭く、光を放ち始めた。

まさか…………

「『戦う』んだから、これしかないでしょ?」

常識を破壊する、魔力。

そのもつとも単純かつ、もつとも純粹かつ、もつとも強力な使用法。

それすなわち——物質の生成。

ブレード・オブ・シルフ

「【風霊の大剣】…………だと!」

その形状、その大きさ、見間違っはさすがなかった。

「ホラ、キミも出しなよ。自分の“神器”スキルたる?」

……………!!

ハ、いいだろう。やってやる。

左手を強く握り締め、今まで、幾度となく振るってきた、その剣をイメージする。

「スキル

“神器”発動…………【風霊の大剣】」

クスクス

「そんな眼で睨んで……そんなにボクが、神器を使うのがおかしいかい？」

言われるまでもない。

自分の顔が怪訝に歪んでいることは自覚している。

「ハ、まあな……そりゃあ、“スピリウル精霊憑き”の能力は遺伝するし、そうでなくとも、全く同じ神器を持った奴がいけないわけじゃない。

……それが分かってても、やっぱり気に入らないんだよ……！！
！」

それは、オレの剣だ！

床を。どこまでも続く、白い、存在感のない床を蹴って飛び出した。

「おおおおおおおっ！！！！」

クスクス……

子供の、余裕の笑い声。

オレが横に振った剣を、ふわりとした動きでかわす。

「風絶——」

二人の声が重なった。

「一閃！！！！」

ガアアアッ

音を立てて、相殺される風の刃。

「……！！ 風絶一閃まで真似できるのか！」

クスクス

「真似？真似……ねえ。

ヒドイなあ、あの時からずっと一緒なんだから、ボクも知ってて当然だろ？」

「あの時……？何を……」

……！！！！

そのとき、オレの眼に入っただのは、一つの“球”。その“球”に

映し出されたのは――

「やめろおっ！――！」

剣を振り回し、“球”を掻き消す。が、またすぐに浮かんできた。同じ、“球”が。

「くっ……！！」

クスクス

子供は笑う。嘲る。

「ソレは、キミが忘れたくても忘れられない記憶。封じ込めた記憶とはちよつと違うね」

は――、は――。

今のは……そうだ……この時から……。

「何をばさつとしてるの？」

――！！

ガキイイイイン

今度は剣と剣の直接のぶつかり合い。

二回。三回。四回。幾度も。大きな剣が幾度もぶつかり合う。

「お前は――！」

ギイン

「あの日から――！」

ギギッ

「「おおおおっ！！」」

ひととき大きなぶつかり合い、そこから鏑迫り合いになる。

「くっ……！！？」

あろうことか。体格からしてオレに劣るはずの子供が、オレと、互角の鏑迫り合いを演じていた。

「クスクス……。気付いたかい？」

僕の存在を、認めるかい？」

……！！

後ろに跳んで、距離をとる。

「お前が……。あの日から、オレの“中”にいるなら……。」

だが、そんな馬鹿な。コイツらは――存在しないはずだ――だ
が――
「お前は……」

Ψ

Ψ

ス――……ス――……

あれから。ロンガは、完全に眠ってしまった。
警戒心0（ゼロ）、だ。

しかし……

横で椅子の上に丸くなるロンガを見る。

しかし……これは……

顔が火照ったのが自分でもわかった。

これは……

「アイア姉え？どうかした？ 顔赤いよ」

キアラの声で、思考が寸断された。

「ふえ、あ、いや、なんでもないよ」

「ふん……」

「な、何よ……」

キアラが悪戯っぽい笑みを浮かべる。この子がこっぴどい顔をする
ときは、本気で面白い悪戯を思いついたときだ。

ただ、その悪戯が、キアラ以外にも面白かつた例^{ためし}はないが。

「アイア姉えってさ――」

ゴクリ

自分の唾を飲む音が聞こえた。

「ロンガさんのコトス――」

バツ！

「………！！」

反射的に。杖を、キアラの目の前に突き出していた。

「そ、それ以上言ったら……凍らす……!!」

「アハハ、顔真っ赤だよ、アイア姉え」

「くっ……!!」

溜息をつきながら、椅子に深く腰掛ける。

「……そういえばさ、キアラはなんでファフロットにいたわけ？」

「なんで、って……そりゃ、あんたを連れ戻す為でしょ」

「そんな、いつ来るかもわからないのに、ずっとファフロットに？」

すると、キアラはさも当然のように、

「お父さんが『どうせアイアのことだから、しばらく迷子になった後近くまで帰ってくるだろう』だって」

あのオヤジ……!!

『近くまで』が、実際の距離的にはそんなに近くない辺り、信用の低さを感じる……

仕方ないんだけどね？

急速に戻ってきたことを後悔した……

「そんなわけで、そろそろ頃合かと、探しに出てたわけ」

なるほど……

「あ、そうだ」

何か思い出したのか、キアラが声を上げた。

「ん、どうしたの？」

その顔は、満面の笑みだった。サディスティックな方向に。

「アイア姉え、リックスとティレイ姉えも会っの楽しみにしてるからね！」

「……!! わ……わす……っ……れてた……」

頭が真っ白になって、そこに、二人分の顔だけが浮かんだ。

弟リックスと、姉ティレイ。

私は、家が嫌いと言うよりは、この……

キアラを含めた兄弟関係が、苦手なのだ。

Ψ

Ψ

なるほど……そうか……

「ハ、納得がいったぜ。」

お前が【風霊の大剣】を使えることも、お前がオレの精神の中にいることも」

クスクス

「お前は、シルフ。」

風の精霊——風霊シルフだな」

クスクス、クスクス

子供の——否、シルフの笑い声が一際大きくなった。

「クスクス、そう！その通りだよ、ロンガ」

満面の笑みで子供、いやシルフは言う。

「僕は風霊シルフ。キミに宿る風の能力ちからの象徴、結晶、そしてソレそのものの」

「だが……“精霊”なんてモノは、在り得ないはずだ。

全世界ひっくり返せば、オレ以外に風霊の神器を持つてる奴なんて、一人や二人じゃないんだろう？」

とは言え『“精霊憑き（スピリウル）”の神器スキルは、同種、同列のものが発生する場合がある』というどこかで聞いたことを根拠にしてはいるものの、オレ自身、会ったことが無いから確証はない。

目の前の精霊……子供は言う。

「それは、ボクが存在が、世間一般……普通に言われている精霊とは違うからだよ」

「どういうことだ？」

「言ったろ？ ボクはキミの能力ちからの結晶だと。」

つまり、キミの魔力の結晶。キミのイメージが魔力により、精神世界に具現した存在」

「そんな勝手な存在が在り得てたまるか。
大体、なんでオレの“風霊”のイメージがお前みたいな子供なん
だ」

すると子供は口を尖らせ、

「そんなの知らないよ。むしろボクが聞きたい」

「……そうか……で」

剣の切先を相手に向けると、チャキリ、と音が鳴った。

「まだ、勝負は終わってない」

「そうだね、でも……」

そう言う、シルフの姿がぼやけた。

「でも、そろそろ、時間切れみたいだ」

「なっ……！！！」

「クスクス、また今度だね。ロング」

「ふざけるな！！こんな意味のわからない夢、『第六閃』まで持ち
込む気が……！」

前々から思っていたが、この小説、行き当たりばつたりに書きす
ぎじゃないのか！

「キミが望むなら……また会えるよ」

「いせカイが暗転する中——子供の後ろに浮かぶ“球”を見た。
た。」

ψ

ψ

思いに反して眼は醒める。

いつの間にか掛けられていた毛布を払い除けて、ロンガは起き上がった。

「あれ、あいつらはどこに行った……？」

アイアとキアラの姿は、そこには無かった。

船の中には他の客もいるため、割と騒がしい。

「（ハ、よくこんなところで寝てたなオレ……）」

それほど体調が悪かったのだろうか。

しかし今は幾分かマシだ。

毛布をくるんでその場に置くと、おそらく外の空気でも吸いに行っているのだろう、アイアたちを探しに、ロンガは立ち上がった。ジツとしていたくなかったのだ。

確かに船酔いは治まったが、胸焼けのような気分の悪さは、未だ続いていた。

明確に思い出せる、あの夢のせいで。

果たしてアイア達は甲板にいた。

「あ、ロンガ！起きたの？」

「ロンガさん、気分はどうですか？」

ほぼ同時に声をかけてくる二人。

「ああ、おかげさまで大分マシになったよ。

しかし……随分寝てたみたいだな」

ロンガは空を見上げた。

西の空に少し茜色を残し、他は紺色に染まった空を。

「ええ、ヒフトフももうすぐですよ」

ニツコリと、キアラが笑った。

Φ

Φ

キアラの台詞に、ロンガが安堵の溜息を漏らした、ちょうどその頃。

「ひ、ぎゃ、あああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああつっ！！！」

深く暗い、森の中。

ダレかのヒメイが木霊した。

地に這い蹲った、そのヒメイの主の目の前には。長身で、長い赤茶色の髪をもち、黒いコートに身を包んだ、女。

その右手には、巨大な松明のように燃え盛る、大剣が握られていた。

「えーっと？なんだっけ、“七罪星”？」

『強い“スレリウル精霊憑き”がたくさんいる』？

この程度で“強い”なんて、その組織も程度が知れるわね」

嘲笑うかのような、否、実際嘲笑っているのだろう、そんな表情で、女は這い蹲る男を見下ろしていた。

「くっ……まさか、“サラマンダー火竜”キョウコ・フレアライズがココまでとは……」

「ああ、助けを求めても無駄よ。

この辺には集落は無いし、もう一人の方も、今頃私の妹が相手してるわ」

ギリ、と歯軋りの音。

「ふざ、ける、なあっ……！！！」

男は木に右手をついて、よろよと立ち上がる。その身体は文字通り満身創痍。満身火傷。左腕は中間——手首と肘の間——から先が無かった。

「このオレサマが！「憤怒」のラージアが！！こんなところで！！！」

ラージアの残っていた右腕が光を放ち、“スキル神器”を生成する。

が、それより速く、早く。

ブレード・オブ・サラマンダー

【火竜の大剣】による、燃え盛る一閃が——炸裂した。

「お姉ちゃん、終わった？」

背後の茂みから、キョウコの妹、メイコが現れる。ちなみに彼女は“魔法使い”だ。
ウィザード

「この人たち、なんだったんだろうね？」

傍らに転がる、左腕の無い男をみて、メイコが言う。

「さあ？ でも、“火竜”サラマンダーとか言ってたし、私というよりは、私の能力が目当てだったみたいね」

「“四大精霊”がどうとかも言ってたよ」

「ん？誰が」

「私の戦った子が。まだ転がってるよ」

後ろ、メイコが現れた方向の茂みを指差して言った。

「いろいろ聞き出したけどさ。ヒフトフに四大精霊の“精霊憑き”スピリチュアル集めて何かする気みたいよ」

『何か』が何なのかまでは教えてくれなかったけど、と付け加える。

「フン、なんにせよ、私たちには関係ないわ」

右手を開き、燃え盛る大剣を地に落とす——落ちきる前に、それは消滅した。

それを見て、メイコがわざとらしくも思い出したように声を上げる。

「そっいえば、さ……」

「？」

「“風霊”シルフも四大精霊……だったよね？」

キョウコの方を横目で見据えるメイコ。

「……何が言いたいのかしら……？」

メイコは、屈託の無い笑顔を浮かべていた。

Φ

Φ

ロンガ達がヒフトフの地を踏んだのは、日がのつとりと落ちてからだった。

「んっ……んゝ」

身体を伸ばすアイアを尻目に、ロンガは胸を抱えていた。

「……まだ気分悪いの？」

「……いや………大丈夫……だ」

「さて、と」

数歩前に行くキアラが振り返り、二人に話しかける。

「では、もう夜ですし、さっさと家に行きましょうか」

「うっ………」

と、言葉に詰まったのはアイア。

それを見てロンガは、

「お前が『帰る』って言い出したんだからな」

と、言つてやる。

「……！ なによ、まだ私何も言っていないじゃない……！」

「いや、帰るのが億劫になったのかと」

「……億劫にならない訳無いでしょ………」

家を飛び出してきたのだ——当然である。

しかし今は、戻らねばならない。

「（呪式魔導具ブラッドボックス………、猫刀ムラマサ………）」

右腕に変化する黯い箱型呪具、魔法的效果を持った刀に変身する猫。

調べる必要がある。

「（キロ・ウッドビレッジ………オレをこの街に來させて何がある？）」

教会の街セドソンで、廃村デイルズで、オレ達を、いやオレを導くような真似をして見せた男。

少なからず、イミル・ルカーソンへの手がかりを握る男。

「（後で誰かに訊いてみよ……）」

「（お父さんなら、何か知ってるかな……）」

二人の思考は、前に行くキアラが立ち止まることで、寸断された。
「ん？どうしたキアラ……」

問いかけて、ロンガも異変に気付く。

一目でそれとわかるほどの豪邸。その門の前に、黒い人影が二つ。十字架をあしらった黒い革のコート、同じく黒い革のマスク。

見覚えがあつた。

「キアラ……あれ……」

アイアが震えた声を出す。

「うん……“断罪者”だ……」

魔力や異能力を認めない教会。

その中で、自らの能力を罪、もしくは神の為に奉げるべきものと考え、教会が危険と判断した“魔法使い”や“精霊憑き”、場合によつては凶暴化した“怪物”等を削除する。

そんな者達が、シルストーム邸の前にいた。

「とりあえず……様子を見たほうがよさそうね……」

物陰に隠れ、断罪者二人を観察する。

「……不用意に出ていても面倒なことになりかねんしな……ってか、何をやってるんだあの二人、さつきから全然動いてないぞ？」

その二人は、お互い視線を合わせたり、辺りを見回したりしているものの、門の前からは動こうとしない。

「多分……待ってるんだと思います」

キアラが言う。

「ん？待ってる？」

「あ……、アレか……」

心底嫌そうな声で、アイアが言った。

「アレ？」

「なに、まだ治ってないの、姉えちゃんの放浪癖」
額に手を当てて、気だるそうに言う。

「え、姉えちゃん？放浪癖？？？」

ロンガは困惑しっぱなし。

「治るところか……アイア姉えが出てってからさらに酷くなったよ！」

噛み付くように、キアラが言う。

「それ、私のせい！？」

「あ、コラ、大きな声を出すな！」

ロンガがアイアの口を塞ぐが、もう遅い。

「お前達、何をやっている？」

「ハ、ほら言わんこっちゃねえ……」

見つかった。

「何をやっているのかと聞いている」

ずい、と、詰め寄ってくる断罪者。

「くっ……」

「お前らまさか、奴の関係者……」

数歩後ろにいたもう一人の断罪者が、そこまで言って、口を閉じた。とは言え、顔はマスクで覆われているので、ロンガ達には始めから口など見えないが。

「？ どうした？」

ロンガ達に詰め寄っていた方の断罪者が軽く振り返り、相方を見る。

「おい、お前、あれ……」

指差す先は、ロンガ達遥か後ろ。

そこには、白衣の女がいた。

医者が着るような、丈の長い白衣。ボサボサ癖毛は顔の周りを護るようにつねり、その髪の間から覗く眼は、瞑い光を宿していた。
「でたな、ティレイ・シルストーム……！」

断罪者が、声を上げる。

「シルストーム……!!?」

「姉えちゃん!!?」

「テイレイ姉え!!?」

声はほぼ同時。振り向いたのも同時だった。

「ほほう……やはりアイツの関係者か……」

「よく見ればその杖、貴様も“魔法使い”^{ウィザード}だな？」

断罪者たちがアイアの杖を指差して言う。

「“神器”^{スキル}発動!!」

「!!! こいつら、“精霊憑き”^{スピリウル}か!!!」

一人目、わずかばかり背の高い方。

「【毒鳥の長槍】^{スピア・オブ・コカトリス}ッ!!!」

長く、濃い紫色をした槍。幅広の刃には、派手な装飾が刻まれている。

二人目、よりガツチリとした体格の方。

「【大蛞蝓の曲刀】^{サーベル・オブ・マッドスラッグ}!!!!」

大きく手元の方へ反り返った鍔を持った、大き目の曲刀。その刃は、ぬめる液体で包まれているよう。

「ハ、ちようどいい！ 暴れたかったところだ!!」

ロンガは凶悪な笑みを浮かべ、左手に魔力を込める。

「“神器”発動！【風霊の大剣】^{ブレード・オブ・シルフ}!!!!」

風を纏う左右対称の白銀の刀身。巨大なソレを、ロンガは片手で横に一振りした。

「ほほう、“精霊憑き”^{スピリウル}だったか」

曲刀を持ったほうの断罪者が驚いたように言った。

「……ロンガ、私も手伝う」

アイアが杖を構えて前に出る。

「いや、いいさ、お前はキアラと……そこでさっきから突っ立つて姉貴連れて離れてる」

振り返りもせず、開いた右手の親指で後ろを指して言う。

「でも……」

「庇い立てをするなら、容赦はせんぞ!!!
いいか、その女、ティレイの魔法技術は、世界にとって非常に危険なのだ!」

「そうだ、それに今日は街中で魔法を使ったというではないか。
教会は、ソレを見逃せないと判断した!」

「ハ!教会の言い分なんて知るかってんだ!

聞く耳もたねえコトぐらい解るだろ!

ゴタゴタ言つてねえでさつさとかかってこい!!!!」

大剣と、長槍と、曲刀。三つの魔力を持った刃物と、三人分の殺気は、その場の空気を沸騰寸前にまで高めていた。

「ひっ……なんか、いつになくロンガがハイテンションなんだけど
!」

「と、とりあえず、ティレイ姉え連れて逃げよう、アイア姉え」
そのときだった。

ゾク——!!!

「——!!!?」

背中に走る激しい悪寒で、ロンガは思わず後ろを振り返った。
完全な隙。しかし、その隙を突かれる事は無かった。

なぜなら、ロンガが振り向いたときには、その場にいた全員が、
その悪寒を感じ取っていたから。いや、おそらく本当に、急激に気
温が下がったのだろう。

「Диски, как меня зовут и мою к
ровь, я уточил льда, к нашим
врагам, стем чтобы вытеснить
из вас.»

我が名と、我が血を以って命ず。氷の精よ、我が敵を封殺せよ。

詠唱される古代呪文。そして――

「デッドリィ・フローズン」

ティレイ・シルストームが、その魔法の名を呟く。
その瞬間だった。

パ、キイイイイイイイイ！！！！

「――！！！！」

ソレを目の当たりにしても。ソレは絶対在り得ないと、はつきり
言い切れてしまう。

それほどの勢いで、スピードで。

アイアの姉、ティレイと断罪者二人の間の道が、空気すら巻き込
んで、凍りついた。

否、この場合逆かもしれない。直線上の空気が、周りのあらゆる
物体を巻き込んで凍りついたのだ。ティレイ本人を除いて。

ソレを僅かだが、早く察知したロングと、ソレの正体を逸早く見
抜くことのできたアイア、キアラは、範囲外にダイブするようにし
て難を逃れたが、断罪者二人は、完全に凍りついていた。

比喻ではなく。本当に。

「ハ……………な、何だ……………！！？」

魔法……………！？　なの、か……………？」

「……………アレは……………確かに魔法ですが……………私達の使う魔法とは魔
法が違います」

幾つもの巨大な水晶が、一瞬にして其処に現れたかのように、ま
るで其処だけが、極寒の世界に堕ちたかのように。

風景すら完全に変わってしまう魔法。

「古代魔法……………」

キアラからアイアへ、台詞は引継がれる。

ψ

ψ

魔法とは、“言霊による魔力の行使”である。

本来魔力を扱う能力を持たない人間が、魔力を扱い人を襲う“怪物”や、“精霊憑き”に対抗しようと編み出した、特殊な魔力の使用法。

それは、一定の言霊を含む“呪文”の組み合わせがキーになって発動する。もちろん、それだけで発動できるわけではないが。

しかし、そういった仕組みが固定化され、それが“魔法使い”の間で常識として定着したのは120年ほど前の話。

それ以前、特に“呪文の組み合わせ”による魔法ができる以前、今から300年以上前の魔法は古代魔法、と呼ばれ、消費する魔力量、強すぎる威力、長く複雑な呪文詠唱、どれをとっても馬鹿馬鹿しくなるくらいに扱いづらく、今ではそのほとんどが忘れ去られたという……………

ψ

ψ

「……………わかった？」

「……………いつオレが、魔法についてのレクチャーを求めた？」

ロンガは額を押さえて苦笑い。

「あれ？」

「オレが言いたいのは、他人を巻き込むほどの魔法を、他人を巻き込みかねない放ち方して、悪びれるどころかずつとあそこで突っ立つたままの、お前の姉貴らしき人物は一体何なんだってことだ……………！！」

「あはは……。ご明察の通り……」

アレが私の姉です、と。

アイアは頭を抱えつつ、空いた手でティレイを指差した。

「ティレイ姉え!!! なんてことすんのよ!!!」

危うく私たちまで凍死するところだったじゃない!!!」

キアラが火のように怒り、ボーっとしていた白衣の女——ティレイに突っかかる。

「あれ? キアラちゃん、帰ってきたの?」

「今更気付いた!? 我が姉ながら恐るべしっ……!!!」

「ん……ああ、なるほど」

今更ではあるものの、説明を受ける前に状況を理解できたらしい。

「あはは、ごめんね、つい周りが見えなくなっちゃって」

頭を搔いて、ニコリと笑う。

「それでも、あんな魔法撃つことないんじゃないの……姉えちゃん
そこにアイアが近づいてきた。

「ん? んん!? アイアちゃん!?」

ティレイは不思議そうな顔のまま固まったかと思うと、ニパツと
笑い、

「アイアちゃん!! 帰ってきたんだ!!」

と言つて、思いきりアイアに抱きついた。

ぐりぐり、ぐりぐり

「ふえ、あ、姉えちゃん!? ちょ、苦し……ロンガ止めてー!!」

ぐりぐり、ぐりぐり……

「ん? ロンガ?」

「ハ……今気付いたのか……」

アイアを抱き締めたまま、顔をロンガのほうへ向けた。

「ん……」

ジッと、ロンガの顔を見つめる。

「(なんだ……?)」

じーっと、ロンガの顔を見つめる。

「……………」

じいー、っと、ロングの顔を見つめる。

その間ずっと、アイアは抱き締められたままだった。

「だ……だから、くる……し……」

「えーっと、とりあえず、アイア離した方がいいんじゃない？」

「ん、わ！」

開放されるアイア。

「ハア……全く……。えっとね、ロング、この人が」

「ちよつとまって、アイア姉え、ティレイ姉え」

さつきまで、哀れな動物を見る眼で姉達のやりとりを傍観していたキアラが、割って入る。

「とりあえず家の中入ろうよ。こんな魔法使って……面倒な人に見つかる前にさ」

その台詞は、まるで地面から突き出した水晶の群れのような、氷を見ながら。

「ん、じゃー、ちよつとまって」

そういうと、白衣の裾を翻し、凍りついた断罪者二人に近づいて行き、ポケットから、文庫本サイズの本を取り出した。

「У меня рука штрафа подогревом
тепла. Если мой голос был усл
ышан, должны те, кто исцелился
и выздоровел.

我が声聞きし熱の精よ、その熱き腕にて彼らの身体を癒したまえ。
」

一瞬で、これもまた在り得ないぐらいの速度で氷が溶け、どさりと、黒いコートの二人が地に落ちる。

その身体からは、白い煙か湯気のようなものが、音を立てて立ち昇っていた。

「うん！ まあ、これで死なないでしょ」

「……！！！！」

言葉を失う三人に、ティレイはボサボサの髪を掻き上げて振り返り、
「さ、じゃー家に帰りましょうか」
と、笑顔で言ったのだった。

第五閃——END——

第六閃『シルストーム邸と親子喧嘩』

第六閃『シルストーム邸と親子喧嘩』

昨夜のシルストーム邸は、実は大騒ぎだった。

「お前、どれくらい家出してたの？」

ロンガの問いに、アイアは気まずそうに、

「半年……くらい……かな……」

と答える。

「あー………ハ、納得した」

Φ Φ

「やあ！ テイレイにアイアにキアラ！ おかえり、我が娘達よ！

！」

「「エイク・ブリザ・ウオク……！」」

アイアの魔導具である杖と、ティレイの魔導具である本が同時に空を切り、両腕を開いて近づいてきた人物に冷気の弾丸を放った。

が、その二発の冷氣弾は、虚しい音を立てて、壁に命中した。

「はっはっは！！ 流石我が娘、氷のような冷たさだ！」

「——！！！！？ なっ………！？」

その男は、アイアたち四人の背後にいた。

しかし、それでも、それが当たり前であるかのように、アイアもティレイも、少し悔しそうな顔をしただけだった。

「でもいくらなんでもアイア、半年振りの再会でそれはないんじゃないの？」

「おい……いま、オレにも見えなかったぞ……？ アイア、アイツ

は、誰だ……？」

「誰って、そりゃあ……」

「お父さん、ですよ。ロンガさん」

「ん？ロンガ？ 君はロンガ君というのか。」

僕は君みたいな大きな息子を持った覚えは無いが………」

そこで言葉を切り、ジッとロンガを見る。

「な、なんだよ……」

「君は僕の息子か？」

「「「んなわけねえだろおー！！！！」」」

今度は、ロンガ、アイア、キアラの三連続の拳を、ひらりと避けて距離をとる。

「はっはっは！ 今のは冗談。アイアのボーイフレンドだろ？」

「「なっ……！！？ ハア！！？」」

うるたえるロンガとアイア。

「お父さん……」

頭を抱えるキアラ。

「はっはっは！！！！ 少々お遊びが過ぎたかな？」

一応、自己紹介しておこうか？」

「オレは……ロンガ・シーライドだ。なんだかんだでコイツに連れてこられた」

「なんだかんだって……！！」

連れてこられたって……！！

しかもコイツ呼ばわり……！！」

ツッコむアイアを無視して、ロンガは目の前の男を見る。

「そうかい、ロンガ君というのかい。僕の名前はグレイン・シルストーム。」

そこにいる、娘達の父だ」

「ああーっ！！もう……！！ 毎度毎度、何度言えば分かるのよおと
うさんっ……！！」

キアラが真っ赤な顔で怒る。

「父だの娘だの、恥ずかしいことばかり言わないでよっ!」

「おい、アイア」

遠い眼でその光景を見ながらロンガが呟く。

「ん……何？」

「お前の家は、いつもこんな感じなのか？」

Φ

Φ

次の日の朝。

「ふえ、なんて？」

「いや、だからさ、お前の親父だよ。」

なんか武道の達人だとか、そんなのじゃないのか？」

「うゝん……昔は傭兵団にいたとか言ってた気もするけど、何か気になるの？」

ロンガとアイアは、赤い上等そうな絨毯がひかれた、ただっ広い部屋にいた。

「いや、昨日のあの動き、どう考えても素人じゃなかったぞ？」

扉のある壁の逆側の壁にある、大きな窓。其処から差し込む光が、豪華な調度品や家具を照らしていた。

「確かに……私と姉ちゃんで、魔法覚えてからは、何度もアイツに仕掛けてるけど……」

そういえば一発もあたったことがない、とアイア。

ちなみに、ティレイは昨日、アイアの父親、グレイン・シルストームとゴタゴタを演じているうちに、いつの間にかどこかに消えていた。

「しかし……ハ、本当に豪邸だな……」

ロンガは部屋を見渡しながら言った。

落ち着かないのか、赤い絨毯の上に胡座をかき、ヒザを揺すっている。

「椅子に座ればいいじゃない……」

アイアは椅子に座ってはいるが、背もたれを前にして、いかにも行儀がよくない。

「で？　こんなところで待たせて——いや、まあ、一宿一飯の恩もあるし、別に構わないんだが……何をさせる気だ？」

「さあ……そんなの知らない——」

よ。と、最後の一言は、勢いよく開かれた扉の音に掻き消された。「はっはっは！　おはよう我が娘！そしてロンガ君！！」

アイアの父、グレイン・シルストームのテンションの高い登場に、二人は苦笑いだった。

「ん、姉ちゃん……はまだ寝てるだろうけど、キアラとリックスは？　もう起きてるでしょ？」

「（リックス……？　犬か何かか……？）」

「ああ、あの子達なら自分の部屋で朝食を摂ってるよ」

「……？　おい、じゃあ、何でこんな部屋にオレたちを呼んだんだ？」

訝しげな表情でロンガは問う。

「まあ、それは、君にも関係があるんだけど、いや、君にこそ関係があると言つべきか。とりあえず、」

にこやかな笑顔で、グレインは言う。

「とりあえず、朝ごはんを食べよう」

Φ

Φ

白く柔らかなパンと、目玉焼き。そして大皿に盛られたサラダ。

それらを運んできたのはあるうことか——いや、いつそ子の大きな屋敷には相応しい——身も蓋も無く言ってしまうえば早い話、メイドだった。

「……………お前の家には、あんな奴らもいるのか…………？」

部屋を出て行く二人のメイドの後姿を見ながら、しばらく呆けていたロンガが、アイアに小声で言った。

「え、いや、まあ……………いつもじゃないけど……………」

「はっは！ 中にいるのはたったの五人だけど、家は無意味に広いからね」

グレインが、アイアの言葉を引き継ぐ。

「維持する為にはある程度、人手が必要なのだ。かといっていつもいるわけではないけれどね」

そこまで言っていると、グレインはパンを一つ驚掴みにして、そのままかぶりついた。

「ハ……………ツツコみたいところは幾つか在るんだが……………」

そろそろ、何のつもりなのか話してもらおうか」

仮にも、である。

仮にも、少なくとも、目上であろうグレインに対しても、全く媚びることの無いロンガ。

その目線は、しっかりとグレインを捕らえている。

「はっは！ そうだね。じゃあ、単刀直入に言おう」

広い部屋に、紅茶をすすする音が響いた。

「キミは何で……………ヒフトフまで来たのかな？ いや、連れてこられたんだっけ？

じゃあ、何故……………おとなしく連れてこられたんだい？」

「……………」

「ロンガ君、だったね。僕は君の事をほとんど知らない、全く知らないと言ってもいい。

でも——まあ、これは僕の勝手な想像だから間違ってたらごめんね——君は、自分より他人を優先するタイプではないはずだ」

『勝手な想像だ』と言いながら、はつきりと言い切ってくるグレイン。

「それこそ、僕の娘たるアイアに惚れたのでもない限り、意味無くヒフトフまでくるとは思えない」

「……………」

苦笑いを浮かべるアイア。

「…………ハ、昨日からロクに会話しちやいねえってのに、えらく見透かしたようなことを言ってくれるじゃねえか」

ロンガの言葉に、にこやかな、やわらかい笑みを作って、グレインは応える。

「はっはっは！ まあ実際——見透かしてはいるよ」

「……………！？」

「お父さん…………？」

「それは…………」

訝しげな表情で、ロンガが口を開く。

「オレの目的も、ってことか…………？」

——何の根拠も無い。コイツが知っているはずがない。

ロンガはそう思って——それでも、『まさか』という思いがあつての発言。

ソレにグレインは、

「はっはっは！ うん。大体は察しがついてるよ」

にこやかな笑顔を保ったまま、そう言い放った。

「なっ……………！？」

「ちょ、ちよつと待ってよ、ロンガの目的なんて私も聞いた——

——」

聞いたことが無い、と。旅の伴で友であるロンガと、己が父であるグレインを交互に見ながら、アイアはそう、言いそうになった。

言いそうになった。

聞いたことが無い、と。大嘘を。

既に何度も——ではないが、何度か、聞いているはずだ。

それは、実も蓋も無く言ってしまうえば——復讐。

『とある奴を探し出して殺すこと』

『今までソイツに対する怨みだけは忘れたことが無い』

如何しても忘れられないと。そう言っていた。

その対象が誰なのか、どういう経緯で旅をしてまで復習をするに至ったのか。

詳しいことは、わからないけれど。

「まあ、詳しい話を聞いてあげようと思ってね。 念のために、キアラ達には席を外してもらってるよ」

あまり大勢に聞かれたくは無いだろうしね、とグレイン。

「……………お前……………一体どこまで知ってるんだ？」

「知っているところまでは知っているよ」

「……………」

「……………」

沈黙。

ロンガは、目の前の男を、信用していいものか、本当に詳しいことを話してもいいのか、見定めようと、鋭い視線をグレインに向ける。

逆にグレインは、そんな視線もどこ吹く風、目の前の銀髪の少年が言葉を発するのを、朝食を摂りながら待っているようだった。

睨み合い——と言うには、一方的で、益体の無いその沈黙に、アイアも同じく沈黙しか挟めない。

しかし——

「ああ、そうだ」

唐突に、グレインがそう声を上げる。

「どうやら、ロンガ君の方はなかなか決心がつかないみたいだし……
…案外ヘタレなのかねえ、先にアイアの用件から聞いちゃおうか」

「なっ……………！！！！」

——ヘタレだと!!?」

「え、私の用件?」

「隠さなくてもいいよ、アイア。」

君がわざわざ自分から、この家へ帰ってきたんだ。何かしら用があるに決まっているだろ?

もつとも、ロンガ君とは違ってその内容までは、分りかねるけどね」

「……………ん……………」

自身の親相手ということもあってか、アイアは、ロンガとは対照的に、すんなりと、その『問い』を口にした。

「お父さん、“ブラッドボックス”って、知ってる?」

「……………」

その『問い』を受けてグレインは。

グレインの顔は、今だ笑みのまま。

しかし微妙に、されど、他人であるロンガにも、それが感じ取れるぐらいには、表情が変化した。

「おいアイア、なんだその、“ぶらっとぼくす”って」

「うん……………ちよっと、デイルズでね」

いくらか前、ロンガが、アイアが、この街、ヒフトフへ来る理由を作った場所。

今はもう、廃村となったデイルズ村。

そこで、ロンガは、何故か自分を狙う『七罪星』の一員を名乗るキロ・ウッドビレッジと。

アイアは、そのキロと行動を共にしていた、“魔法使い”^{ウィザード}グラムと。

それぞれ戦闘を繰り広げた。

デイルズを去る際、ロンガは、キロとの戦闘の内容——猫刀ムラマサや、キロの“神器”などについて——アイアに話していたが、アイアのほうは、ロンガには何も話していなかった。

「百歩譲って、形を変える呪具や魔導具はアリだとしても、身体

一部になる——いや、身体の一部として結合する呪具なんて、あるの？」

アイアとの戦闘の際、グラムは、その左腕を何の抵抗も無く、恐れも、惧れも無く、引き千切り、その腕は四角い箱の形をした魔導具にカタチを変えていた。

アイアには、それが、そのときのグラムの表情や、飛び散った鮮血や、その他もろもろが、頭について離れなかった。

どうしても、気になったのだ。

「『ブラッドボックス』ねえ……」

「他にも、刀と猫の両方に姿を変える呪具とか」

「ハ、アレはなかなか強かったな……」

キ口との戦いを思い出して、ロンガは苦笑いを浮かべてしまう。しかしその表情も、次の瞬間には驚愕のものに変わる。

「はっはっは！ なるほど……君たちはキ口君に会った——それどころか戦ったのか」

「「——！！！！？ 知ってるの！？」か！？」

「はっはっは、意外なところで二人の話が繋がったね」

「オレはまだ何も話してないぞ」

グレインは、少し楽しそうな眼で、ロンガを見る。

「そう？ じゃあ、話してみるかい？」

「……………」

——本当に、どこまで知ってやがるんだコイツは……

「『七罪星』……って……知ってるか」

堅い口から、音が、言葉と成って流れ出す。

「『七罪星』！？」

されど、その言葉に驚きの声を上げたのは、アイアの方だった。

「ん？ なんだ、お前も知ってるのか？」

「知ってるも何も……ねえ？」

そういつてアイアは父親の方を見やる。

グレインは、一口、紅茶をすすってから、話し始める。

「“七罪星”、つてのは、簡単に言えば傭兵団みたいなものなんだ」
「傭兵団………」

「ただ、普通一般と違う、特異な点として、ソレを構成するメンバーの九割九分が異能者……つまりは、“スピリチュアル精霊憑き”や“ウィザード魔法使い”なんだ」

「異能者だらけの傭兵団……？」

ロンガの言葉に、グレインはコクリと頷いた。

「もちろん、と言っていいのかわからないが、その特異性故に、マトモな傭兵団の仕事だけじゃなく、『人間』の手に負えなくなった怪物の始末モンスター、『同じく“人間”の手に負えない異能者の犯罪者の始末』なんかも、依頼を受けてるみたいだね」

「ハ、つまり、異能者をつかった“何でも屋”ってところか」

苦々しげに放たれた、ロンガの呟きに、

「はっはっは！ その通り！」

快活な調子で、グレインは言葉を返す。

「でもね、ロンガ君、今言ったようなことは、この町の人間なら誰でも知ってるコトなんだよ」

「なに……？」

「それくらい有名なのよ、この街じゃね。」

「って、じゃあ、あのキロって奴は『七罪星』のメンバーだったんだ……」

「ん、言ってなかったか？」

「聞いてないよ？」

「あれ……マジか」

ロンガとアイアのやり取りを、グレインは柔らかな笑みで見っていた。

それとは対照的に、ロンガがグレインへと向けた視線は、鋭く冷やかだった。

「で？ お前は、本当にオレの目的が分かってるのか？」

「イミル・ルカーソン」

「――！！！」

「……………」

「君はこいつを探してるんだろう？」

「……………」

広い部屋に、沈黙が降りる。

「それがロンガの……復讐の相手？」

それを破ったのはアイアだった。

「……キロから聞いたのか」

「たしかに、直接聞いたのはキロ君からだけど、それをキロ君に教えたのは本人みたいだね」

「ハ……全く……どういふつもりか分らんが」

そういつつ頭をかきつつ、ロンガは椅子から立ち上がる。

「その『七罪星』、アジトみたいなところがあるんだろう？ 場所を教えてくれ」

「アジトって、ロンガ、今から行く気？」

「ああ。もう行ってみるしかないだろ」

「ちょ、ちよつと待ってよ、それで――」

「まあ、ちよつと待ちなよ、ロンガ君」

あくまで軽い調子で、グレインが言う。

「アイア、君は『七罪星』のアジトの場所を知ってるのかい？」

「うっ……」

「しらねえのかよ……」

ロンガはピシヤリと、自分の額に手を当てた。

「それに僕は……」

『ちよつと、やめなよリックス！！！！』

『うるさいキアラ！ やると言ったらやってやるんだ！！！！』

ドアの向こうから、唐突に聞こえてくる、大きな声。

「なんだ……………」

がちゃあ！！！！

と、大きな音を立てて、扉が開いたかと思うと、部屋の中に、ア

「エアと——いや、キアラと同じ髪の色をした、青年が乗り込んできた。」

「リックス！ お客の前だ、おとなしくしてなさい」

リックスと呼ばれた、その青年の耳には、グレインの言葉は入っていないらしく、素早く、部屋の中にいた三人——すなわち、ロング、エア、グレインの顔をそれぞれ一瞥すると、

「お前か、ロング・シーライドってのは」

そう言って、腰に差していた剣を抜き放ち、切先をロングに向けた。

「ん……？ なんだ、オレに何か用かよ」

そういうロングの口元はうつすらと、笑みを形作っていた。

「（ロング……楽しそう……？）」

エアが感じたその微妙な違和感も、次の瞬間には驚きによって上書きされる。

「ロング・シーライド。僕と決闘しろ」

第六閃——END——

第七閃『乱入者と乱入者』

「僕と決闘しろ」

部屋の中に乗り込んできたその人物は、ロンガの顔を見るなりそう言い放った。

「何言ってるのリックス……」

背はロンガと同じくらい。短く切りそろえた髪は、アイアよりも色が薄く、丁度キアラと同じ色。

「ロンガ・シーライドだっけ？ 決闘だ。お前がアイア姉えに相應しいかどうか、見極めてやる」

「ハ、なんだいきなり、お前誰だ？」

耳を覆い隠すほどの量の銀髪を揺らして、ロンガが立ち上がる。その問いには、隣にいたアイアが答えた。

「リックス……私の弟よ」

「！……犬じゃなかったのか」

「「何の話をしてるの？」んだ？」い？」

アイア、リックス、そしてその父グレインからの語尾の揃わない同時ツツコミ。

「ちよつと、リックス……！ どういうつもりよ……！」

リックスの後ろから、顔を真っ赤にしてキアラが怒鳴る。

「なんだよキアラ……僕のやることには口を挟まないでくれるかな。それにどういつつもりかはさっき言った」

「そうは行くわけないでしょ！？ 大体何よ『アイア姉えに相應しいかテスト』で『決闘』って……！」

「そうよ、それにロンガが私に相應しいかどうか……何に關係があるのよ」

アイアとキアラが姉妹で揃って捲くし立てる。

「はあ……」

温度が上がっていた部屋の雰囲気、そんな溜息で断ち切ったの

は、あるうことか、グレインだった。

「どうしたアンタ、テンションの高いキャラじゃなかったのか」

「いや、こっちとしてもそのつもりなんだがね。」

とりあえず、我が娘キアラよ、ロンガ君のことを僕の息子に話したね?」

「え、あー……………うん」

少しばつが悪そうにするキアラ。

「フム……………なるほどねえ……………」

グレインはロンガの顔を見つつにんまりと笑む。

「で? どうするんだ、その白髪。僕の挑戦を受けるのか。それとも尻尾を巻いて逃げるのか」

「あ……………」

アイアがそれに気付いたときはもう遅かった。

「しら……………が? はくは……………つ?」

正に鬼の形相。ロンガの顔に、怒りによる皺が幾本も刻まれている。

「銀髪って言えよこの野郎」

いつも以上に、異常に、低くドスの聞いた声。

ロンガは、自分の髪の毛を白髪と言われるのを嫌がるのだ。

どう言い張つても、『銀髪』は『白髪』の同義語でしかないのだが。

「はっはっはっはっは!!!」

「……………!?!?」

重くなった空気を切り裂く、一際大きなグレインの笑い声。

「どうやら、ロンガ君もやる気みたいだし、やってみるかい? 決闘」

「お父さん、それ本気!?!」

「おいおい、誰がやる気だつて?」

「なんだ、やっぱりヘタレか」

「リックスも! もうやめなさいよ!」

リックスは、アイアにそうたしなめられると、一瞬弱ったような

顔をしたが、

「悪いけど、アイア姉えの言葉でもそれは聞けないよ」

「リック……って」

「ハ、ヘタレ……ねえ……親子揃って同じコト言いやがって……」

「ロンガも！！ 安い挑発に乗らないの！！！」

アイアの言葉は全く耳に届かず、ロンガとリックスは、二人、嗜虐的な笑みを浮かべ、凶悪な目線で威嚇しあっていた。

そこに、一人気楽な傍観者が——本来最も早くリックスを止めに入らねばならないはずの、父親であるグレインが、決定的な言葉を放つ。

「ロンガ君、君が僕の息子に勝てたら、君の知りたがっていたことを教えてあげるよ」

「「ココに来て何をいっとなじゃあああああああ——！！」」

アイアとキアラの拳が、グレインの顔面に炸裂する、と思われたが、グレインはあるうことか、椅子に座ったままの姿勢で——その姿勢を崩しながら、もっと言えば椅子から落ちながら——それをかわし、後ろに二回ほど飛び退いて、立ち上がった。

「くっ……」

苦々しく、舌打ちをするアイア。

「フン、もう付き合ってられない。ロンガ・シーライド」

アイアの弟、リックスは、

「中庭で待っておく。お前が、アイア姉えの傍に居たいなら——そして、僕の挑戦も受けられないような腰抜けでないのなら、昼過ぎにそこに来い」

そうとだけ言って。キアラの脇を通り過ぎ、部屋から消える。

キアラは、憎々しげにそれを見送っていた。

「ロンガさん、あんな奴の言うこと、気にすることないですよ！それに決闘だなんて……」

「……フン」

ロンガは、一度鼻を鳴らして、グレインのほうを向く。

「勝つたら、オレの知りたいことを教えてくれるんだって？」

「え、ロンガさん!？」

「はっはっは!そう!一つと言わず——そうだな、三つぐらいは答えてあげてもいいかな!

もちろん『七罪星』のアジトも、だ」

「ハ、充分すぎるな」

「ロンガ……まさか……」

「ああ、そのまさかさ。どうやらこのままじゃ、グレインは『七罪星』の居場所を教えてくれる気はないみたいだし、それに」

それに——

「あんな好き勝手言われて、何もせずにいられるかつての」

ロンガのその顔に張り付いた、嗜虐的な笑みは、同時に、随分と楽しそうだった。

Φ

Φ

シルストーム邸中庭。大きく開けた柔らかな芝生の上に、ロンガとリックスは向かい合っていた。

その二人の中間から少し離れた位置に、にんまりと笑うグレイン、心配そうに二人を見守るアイアとキアラの姿があった。

「全く……どういふつもりよ、お父さん……」

何で今日に限ってリックスの我侬なんて聞くのさ」

非難がましくアイアが言う。

「はっはっは!言つたろ?これはテストなんだ。

ロンガ君が、自らの復讐を果たす権利があるか否かの。

そして、ロンガ君がアイアに相應しいかのね。

こんなところで、しかも僕の息子に負けるようじゃあ、絶対にイミルは倒せないし、僕の娘の傍に置くには心許ないね」

「……………さつきも言ってたけど……………ロンガの復讐の相手……………その、イミルって人、知ってるの？」

グレインの台詞の後半はほぼ無視して——それでも、少しだけ顔を赤らめて。それを覆い隠すように、アイアは問うた。

「——まあ、古い知り合い、ってところかな」

アイアには、父親であるグレインの、その表情が、とても懐かしそうにしているように見えた。

「ねえ、お父さん」

そこに、キアラが声をかける。

「ん？ なんだい、キアラ」

「いくらロンガさんをテストするためって言っただって、私はコレ……………やりすぎだと思うな」

「……………どうしてだい？」

「……………」

少し諦めたような、そんな表情で、キアラは草の上に腰を下ろして、父親の問いに答える。

「だってコレ、“決闘”なんでしょ？」

Φ

Φ

歩数にして十二、三步ほどだろうか。そんな距離を飛び越えて、アイアの弟だというリックス・シルストームの声は、ロンガの耳に届く。

「分っていると思うが、ロンガ・シーライド。」

コレは“決闘”、手加減は無用だ」

リックスは、腰に帯びていた長剣を引き抜き、切先をロンガに向けて、

「ココで僕なんかに殺されるような奴に、アイア姉えは護り切れな
い」

「ハ——」

——『オレがアイアを護りきる』などとのたまった覚えは無いが
……ってか何から護るってんだ。

「フン、何ださつきから、アイア、アイアって。

シスコンかお前」

「そうだ。僕はシスコンだ」

「……………っ！！！！」

——予想外！認めやがったこいつ！！！！

「ただし僕は、テイレイ姉えにもキアラにも興味は無い。

僕の愛情の対象はこの世でただ一人、アイア姉えだけなのさ！！

！！

「ハ……お前、多分この作品で一番キャラ濃いぞ……」

自分のキャラが飲まれないかと、心配するロンガに対し、

「ところでお前、武器はいいのか」

と、ロンガの正体を知らぬリックスは、まさに要らぬ心配をする。
確かに、ロンガは一切の武器をその身に帯びてはいない。

「ハ、なんだ、キアラから聞いてないのか」

そこでロンガは、一瞬迷ったように視線を逸らし、そして軽く溜
息をつく。

「オレは“スピリチュアル精霊憑き”でね。武器ならここにあるんだ」

左手の親指で、自分の胸を差しながら、ロンガは言った。

「……………！！なるほど。」

これはますます、アイア姉えに近づけておくわけにはいかなくな
ったな」

その言葉にロンガは顔をしかめるが——

「それじゃ！ そろそろ始めようか二人とも」

と、近づいてきたグレインの声が、会話を断ち切った。

「……………」

「……………」

後は二人、無言のまま睨み合う。

「それでは——」

グレインの右手が天高く上がり——ロングは姿勢を低くし、リックスは剣を構える——

「始めっ——！！」

「ハ——」

柔らかな草を——地面を踏みしめて、ロングは、リックスへと猛スピードで突進してゆく。

もちろん、利き手である左手には、魔力を集中させながら。

「フン」

——やはりな。

武器を持たぬことで、全力での疾走を可能にし、直前で武器——
“スキル神器”というのだったか——それを生成する事で、そのリーチや
形状を相手に悟らせない……“スピリウル精霊憑き”だからこそできるいい手
だ。

「だが——！！」

エイク・ロウル——！！」

剣を横に薙ぐと共に、唱えた呪文。

放たれた魔法は、その場に、両雄の身長を越える大きさの氷の壁
を作り出した。

「——！！！！ハ、知るかそんなもん——！！」

突如として現れた障害物にも、全くスピードを緩めることなく、
ブレード・オブ・シルフ【風霊の大剣】——！！！！」

風纏う大剣を生成し、氷の壁へ叩きつけた。

ガアアアアアッ——！！

「な……ぐあああああああ！？」

その剣の、そしてそれが纏う風の破壊力は、氷の壁を打ち砕いたばかりか、その裏にいたリックスすらも吹っ飛ばした。

「が……あ、く……なんで……っ」

地面にしこたま身体を打ちつけ、苦しそうにうめくリックス。それもその筈、である。

全力疾走が可能。相手に武器のリーチを悟らせない。

それは『武器を始めに生成しない』理由としては完璧である。

しかし『武器を後から生成する』理由としては後一步、である。それ即ち、剣閃の初速。

何も持たずに腕を振るう、その速度のなかで大重量の大剣を生成し、さらに勢いをつける。

重量と速度が生む破壊力！ それは完全にリックスの計算外だった。

いや、完全に、と言うならば、“大剣”^{ブレイド}の重量、そして何より“風霊”^{シルフ}の風の威力こそ計算外だったが。

「が、く……そ」

目を白黒させながらも、起き上がるリックス。そこに――

「ハ、食らえボケ」

「え――？」

リックスが魔法で作り出した氷の壁があつた場所、即ち、リックスが吹っ飛ばされる前にいた地点から、たったの一步でロンガは、リックスに肉薄し、その鼻面に思いつき蹴りを叩き込んだ。

「ごあああああああああ」

みつともなく再び地に転がるリックスに、ロンガはさらに追撃をかけようと、接近し、右手に持った剣を振り上げた。

「く、くそっ……！！！」

ロンガに向かって剣の切先を向けようとするリックスだが、

「――！！！」

その切先は、ロンガの左足で地面に踏みつけられていた。

「ハ、身の程知らずが。これで終わりだな」

振り上げた剣が纏う風圧が、僅かに強くなる。

「な、ちょ————待て、待ってくれっ」

手を前に出し、助けを請うリックス。

「手加減なし、なんだろ？」

「う、うわあああああああああああ！！！」

風纏う大剣が、無慈悲に、迷い無く、一直線に、振り下ろされた。

Φ

Φ

「はっはっは！ いや、ちょっと本気で殺^ヤっちゃったかとおもったね！」

そんなグレインの声に、固く目を瞑っていたリックスはその目を開く。

ロンガの“神器”^{スキル}【風霊の大剣】^{ブレード・オブ・シルフ}は、リックスの左側の地面を深く抉っていた。

「ハ、こんな遊びみたいなんでいちいち殺すかよ。それに仮に殺

ちまったら、アンタが黙ってなかっただろ？」

グレインのほうを向きながら、ロンガは言う。

「まあ、そりゃあ、ね」

「ははは……なんだよ……本気で殺されると思ったじゃねえか……」
引きつった笑みを浮かべながら、安堵の台詞を口にするリックス。
「リックス、鼻血出てる」

キアラがぶつきらばうに言い、白いハンカチをリックスに投げてよこす。

「ああ、ありがと……」

「全く……ホント無茶するんだから」

「うるさい……ホントなら勝てるはずだったんだ」

決まり悪そうに言うが、

「はぁ！？　どこが！　ボロ負けだったじゃない！！！」

ばつさりと切られてしまった。

「キアラ……お前はもうちょっと言葉に気をつけたほうがいいんじゃないのか……？」

「……ロンガは、大丈夫？」

弟達のやり取りを、優しい眼で見ていたアイアは、ロンガのほうを振り向いて言う。

「ハ、一発も食らってないんだ、怪我也何もねえよ」

「そう、よかった」

にこり、と笑うアイア。

ロンガはその顔を見て、『顔は似てるが、笑い方は似てないな』と、益体のないことを思った。

「……………くっ」

「リックス？」

リックスは、よろめきながらも立ち上がると、キアラの声も無視して、館の方へ進んでいく。

「おい、リックス」

その背中にロンガが声をかける。

「また今度戦^ヤるか？」

ピタリと、一度立ち止まって。　数瞬の時間が流れた後、

「やだよ」

振り返りもせずそう言って、また歩き出した。

「ハ、どうやら嫌われちゃったみたいだな」

「もとより好かれる要素無かったけどね？」

「ロンガさんがアイア姉えと仲良いのがそんなに気に入らないんだ

ね」

「はっはっは！ 流石に僕の息子に僕の娘はやれないよねえ」

「ああ、そうだ、グレイン。勝負は俺の勝ちだ。さつさと『七罪星』のアジト、教えてもらおうか」

「はっはっは！ そういえばそういう約束だったね。仕方ない」

そこで一度言葉を切って、口調を変えてグレインは続ける。

「けれど、これだけは約束してくれ。たとえ『七罪星』のメンバーと戦うことになっても絶対に――」

ド ツ ! ! !

「――!!?」

「なんだ!？」

空気を、そしてその場にいるものの鼓膜を揺らす、爆発音。

見れば、邸^{やしき}の壁が崩されていて、そこから侵入者が中庭に入ってきた。

耳を覆い隠すほどの漆黒の髪。見るだけでその力強さが伝わってくる、鍛えられた大柄な身体。

「久しぶりだなグレインよ。相変わらずのようだなにより」

顔に幾本か刻まれた皺と、低く響くその声は、その持ち主の年齢をうかがわせる。

「……お前は……!!」

その驚きは、声をかけられたグレインではなく。

「イミル……! ルカーソン……!!」

「……!! アイツが……!!」

「ん? フ、やはりここにいたか。お前も、随分と久しぶりだな」
言い終わらぬうちに。ロンガは“神器^{スキル}”を生成し、その大男へ飛び掛っていた。

「ま、待て、ダメだロンガ君!!」

グレインの制止も、ロンガの耳には届かない。

「はああああああああああああああああ！！！！」

「フ」

その男は、少し口角を上げて、そして少し体を横にずらした。そしてロンガの眼には、壁にいた大穴から、自分目掛けて襲い掛かる、巨大な火球が映っていた。

ドンツ、と。先程と似た音がして。

「が、は……っ！」

少し前のリックスのように、ロンガは無様に芝生の上を転がった。

「ロンガ……！」

アイアはロンガに駆け寄る。

「フ、グレインよ。お互い、息子の躰しっけには苦労するな」

「——！！？ まさか僕の息子を」

「手荒な真似はよせと言ったんだが。 どうにもコチラは嫌われているようなのでね。 仕方ないから、少し黙ってもらったよ」

イミルの台詞が終わるのを待っていたように。

壁に大穴を開け、ロンガを吹っ飛ばした、張本人が現れる。

その手に持った、リックスを引きずって。

「——！！！！」

息を呑むアイアとキアラ。

完全に笑みは消え、怒りに支配されたグレインの表情。

「許さないよ、イミル……」

「フ、許して欲しいなどとは思っていないさ」

本当にグレインの感情などどうでもよさそうに、イミルは言う。

「俺が目下興味があるのは、君が我々の用件を理解してくれているかどうか、ということだよ、グレイン」

事態は。風雲急を告げる。

第八閃『逃亡と再会』

「俺が目下興味があるのは、君が我々の用件を理解してくれているかどうか、ということだよ、グレイン」

リックスとロンガの決闘が終わり。

多少なりとも緩やかな時間が流れるかと期待された午後。

それを屋敷の壁とともに粉々にして、中庭に現れた二人の乱入者。

「……くっ……」

ロンガは、頭を押さえながら、なんとかその身を起こす。

「ロンガ……」

アイアが声をかけるも、ロンガのその眼は完全に、イミルという大男と、もう一人の乱入者、短く切りそろえた金髪の少年のほうへ向いていた。

「どういうことだ、イミル・ルカーソン。お前らは、オレに用があつたんじゃないのか」

立ち上がってロンガは言う。

「フ、もちろんそのつもりだが、先に確認すべきことがあるのだよ」

「エイク・ブリザ・ウォク……!!」

突然に、イミルに襲い掛かる冷気の弾丸。

それをイミルは、左腕で受ける。

「………フ」

凍りついた左腕には何の感情も示さず、歪んだ笑みを、グレインに向ける。

「……出て行け……ッ……!!」

「………!!? お父さん………!」

娘であるアイアですら、見たことのない、父の怒りの表情。

「フウ……それがお前の“答え”か、グレイン」

「前々から言っているだろう？」

グレインは、傍らで震えていたキアラに、

「キアラ。お前は、リックスをつれて、出来るだけココから離れるんだ。屋敷からもね」

そう声をかけた。

それを聞いてキアラは我に返り、

「わ、わかった……」

と、金髪の少年の横で倒れるリックスを、勇敢にも助け起こしに行き、何度かグレインたちを振り返りつつも、中庭から去っていった。

「……残念だよ、グレイン」

イミルが凍りついた左腕を右手で掴むと、ミシリミシリと音を立てて、その氷が崩れ去った。

「………フン、やはり効いていなかったか」

憎憎しげに、グレインが呟く。

「まあ……今回は、君への用はついたわけだしな。今日のところはもうどうこう言わんよ」

その台詞は、左手を開いたり閉じたりしながら。

「だが、本来の目的……」

それまで無表情だったイミルの顔が、途端、嗜虐的なものに変わった。

「“風^{シルフ}霊”の回収はさせてもらうぞ！」

「くっ……！」

イミルの声に反射するかのように、ロンガは立ち上がり、大剣を構える。

「ちょ、ちょっとまってよ……“風^{シルフ}霊”の回収って、どういうこと？

………どうしてアンタは、アンタ達はロンガを狙うの！？」

ロンガの隣のアイアが、イミルに向かい、恐る恐る言う。

「……黙ってるアイア。これはオレと、こいつの問題なんだよ」

「そんな……！」

「ほう……他人を巻き込まんとするか。 なかなかいい心がけじゃないか……なあ、我が息子よ」

「い——！？」

ポニーテールを、振り乱して、アイアがロングのほうをむく。

「い……いま、なんて……？」

「ハ、聞いたとおりだ。 オレは、そのイミル・ルカーソンの息子なんだよ」

「んな——！？」

再び驚愕の声を上げたアイアを尻目に、ロングはイミルに向かい、
「おい、糞親父。オレがおとなしくお前についていくって言ったら……こいつらを傷つけないって、約束できるか？」

「ロング……？」

「フ、五年でずいぶん利口になったな…… 生意気なのは気に食わんが、いいだろう、約束しようじゃないか」

大男イミルが、ロングに手を差し伸べる。

「ダメだ！」

そういつて、ロングの腕を掴んでとめたのは、グレインだった。

「……はなせ。 このままここにいたら、お前らにも迷惑がかかる」

「はっはっは、それが案外、そういうわけにも行かないんだよねー」

「？ どういうことだ……？」

訝しむロングに、そしてイミルにも、グレインは柔らかな、刺の無い声で言う。

「ロング君はさつき、『自分とイミルの問題』だと言ったけど、案外そうでもなくてね。 関係のある人は、結構他にもいるんだよ」

「……何が言いたい……？」

「それは——」

「——！！ ビリー！ 奴を止める——！！」

イミルは、傍らにいた金髪の少年に向かい叫ぶ。

その少年は、イミルの言葉に一瞬遅れたものの、すぐに反応し、
右手に魔力を込めるが——

ズブリ

ビリーと呼ばれた、金髪の彼の“神器”^{スキル}の発動より、ずっと早く。グレインは、その中指を、自分の右目に突っ込んだ。

「なあっ……！！ 何やってんだお前！」

「お、お父さん！？」

気味の悪い音を立てて、グレインの眼窩から引き抜かれる何か。それと共に、グレインの口から、高度な魔法を発動する呪文が零れ落ちる。

「—Земля（大地よ）、—Замораживает（凍れ）、

—Sharp（鋭く）—резкость（尖れ）」

一瞬にして、ロンガとアイア、イミルと金髪の、その間の地面から、水晶のような、氷の塊が立ち上る。その鋭い切先を、すべてイミル達に向けて。

「く——！？」

「……………！！」

それを避けるべく、イミルと共に、ビリーは“神器”^{スキル}の生成を中断して、後ろに飛び退く。

ロンガとアイアは、その場から動く必要すらなかったものの、その驚きは、イミルたちと同程度のものだった。否、アイアにいたってはそれ以上だろう。

「お父さん……その……手の……」

「はっはっは！ まあ、事情は後でゆっくり説明するさ……」

グレインの右手に握られていたのは、眼窩から引きずり出した自分の眼球……ではなく、血を固めたように赤黒い、立方体だった。

「ブラッド……ボックス……」

にこりと笑い、グレインは、次の魔法を詠唱する。

「—Открытый（開け）、—пустылетя（飛べ）т,

—исчезают дела（消えよ）.

—Мое место вам（此处は彼方に）. —Мокрыл
ья, ангел（光は翼に）.

— Ронга , Аia из нас , Местонахождение где ! (われらが消息は何処) ! ! ! !

「何をする気だ、グレイン!!」

叫ぶイミルの目の前で、グレイン、ロンガ、アイアの三人が、青白い光に包まれる。

ビリーは右手を彼らに伸ばすが――

「^{スキル}神器”……」

「……!!」

光に包まれていく、ロンガの視界。

そこでロンガは、金髪の少年、ビリーの“^{スキル}神器”の姿を、ハツキリと捉えていた。

Φ

Φ

「……イミルさん……あいつらは？ どこに消えやがった」

それまでほとんど声を発しなかった、金髪の少年、ビリーが、不思議そうにかつ、苛立たしそうに、イミルに問う。

「フ……俺としたことが……やられたよ」

「やられた？」

グレインの創った氷。その残滓を眺めて、ビリーが眉をひそめる。

「ああ、^{テレポーション}空間転移魔法なんて……洒落にならないほど高度で、希少な魔法を使うとは思わなかった」

「古代魔法……ですか……」

「フン、まあいい。あんな魔法を使っただ。少なくともグレインはしばらく動けないだろうし、とりあえず一度帰るとしようか」

Φ

Φ

「う、が、お……うえ、えええ……」

「ロ……ロンガ……大丈夫？」

ヒフトフの街の外、木々のまだらな森の中で、アイアは、嘔吐するロンガの背をさすっていた。

「がは……っ……はー、はー、サンキュー、もう大丈夫だ……」

「はっは……ごめんね、ロンガ君。アレってさ、やっぱり気分悪くなるよね」

「……そういうあんたは大丈夫なのか？ 相当へバってるみたいだが」

グレインは、地面に座り込み、背中を木に預けていた。

「はっはっは……やっぱり、そう見えるかい？ 正直ちょっと……動けそうにないんだ」

心なしか、笑い方もぎこちなく、額には汗が滲んでいた。

「お父さん、本当に大丈夫なの？ 空間転移なんて……」

「はっはっは、アイア、君は絶対真似をしないことだね。ただでさえ果てしなく高度なのに、三人一緒なんて、間違いなく寿命を縮めるよ」

「笑い事かあっ！」

「ハ、確かに笑い事じゃないぜこれ……これからどうするんだよ……まあ、それはおいおい考えるか」

そういつて、ロンガはグレインの前に腰を下ろす。

「……いろいろ聞きたいこともあるしね」

アイアも、その場に足を抱えて座った。

「やれやれ……まあ、話さないわけにも行かないか……だが、何から話したものかな……」

Φ

Φ

「もしかすると、薄々感づいているかも知れないけれど、僕はずっとまえ……そうだな、キアラとリックスが産まれる直前ぐらいまで、『七罪星』のメンバーだったんだ」

「……………」

グレインの話を、神妙に聞くロンガとアイア。

「その、『七罪星』について、もっと詳しく教えてくれないか？」

ロンガが言う。

「ああ。『七罪星』はね、前にも言った通り、“スピリチュアル精霊憑き”や“ウィザード魔法使い”ばかりの傭兵団……いや、何でも屋なんだけど、そのトップに位置……というか、名目上の幹部と言えるのが、原罪になぞらえた「称号」を持つ七人だ」

「七人もいるの……？」

「まあ、これは『七罪星』発足時のメンバーが七人だったとか、いろいろ理由はあるんだけど、実質、そのトップ七人の中のさらにトップ……『七罪星』のヘッドとも言えるのが、あの“「強欲」のイミル”こと、イミル・ルカーソンだ」

「ハ……………」

ロンガは、左手の親指を唇に当てて、少し考えてから、

「あんたの実力なら、その七人の中に入れるぐらいの地位にはいたんじゃないのか？」

と言った。

もっとも、ロンガは、まともにグレインが戦ったところを見ていないわけではないので、その実力の判断材料は、先ほどの転移魔法ぐらいしかないのだが、それでも。彼の実力が並から掛け離れていることぐらいは、理解できた。

「はっはっは！ 僕なんかがまともに戦ったって、七人中五位ぐらいが関の山じゃないかな。特に今の“「称号」持ち”はね」

「え……そんなに強いのか、あいつら……」

アイアの顔は苦笑い。

「まあ、そりゃあ、ね」

「なあ、さつき『今の』って言ったけど……」

ロンガが眉をひそめて、問う。

「ああ、あれか。『七罪星』は、完全に実力主義だし、“「称号」持ち”も、僕が抜けた後で、死んだり新参者に取って代わられたりして、ここところとメンバーが代わってるんだよ。僕が居た頃から代わっていないのは、イミルと、後はせいぜいもう一人ぐらいだ」

「あの金髪の野郎は？」

ロンガは、その金髪の少年、ビリーが一瞬見せた、“スキル神器”の形を思い出していた。

「彼は……僕も知らないなあ……けれど、前に言ってたろ、キロ君。僕が居た頃は、彼はまだ新米だったんだけど、なんせ、存在だけで特異な“精霊憑き（スピリウル）”の中で、さらに特異な“スキル神器”を宿してたし、僕の引退後も何度か会ったことがあるんで、覚えてるんだよ」

「キロ……か……」

「ああ、そうだ！ 何でお父さんが、その……“ブラッドボックス”を持つてるのさ」

「ああ、これか」

グレインは、下瞼を中指で押し下げて、自身の——すでに“右目”として眼窩に収まった——ブラッドボックス右目を露にする。

「当たり前といえば、当たり前前なんだよね。僕がこれをもってるのは。」

だって、“ブラッドボックス（これ）”は、僕が製作つくったんだから

「え……！？」

「『七罪星』の中での僕……というより“ウィザード魔法使い”の役目は専らもっぱ戦うことよりも、そういう“魔力”とか“魔法”とか、そういうも

ノの研究が主なんだ。

そのせいか、主に先頭面を担う今の“「称号」持ち”は全員“精^ス霊憑^{ヒリウル}き”だそうだ」

過去を懐かしむように話すグレイン。

「もつとも、ブラッドボックスの開発は、僕とイミルが共同でやったんだけどね」

「じゃあ、それで完成したのが……」

「それがさ、完成じゃないんだ。“ブラッドボックス”の完成は、まだ完成じゃない」

「？　どういうことお父さん」

アイアの問いに、グレインは、その右手の人差し指を唇に当て、
「残念ながら、これ以上は話せないんだよねー」

「はあ！？」

「おいおいおい……話せないってどういうことだよ……」

アイアだけで無く、ロンガも呆れたように文句を言う。

「……後の楽しみがなくなるだろう？」

「「そんな問題かつ！！！！」」

ビシッ！

「ガファあつ！！」

アイアとロンガの、息ぴったりの裏拳が、グレインの鼻面に決まる。

「う……動けない相手に……それは酷いんじゃないか二人とも……
せめて鍵括弧ぐらいくる暇をくれよ……」

鼻をおさえてうめくグレイン。

「ああ、わりい、つい……」

「あはは……」

詫びるロンガと、笑って済ますアイア。二人して罪の意識は薄いようだ。

「ハ、まあ、話せないのなら別にいいからさ……」

仕切りなおすように、ロンガが言う。

「その、なんだ、“ブラッドボックス”っての、もっと詳しく教えてくれないか？」

アイアから名前聞いたのと、お前がさっき使ってたやつ見ただけなんだ」

「ああ、そっか、ロンガはあの女の子と戦ってないもんね」

「あのキロと一緒にいたやつだよな？」

「キロ君と一緒に……？ あの子は他人と一緒に行動するタイプじゃないさそうだったが……まあいいか。ブラッドボックスだったね」

改めてグレインの方へ向き直るロンガ。

「その前にロンガ君。君は、魔法を使おうと思ったことはあるかい？」

「無いわけでは……ないなあ……こっそりアイアの杖借りたりもしたし……」

「したのかよ！ 何で勝手に！」

「ハ、別にいいじゃねえかよ……」

だって“神器”^{スキル}と“魔法”両方使えたら最強じゃん？」

「そう！ それだよロンガ君。 “精霊憑き”^{スピリウル}の殆どが一度は考えてみるからだ。」

で。魔法は少しでも使えたかい？」

「ハ、全く無理だったぜ。 やっぱ見よう見まねで出来るもんじゃ

めた。
グレインは人差し指をロンガの目の前で立て、ロンガの台詞をとめた。

「見よう見まね？ ロンガ君、たとえ50年100年かけて勉強しようとも、君に魔法は使えないよ」

「！？ ……どういうことだ？」

「そもそも魔法というのは、大昔、まだ“魔力”の存在に気がつき始めたころの人間が、同じくそのころから現れ始めた魔力生物^{モンスター}なんかに対抗しようと、その乏しい魔力を利用しようとして生まれたものなんだ」

魔法の歴史を語るグレイン。

「ここまで言えば、アイアには分かるんじゃないか？ ロンガ君がまったく魔法を使えない理由が」

そういつて、悪戯っぽい笑みで、アイアのほうを見る。

「ふえっ……なんで私に振るのよ…… えーつと……」

もしかして、ロンガが“人間”じゃない“精霊憑き^{スピリウル}”だから？」

「そう、その通り！」

「……まったくわからんぞ、何でオレが“精霊憑き^{スピリウル}”だったら、魔法が使えないんだ？」

頭をかいて、しかめっ面のロンガ。

「簡単に言えば、魔力の“型”が違うんだ」

「型？」

「そう、“魔法”は、複雑で難解な古代魔法だろうと、簡素化されて、決まった組み合わせで容易に発動できる現代魔法だろうと、あくまで人間が、自分たち人間用につくったものなんだ」

「“精霊憑き^{スピリウル}”も、人間だ」

「見た目と考え方によってはね。けれど“人間”と“精霊憑き^{スピリウル}”、その二者の間には、蜥蜴と竜ぐらいの差があるんだよ」

「……………」

“精霊憑き^{スピリウル}”。それは、“魔力”をより高度な次元で扱えるように進化した人間^{モンスター}。怪物の人間版、である。

「で？ それと“ブラッドボックス”、どう関係があるのよ」

アイアが、この話の主題を引っ張ってくる。

「はっはっは！ つまりね、『魔法を使える精霊憑き^{スピリウル}を創ろう』それがブラッドボックス製作のコンセプトなんだ」

「……………！？」

「“魔導具”は、魔法使いが自分の魔力を集中させ、魔法の発動のよすがにする物だが、“呪式魔導具”、すなわち“呪具”は、それにさらに魔法的な効果を付け加えたものをいう。

つまり“ブラッドボックス”の場合、『付け加えられた効果』が、魔力の“型”を変えること』なんだ」

自分の右目の下を指で撫でながら、グレインは言った。

「でも、お父さんは“精霊憑き”^{スプリウル}じゃないでしょ？」

「そりゃあね。でも魔力の“型”を変化させるコトのメリットは他にもあるんだよ」

そういうなり、グレインは自分の右手の中指を、同じく自分の右目にズブリと、先刻イミル達の前でもやったように、挟り込ませる。

「ひっ！」

「……………っ」

アイアが声を上げ、ロンガは顔をしかめる。

挟り出された眼球は、黒く鈍い光と共に、少しずつ形を変え嵩^{かさ}を増し、やがて手のひらよりも少し大きい、赤黒い立方体になった。

「ふう……………」

「い……………痛くないの？ ソレ……………」

「ん、ああ、まあ多少は……………ね」

右目を瞑ったその顔は、ウイंकをしているようにも見えなくは無いが、空っぽの右眼窩からは、一筋、赤い血が流れていた。

「なんで体の一部なんだ？ わざわざ自分の肉体から切り離さないと使えないなんて……………」

「はっはっは！ そりゃあ、大分と無理のある技術だし、僕が持つてるのは試作品だし、自分の肉体の一部を媒介にしないとうまく機能しないんだ」

そう言つて、グレインは、アイアに向けて軽く、ブラッドボックスを投げてよこした。

「あ、わ！」

落としそうになりながらも、それを手に取るアイア。

「え……これをどうするの……？」

グレインは不思議そうな顔をするアイアが持つブラッドボックスに触れ、

「一封印(Lock)、一時解除(Temporarily Release)、一使用者開放(Owner Freedom)」

詠唱を終えると同時に、一瞬、ブラッドボックスが青白い光を放った。

「お父さん……？」

「アイア、これで……そうだな……火属性の魔法を使ってみなさい」

「え……私は氷属性以外の魔法は……しかも火って……」

「いいから、使ってみなさい」

グレインにそう言われ、しぶしぶアイアは魔法を唱える。

「……フェリ・ウオク！」

火属性、弾丸の呪文。

ここで一つ確認しておくべきことは、魔力にはそれぞれ、どのような属性を扱うのに向いているかという“適正”があり、そして、アイアの魔力適正は、氷属性だけずば抜けて、後はてんでダメという、非常に歪なものだということである。

「あつつあああああああああ……！！！」

急に頭を押さえて転がりまわるロンガ。

「ふえ、え！？ 何！！？ ロンガ！？ 大丈夫！！？」

「アイア……ダメじゃないか、そんな人の近くで魔法を使っちゃ」

「あんたが使えって言ったんでしょ！！？」

ああ、ロンガ……えーと、エイク・ブリザー！！

アイアの手の中のブラッドボックスから放たれた冷気が、燻ったロンガの頭を冷やす。ただし、急激に。

「ちょ、やめ、痛い！ 冷た痛い！！！」

「あ、ご、ごめん！」

「~~~~~っ……たく……」

ボサボサ白髪のをさをすりながら、ロンガは体を起こす。

「はっはっは！ 見ての通り、魔力の“型”を変えることが出来れば、その適正も同じく変えることが出来る」

「ハ……なるほどな。コレを応用すれば、“精霊憑き”スピリウルでも魔法が使えるってわけだ」

ロンガのその台詞は、未だに頭を押さえながら。

「もう……返すわよ、コレ」

ブラッドボックスをグレインに差し出すアイア。

グレインはそれを受け取りながら、

「はっはっは、お気に召さなかったようだね。残念だ」と、言った。

「……結局、あの野郎は何がしたいんだ？ こんなもん作って……それに今更オレに何の用がある？ オレとしても、あいつの首を捕ることを目的にしている以上、近づいてきてくれるのは有り難いが……」

憎悪や嫌悪感を露にして、ロンガはばやく。

「……僕も気になってね、いろいろと調べてはみたが、“四大精霊”と、そう呼ばれる“精霊憑き”スピリウルを集めている、という事までしか掴めなかった」

「四大精霊……！？ それってまさか……」

「……………！！」

眼を見開き、自分の利き手を見つめるロンガ。ひだりて

「ロンガ君が持つ“風霊”シルフ、そして“火竜”サラマンダー、“水精”ウンディーネ、“地王”ノーム」

……

その四種の精霊……“神器”スキルに宿る能力を総称して“四大精霊”

「四大……ってことはやっぱり強いのか？」

「ハ、そんなに強くねーよ」

悪態をつくように言うロンガ。

「そうなの？」

「はっはっは！ 『強くない』という表現は正しくないな。正しくは『もっと強いのがいっぱい居る』んだよ」

「……………!!」

グレインの台詞に、アイアの背筋が凍る。
アイアから見ても、ロンガの能力はずいぶん高い……強いものだった。

セドソンでのキョウコ・フレアライズとの決戦、デイルズでのキ
ロ・ウッドビレッジとの戦闘、それらを間近で見ることの無かった
アイアには、それで傷ついた姿を見ている、ロンガが実際に苦戦
する姿が、明確には想像できなかったのだ。

「そういえば、キョウコさんも……」

ロンガの方に目をやるアイア。

「あー……ああ？」

キョウコの名前が出てもしまいち反応の薄いロンガ。

「ほら、セドソンで戦った、サラマンダー“火竜”の！」

「ああ！ あいつか！」

「忘れてたんかい!!」

「ん、キョウコ？ 誰だいそれ」

「旅の途中で（主にロンガが）戦った相手だね。その人の精霊が

サラマンダー“火竜”だったんだよ」

「ハ……あいつか……下手すりゃキロより強いかな……前は何とか勝てたが、二度とは戦いたくないし、会いたくもないな」

「んん？」

ロンガの台詞にアイアが怪訝そうな顔を向ける。

「会いたくないってのはどうして？」

「単純に、あの性格が面倒くさいんだよ……」

「……………」

アイアもそれ以上は、口を噤むしかなかった。

「はっはっは！ 誰にでも、苦手な人はいるものだね。……よい
しょつと」

そついいながら、グレインは立ち上がる。

「ん？ どこかいくのか？」

「はっはっは！ まあー、歩けるくらいにはなってきたし、そろそろキアラとリックスを迎えに行かないとね」

「「あ」」

ロンガとアイアが、同時に『しまった』と、口をぽかんと開ける。
「……君たち……絶対忘れてたろ……」

その時だ。

「あら、どこかへ行くの？ なら私たちも連れて行つてよ」

「「……！！？」」

唐突なその声に、アイアとグレインの二人は急激に振り向く。

「え……まさか……」

「ハ……」

ロンガは一人、ぎこちなく、ゆっくりと、その首を回してゆく。

「はぁーい、ロンガちゃん久しぶりー」

「星だと！？ ってかやつぱりその声は……」

ふわりとした、赤みがかった長い茶髪。 背はロンガよりも高い。

黒いコートを羽織った彼女の名は、

「キョウコ……フレアライズ……！！」

「わ、私も居ますよロンガさんにアイアさん！！」

キョウコの後ろから現れたのは、アイアほどの身長で、色の濃い赤毛のショートカットの少女。

「メイコちゃん！ ひさしぶりー！」

「お久しぶりです、アイアさん！」

フレアライズ姉妹。 協会の街セドソンで、ロンガたちと出会い、姉のキョウコとロンガは死闘を繰り広げたのだ。

「ロンガさんたちがセドソンを発ったあと、私たちも旅に出たんです」

「へえー、そうだったんだ！」

楽しそうに会話をするアイアとメイコを尻目に、ロンガの顔はうなづかなかった。

「あれ？ ロンガちゃん、どうしたの？」

「ロンガちゃんて！ やめろよ……」

「ぷ……くく……ロンガちゃん……ぷくく……」

「はっは……はっはははは……！！」

「そこお！ 親子そろって必死に笑いこらえてんじゃねえ！！！」

アイアとグレインに向かってロンガが叫ぶ。

「はっはっはっはっは！ いやぁ、なるほど、さっき言っただのはこの人達だね」

「ん？ さっき？」

グレインの声に、メイコが反応する。

「それにあなたは……？」

「ハ、アイアのお父様だそうだ」

グレインの代わりにロンガが言う。

「「え………」」

「ふえっ……メイコちゃんにキョウコさん……？ なにその反応……」

……

「はっはっは！」

頭に手をやってカラカラと笑うグレイン。

それを見て、あきれたようにロンガが言う。

「ハ、ったく……噂をすれば影が差すとは言っが……ほどがあるだろ……」

「いま、ちょうどキョウコさんの話をしてたんだよ」

「ああ、こっそり聞いてたから知ってるわ」

「ハ、な、何！？」

うるたえるロンガ。当然では、あるか。

「あはは、まあ、ロンガちゃんには後で地獄を見てもらおうとしてえー、『七罪星』について、私たちにも話、聞かせてくれない？」

「はっはっは！ ああ、構わないよ」

かくして。ここに“風^{シルフ}霊”と“火^{サラマンダー}竜”、四大精霊の内の二種がそろったのだった。

そして。いよいよ『七罪星』の目的が判明する。

「……なんか、前より性格が酷くなってる気が」
「んー？　なんか言った、ロンガちゃん？」
「ハ、にやんでもねえよ……」
「すっごくなんでもなくなさそうなんだけど」

第八閃——END——

第九閃『精霊と称号』

ヒフトフの町の中。『七罪星』^{アジト}本部の洋館。その中の広めの一室に、“「称号」持ち”と呼ばれる、主に戦闘的な任務を行い、“精霊憑き”^{スピリウル}だけで構成される七人の幹部……そのうちの五人が集まっていた。

部屋が一番奥に置かれた椅子に座り、集まった面々の視線を受けるのは、大男イミル・ルカーソン。「強欲」のイミルだ。

「……“風霊”^{シルフ}には逃げられましたか」

この部屋唯一の出入り口となるドアの、その横の壁に背中を預け、その言葉を発したのは、「怠惰」のシャドウーラこと、シャドウーラ・エクステッド。肩の辺りまで伸びた長い黒髪と、黒いサンングラス、黒いコート、と黒尽くめの男である。

「ああ、グレインにも逃げられてしまつてね。我ながら情けない限りだ」

そう言うイミルを気遣うように、部屋に置かれた椅子に腰掛けた、女が声を発する。

「お怪我が無かったのならよかったですわ。それにその“風霊”^{シルフ}、イミル様の首が目的だというではありませんか。なら、待つていてもじきに現れるのではないでしょうか」

赤色のドレスを着て、扇子を持ち、カールした金髪を伸ばしている彼女の名はシェスカ・ヒルバリン。「色欲」のシェスカだ。

その隣の椅子に座る者も、同じく女だった。

華美な様相のシェスカとは対照的に、色の薄いストレートの髪の毛をまっすぐに伸ばし、白いワンピースを着ている。

「……今はシルフどうこうより……ラージアの件のほうが問題なのでは……？」

おずおずとイミルに向かい言う。

「フ、確かにそうだな。ライニーよ、お前の代わりに「憤怒」に就いた奴が死んだとあっては、目覚めが悪いか」

「……ええ……やはり多少は……」

ライニー、と呼ばれたその女の現在の称号は「嫉妬」である。

「……………」

ドアのほうを向いて——イミルから見ても——左側の壁に、シャドウーラと同じようにして、壁にもたれかかり、言葉を発さないままなのは、「暴食」のキロ。キロ・ウッドビレッジだ。

残る「傲慢」のビリーこと、ビリー・レフィは、シルストーム邸から戻るなり、自室に引っ込んでしまった。

「それで、本当なのか？「憤怒」のラージア……ラージア・ファフキンスがやられた、と言うのは」

イミルの口調は、その部屋に居るもの全てに問いかけるようだったが、その視線は、ただ一人シャドウーラの方へ向けられていた。

シャドウーラは、組んでいた腕を解き、背中を壁から離すと、イミルのほうに向き直ってその口を開いた。

「ええ……二、三日前です。ラージアが連れていた小僧から、呪具『魔蜘蛛電話』で連絡があり、それによると、どうやら相手は“火竜”のようです」

。

シャドウーラの淡々とした低い声を聞いても、その他の四人は身動き一つしなかったが、それでもその一瞬、部屋の空気が張り詰めた。

「火竜」。四大精霊と呼ばれる、“精霊憑き”の能力の一。

ここに居る全員……すなわち『七罪星』幹部、“「称号」持ち”の任務対象、即ち、捕獲対象、である。

「と、いうことは……ラージアは任務に失敗して殺された……と？」

「色欲」のシェスカが口を開く。

「まだ実際の生死はわからない。だが、その可能性は充分にある」
そこでシャドウーラは、サングラスに隠れた己の目を、キロに向

けた。

「「暴食」のキロ。　^{サラマンダー}“火竜”がお前の評価するとおりの実力ならばな」

「……“火竜”……キョウコ・フレアライズは強い。評価、というのなら「憤怒」こそ、ラージアには身に余る称号だったんじゃないか」

皮肉らしく、キロが言う。

「『「憤怒」は早死にする』……か……確かに、ラージアはまだ未熟だったかも知れんな」

一瞬不穏になりかけた場の空気を、イミルの声が和らげる。

異能のギルド（何でも屋）たる『七罪星』には、「称号」持ち以外にもいくらか、運営のための幹部が居る。にもかかわらず「称号」持ちが、その他とは一線を画す権利、待遇を得ているのは、ひとえに彼らが、『七罪星』へ舞い込んでくる依頼のなかでも危険度の高いものを行い、且つ、収入の七割近くを担う“戦闘集団”だからである。

もちろん各「称号」ごとに割り当てられた仕事もありはするが、割り振られる「称号」の基準は、その能力に因んだり、その性格に当てはめただけの、案外ぞんざいなもの。

そしてそこには幾つかジンクスがあり、そのうちの一つに、『「憤怒」の称号に就いた者は早死にする』というものがある。

「……私のせい……ですかね……大人しく私が「憤怒」に就いていれば……」

ライニーが俯き加減でつぶやく。

「……こうなつては仕方があるまい。『どうしようもないこと』はいっそ忘れて、次にすべきことを考えよう」

イミルの台詞に、部屋に居る者全てが頷いた。

「まずは“火竜”の回収をどうするか……か？」

キロは髪の毛を掻き揚げながら、言を発する。

「……それなら、もう既に問題ないかもしれない」

「ん？」

シャドウーラの言葉に、イミルは訝しむような目を向ける。

「これも『魔蜘蛛電話』からの情報ですが、ラージアからある程度事情を聞いた“火竜”は、そのままココ……ヒフトフに向かってくるつもりようです。

もしかすると、今頃は街の中かもしれません」

Φ

Φ

「アイア姉え、ロンガさん！ それにお父さん！ ……………と……？」

ロンガ達より先にシルストーム邸に戻っていたキアラは、帰ってきた彼らを見て目を丸くした。それも当然。父親達と一緒に、全く見慣れない、赤毛の二人組みが敷地内に入ってきたのだから。

「こんにちは、初めまして。キョウコ・フレアライズよ」

「妹のメイコです。よろしく」

「は、はあ……よ、よろしく……」

キョウコ、メイコの順で差し出された手を、呆けた表情のまま受けるキアラ。

「え、えっと、私はキアラです。姉がお世話になって……ます……？」

「ハ、語尾疑問系かよ。でもしっかりしてんなあ」

キアラの言葉をロンガが茶化す。横目でアイアを見ながら。

「なんでこっちみるのよ！」

「はっはっは！」

高く笑い声を響かせるグレイン。

「ハハハ、でもキアラ、お前そんな設定のキャラだっけ？」

「そういうことは考えた人の負けなんですよ、ロンガさん」

ケロリと笑って応える。

「……いいのかそれで」

「それより、お父さん！」

自らの父であるグレインに、キアラが鋭く声を浴びせる。

「これ、いったいどういうこと？ ……この人たち、誰？」

「誰って。さっき自己紹介してたろ？ アイアとロンガ君が旅先で知り合った人だそうだ」

「ふうん……」

ロンガとアイアの二人と、キョウコとメイコの二人を、それぞれ一瞥して、『一応は納得した』ような顔をする。

「それで……僕の息子たるリックスはどこに？」

「ああ、それなら……」

「んん！？ ……なんだ、また変なのが来やがったか」

噂をすれば、影。体の数箇所に包帯を巻いた姿は、痛々しいものの、基本的には無事のようなのである。

「あはは、『変なの』呼ばわりだよお姉ちゃん」

何が楽しいのか、メイコが笑う。

キョウコもそれに応えるように、クスクスと笑い、

「ええ、まあ確かに、急に押しかけたのは悪かったかしら？」

と言った。

「でもねー……」

「ん？ どうかしたか？」

ロンガがキョウコに顔を向ける。

「どうせなら一度に出てきてほしいわねー」

「……？」

「また自己紹介するのに、時間割かないといけないじゃないの。無駄なのよ」

「……」

キョウコの辛辣とも取れる言葉に、ロンガは沈黙と苦笑いしか返せなかった。

Φ

Φ

「何を考えている、キロ・ウッドブレッジ」

“「称号」持ち”の他には、一部の幹部にのみにしか与えられない、本部での自室。

そこに戻る途中、キロはシャドゥーラに呼び止められた。

「何を……とは？」

立ち止まり、横目でシャドゥーラを見る。

「フン、とぼけるつもりか。“風^{シルフ}霊”の話だ。お前の実力なら、半殺しにして連れてくることも出来たはずだ。

それに、処分予定だった実験動物^{モルモット}どもを、研究施設から持ち出して……アレは、お前の手に負えるモノはないぞ」

先刻と同じように壁に背を預け、腕を組み、サングラス越しでも判るほどに鋭い視線をキロの背に向けている。

「けっ、お前が考えてる以上に大物だぞ“風^{シルフ}霊”……ロンガ・シーライドは。

それに――」

「ム!!!? ……………!!!」

一瞬で、体の向きを変え、その距離を詰め、シャドゥーラに肉薄したキロは、その拳をシャドゥーラの鼻先に突き出していた。

「次にグラム達を『実験動物^{モルモット}』だとか言ってみろ……」

その目は、敵意を通り越し、殺意にすら染まっていた。

「半殺しでは済まさん」

そう言ってから拳を下ろして、再び身を翻すと、キロはシャドゥーラの視界から離れていった。

一人廊下に残ったシャドゥーラは、黒いコートのポケットから、

一枚の紙を取り出した。

「次の任務は……ん？　なんだ……ビリーのじゃないかコレ……まったく、変なところで適当だなイミルのジジイ……」

ひらりと、手から離れたその紙が、ゆっくりと床に向かって落ちてゆく。

その紙が、シャドウーラの足元の影に落ち——そしてそのまま、影の中に沈んで消えた。

「面白そうな任務だったな……」

口角を吊り上げ、シャドウーラは呟いた。

Φ

Φ

ガギイイイイイ！！！！

日の翳り始めた空に、二振りの大剣がぶつかり合う音が響く。

その内一振り——腰まで伸びた茶髪の女が持つ大剣から放たれる炎が、触れ合った、相手の大剣が纏う風ごと飲み込むように、銀髪の少年へ迫ってゆく。

フレード・オブ・サラマンダー

【火竜の大剣】。揺らぐ炎をそのまま固めたような、大きく反り返った刀身。その根元から切先まで燃え盛る姿は、まるで巨大な松明。

それが彼女——キョウコ・フレアライズの“神器”スキルだった。

「はあああつ——！！」

対する銀髪の少年は、剣が放つ風で炎を振り払うと、後ろ跳びで距離を取った。

フレード・オブ・シルフ

【風霊の大剣】。髪の毛と同じように、銀色の光を放つ彼の大剣は、幅が広く反りの無い、左右対称の刀身をもっていた。その刀身を覆うようにして逆巻く風が、何者をも阻むように、唸りを上げる。それが彼——ロンガ・シーライドの“神器”スキルだった。

「強く、なりたい」

そう言い出したのは、ロンガだった。

「今のままじゃどう考えても、『七罪星』には勝てない……」

「そう？ 私も『七罪星』のうち一人とは戦ったけど、正直そんなに強くはなかったわよ？」

首をかしげて、キョウコが言う。

「ハ、お前は十分強いだろ…… 少なくともオレは、身を以ってあいつらの強さを知ってるんだ」

「まあ、ロンガが言うならそうなんでしょうけど、あなたは私の私に勝ったのよ。」

「忘れないでね」

「ん？ ああ………」

「でも、どうするの？ 強くなるって言ったって、そう簡単にいくもんじゃないでしょ？」

と、不安げな表情をするアイア。

「まあ、その通りなんだが…… どうするかなー」

と、ロンガが横目で見たのは、誰あろう、グレインだった。

「……なんだいその目は。ひょっとして僕に助けを求めているのかい？」

コクリ

頷くロンガ。

「「ロンガさん…… 自分じゃ何も考えてないんですね………」」

キアラとメイコの台詞が見事に被った。

「はっはっは！ そんなに頼られてもねえ……」

とりあえず、試合みたいなのやってみるかい？」

そんな、グレインの適当な台詞で、今。

「風絶——」

ロンガの左手の、風の大剣が。

「劫火——」

キョウコの右手の、炎の大剣が。

「一閃！——」「剣嵐！——」

大きく振り下ろし振り上げられ、巨大な風と炎の刃を創りだした。
「ちっ……！！」

——やっぱりか！！

ロンガが舌打ちをしたように、風とぶつかり合った炎は、その一部が風を乗り越えてロンガに迫ってゆく。

「ハ、だが喰らうか！——」

横一文字に剣を振るい、残る炎の刃に向けて風圧を放ち、それを相殺した。

「へえ、やっぱり、強くなってるじゃない」

燃え盛る大剣を、掲げながら、ロンガに笑いかけるキョウコ。

「そりやどうも。だが——まだまだなことぐらい分かってるんでな——」

右足を前に出し、両手で持った大剣の切先を後ろに流し、力をためる。

キョウコもそれを左右逆にしたような姿勢をとる。

「喰らえ——！！！」

まるで鏡映し。

“風霊”と“火竜”の、戦意に満ち満ちた視線が交錯し——

二振りの大剣が、ほぼ同時に振るわれた。

迸る風と炎を遠目に見つつ、アイアは独り呟くように言った。

「ホント……強いよね……」

“精霊憑き”のことかい？」

「わっ！？ お父さん！？ もう、いきなり現れないでよ……」

「ホントに、羨ましいですよねあの能力」
ちから

「って、次はメイコちゃん!？」

「どうやって、人間には届けませんね、あの強さは」

その台詞は、広い庭を駆け回る二人を、細い目で眺めながら。

「はっはっは!」

グレインが笑い声を響かせ、その場に腰を下ろす。

「まあ、本人たちは少なからず疎ましく思ってるようだけどね」

「ええ、ロンガさんには何があったのかは知りませんが、少なくともお姉ちゃんは……」

アイアの隣に、グレインと同じく腰を下ろしたメイコが言う。

「……そういえばさ、ロンガがその……イミルだっけ? その人を自分の父親を恨むようになったきっかけって何なのかな」

「さあ? 流石にそんなことまでは、僕も知らないよ」

「そう……」

「……強く……なりたくはないか?」

「「えっ?」」

グレインの口から出たその言葉に、アイアとメイコは目を見開いて、振り向いた。

「さつき、メイコちゃんは、『どうやっても人間は精霊憑スピリットきに届かない』と、そう言ったけど、それはあくまで素質、資質の問題であって、案外、努力次第でその差は埋まるものだよ」

「修行でも……つけてくれるの?」

半ば冗談を疑うように、アイアは父親を見る。

「はっはっは! そうだよ。その通りだ。この僕、グレイン・シルストームが、娘と娘の友達たちのために一肌脱ひとかみごうじゃないか!」

すっくと立ち上がり、グレインは高らかに言い放った。

「ぬがっ……!!!!」

「「「え?」」」

ロンガのうめくような声が、アイアたちの耳に届いたときはもう、ソレは目前に迫っていた。

「……!!」

咄嗟に二人を守るように、グレインが飛び出す。

だが。

「ちっ、消える風霊^{シルフ}！」

持ち主であるロンガの声を伴った意思に反応し、宙を舞う銀色の大剣は、姿を消した。

「~~~~っ！！　ちよつとロンガあ！？」

グレインの背後から顔を出し、アイアが叫ぶ。

「ハ……わりい、つい手が滑った。（……いま、オレが思うよりも一瞬早く消えたような……？　気のせいかな？）」

「手が滑ったって！　下手したら死ぬところだったじゃない！！」

「なんだよ、悪かったって言ってるだろ……？　文句ならあいつに言えよ」

そういつて、ロンガが指をさした先には、キョウコ。

彼女は、一瞬、ふっと笑って。

「ああら、私のせいにする気？　あなたが私程度の攻撃で剣をはじかれるからでしょう全く情けないことこの上ないんだからロンガったらそんなロンガには地獄の業火をお見舞いしても良いんだけどどうかしらってか絶対嫌よねだったら即座に取り消しなさい謝りなさい平伏しなさい今すぐ今すぐ今すぐいますぐ！」

「ごめんなさい……！」

謝った。即座に。ロンガが謝った。思いっきり頭を下げて。

勢い余って土下座までしそうだったが、何とか自尊心で踏みとどまった。

「……………」

ロンガをしてこのざまである。

直接怒られている訳ではない、アイアやグレインも一瞬硬直してしまった。

メイコは妹ということで、耐性でもあるのだろうか、にこやかに笑っていたが。

Φ

Φ

「ん、オレ達も鍛えてくれるのか？」

キアラの淹れた紅茶を手にとつて、ロンガが口を開く。

「ああ。『七罪星』に居たころは研究員をしてたつて言つたろ？
ある程度なら、“^{スピリチュアル}精霊憑き”を強くする方法も心得ている」

「ハ、それは頼もしいな。……ホントに」

最後の部分は優雅に紅茶を飲むキョウコを横目で見ながら。

「（ロンガ……ホントにキョウコさん苦手なんだね………）」

そう思いながら、ふとアイアは窓の外を見た。

既に外は暗く、六人は屋敷の中の部屋に場所を移していた。キアラが残りの五人を呼びに出てこなければ、ロンガとキョウコは今頃も『修行』という名目の憂さ晴らしをしていたかもしれない。

アイアには、二人とも、何かに苛々しているように見えていた。理由もわからずその身を狙われているのだから、無理も無いかもしれないが。

「それにしても、今日はいろんなことがあつたねー」

腕と背筋を伸ばしながらそう言つて、力を抜くと同時にため息を吐く。

「ハ、確かにな……」

アイアの弟リックスとロンガのくだらない喧嘩に始まり、『七罪星』イミルと金髪の少年の襲来、イミルとロンガの関係の発覚、グレインの過去の発覚、フレアライズ姉妹との再会。

「チエック！」

「ま、負けた！？ 私が！？ く……」

ロンガ達が紅茶を飲んでいるテーブルとは、少し距離を置いて。キアラとメイコは床に盤を置き、チェスをしていた。

「次は負けないからねキアラちゃん！」

「望むところです！」

二人とも笑顔で、とても楽しそうである。

「何知らないうちに仲良くなつてんのあんたら」

二人の姉は声をそろえる。

「別に、仲良いんだから問題ないだろ？」

と、ロンガは言うが、二人の顔……特にキヨウコは複雑そうだった。

「ハ、気持ちはわからんでもない……いや、やっぱりわからん」

「はっはっは！ まあ、いいじゃないか。なんだか平和で」

そういつてまた笑うグレインに、ロンガは溜息をつきながら、

「そうでもないぞ？ “四大（オレ）一精霊” がいる限り、『七罪星』はまたココに来るだろ……？」

「……確かにそうね。私たちはココにはいないほうがいいのかも」

ロンガの言葉に合意するキヨウコ。

「ちょ、ちよつと待ってよそんな……」

「そつだよ二人とも」

アイアの言葉を遮って、グレインが口を開く。

「ココまで来て逃げるなんて、僕も許さないよ。」

今君達のやるべきは、『七罪星』とも互角に戦える力をつけることだ」

「ハ、でも、あんたらに迷惑がかかることも確かだろ？ コレは究

極、オレ達の問題なんだ。関係の無いあんたらを巻き込むわけには

………っ！？」

ロンガが言葉に詰まったのは、アイアの顔を見たから。そしてその目が、うるうると涙を湛（た）えていたから。

「関係無いわけないよ……『巻き込むわけにはいかない』？ もう十分巻き込まれてるよっ！」

震えるアイアの声に、メイコ、キアラも会話をやめて顔を向ける。

「ロンガ……あんたの目的は『復讐』だって言ってたけど、それだけじゃないんでしょ？」

「ハ、なんでそんなことが分かるんだよ」

「なんだか、どうしてかは分からないけど、ロンガは何かを取り戻すために戦ってる、そんな感じがしたの」

「……………」

沈黙したロンガを、キョウコが横から小突く。

「ホラ、何か言いなさいよ。アイアちゃん泣かしてただで済むと思ってるの？」

「いや……ってか、泣かしてないし！」

「私も泣いぢえないし！」

「噛んだ。多分泣いてた。」

「はっはっはっはっは！！！」

湿っぽくなつた部屋の空気を切り裂いたのは、グレインの高らかな笑い声。

「……………なんだよ？」

「いや、特に意味はないんだけどね？」

「「ホントになんだよそれ！！！」」

ロンガとアイアのツツコミが飛ぶ。

「はっは！　なんだ息ぴったりじゃないか。」

「いいかい、ロンガ君。アイアも言ったように君たちと僕たちももう、無関係とはいえない立場にいる。だったら、君の目的が何であれ……………」

「私たちに手伝わせてくれてもいいじゃない。ねっ！」

グレインの言葉をアイアが引き継ぐ。

この親子もまた、息ぴったりだった。

「もちろん、キョウコさんも」

「あら、そう言ってくれるなら、お言葉に甘えようかしら」

「ハ……………たく……………」

「ばつが悪そうに、頭をかき、そっぽを向くロンガ。」

「ふふふ」

それを見たアイアの顔からは笑みがこぼれた。

「さあて、そうと決まれば、今日はゆつくり休もう。

流石にもう『七罪星』の連中は来ないだろうし…… キアラ、テ

イレイはまだ帰ってないのかい？」

シルストーム家四人キョウダイの一番上、アイアの姉にあたる、
ティレイ・シルストーム。

彼女の性格は、四人中もつとも特殊といって良く、且つ夜毎どこかにふらりと出て行つては、朝方に帰ってきたりこなかったり、といった悪癖の持ち主である。

「そうみたいね。今日は帰ってこないかも。気づいたらいなくなつてたから、いつ出て行つたのかも定かじゃないんだよね」

とは言え、イミルたちの襲撃の騒ぎのなか、敷地内にいたなら顔を出した筈である。ならば、それより前、午前中には家にはいなかったのだろう。

「朝から出て行くななんてなんか珍しくない？」

アイアの疑問に、

「いや、ココしばらくアイアはいなかったから知らないだろうが、最近ではそんなに珍しくないんだ。全くどこで何をやっているのやら」

グレインはそう答える。

「あら、もう一人キョウダイがいるのね」

「うん。私のお姉ちゃん——だ？」

ズズリ

「……何の音？」

「……………」

ロンガが警戒するように、椅子から立ち上がる。

ガチャ、

部屋のドアの音が鳴る。

「な……」

「ティレイ姉え!？」

いち早く駆け出したキアラが、倒れそうになるティレイの体を支えようとするが、小柄なキアラではそれは難しかった。

「わっ」

「おっと」

二人して倒れそうになるところを、グレインがその腕で抱える。

「ティレイ? 一体どうしたんだい?」

とりあえず床にティレイを寝かせ、問いかける。

ティレイは汗だくで、ずいぶんと疲労しているようだった。

汗にぬれた髪の毛の合間の目は、つらそうに堅く閉じられている。

「これは……」

「目立つた外傷は無いみたいだけど……」

ティレイを覗き込んでキョウコが言う。

「この人が、さっき言ってたアイアさんのお姉さんですか?」

「うん…… でも、どうしたのティレイ姉え……」

アイアが呼びかけるが、ティレイは応えない。いや、応えられないのだ。

「どうだ? 何かわかるのか?」

ロンガがグレインに話しかける。

「うん…… まるで魔力を無理やりに使い切ったあとみたいな……
典型的な魔力枯渇の症状なんだが……」

魔法などで魔力を使用しすぎると、その消耗は生命力にまで及び、
身体機能に障害を及ぼしたりする。

だが、ティレイの魔力量は魔力を大量消費する古代魔法を日に5・
6発放てるほど多い。親であり経験豊かな“魔法使い”であるグレイ
ンを超え、もはや“人間”の出せる数字ではまさに限界を超えて
いる。

ウル “^{スキル}神器” のカタチだけとは言え、魔力の使用に特化した“^{スピリ}精霊憑

き”ならば話は別だが。

「そんなティレイが魔力枯渴なんて……容易には想像できないんだが……」

「魔力枯渴……」

そのとき、ロンガとグレインの頭の中で、何かが繋がった。

「まさか!」

二人は思わず立ち上がると、

「ふえ、な、何!？」

狼狽するアイアや、怪訝な顔をするキョウコ達を残して、

ドタドタと音を立てながら、先を争うように部屋を出て行った。

「え……だから……一体何？」

「とにかく追ってみましょう、アイアさん!」

呆然とするアイアにメイコが声をかける。

「はっ! でも、えっと……」

「ティレイ姉えなら私が見てるから!」

「! うん、ありがとねキアラ!」

走って部屋を出るアイアと自分の妹を見送って、

「そんなに焦っても良いこと無いわよ、まったく……」

キョウコ・フレアライズはゆっくりと部屋を出た。

Φ

Φ

一階ロビー、大広間。

相当な大きさのパーティが開けそうなその部屋は、二回へ続く階段、いくつかの部屋の扉、そして正門へ続く大きな扉があるのみだった。

この屋敷にもっと人がいたころは、ここもずっと華やかだったのだろうが、その面影は今や無い。

そして。

「よお、久しぶりだな」

外から、もしくは外へ続く正面の扉。

底に背中を預け、ごつい手袋をした手でボサボサの髪を掻き揚げる人物。

「キロ……ウツドビレッジ……！！！」

「キロ君……」

二階から現れた二人を目にして、「暴食」のキロは口の端を吊り上げた。

「夜分遅く悪いね……なんて、そんな建前は要らないか。」

ロンガ、用件はわかるだろう？ オレと戦え」

「……………！！！」

ロンガの後ろから続々と人がやってくる。

メイコは再び怪訝な顔をしたが、その姉キョウコは一瞬驚いた顔をした後、

「アンタは……」

憎々しげに呟いた。

サラマンダー

「ん？ なんだ“火竜”もいるのか！？ おいおいおい……いくらオレでも同時に二人も相手は無理だぜ」

そう言いつつも、その顔にはヘラヘラとした笑みが張り付いている。

「ハ、安心しろよ、キロ。皆には、手は出させない」

「え、ちよつとロンガ！！？ 何考えてんの！？」

アイアが声を張り上げる。

「キョウコたちも、手は出さないでくれよ」

「別に……男同士の喧嘩に水をさす気は無いわよ」

「ちよつとキョウコさんも！」

「そうよお姉ちゃん！！」

「いや」

そこでグレインが口を開く。

「キロ君の実力は確かだ。ああ言っちゃいるが、おそらく二人相手でも戦って見せるだろう」

「でも、それじゃ尚更——」

グループ・オブ・ベヒーモス

「それに、あの手袋……【暴食獣の手袋】……ティレイの魔力をほぼ全部吸収しているし、相手が増えるということは逆に彼にチャンスを与えてしまう」

グループ・オブ・ベヒーモス

【暴食獣の手袋】。キロ・ウッドビレッジの“神器”スキルであるそれは、今まさに彼の手を覆う手袋であり、その能力は、あらゆる魔力を吸収し蓄え、魔力による生成物を容易く破壊し、生体の魔力を奪うことで戦闘不能にする。

「それにアイア、奴には仲間がいたろ？」

ロンガがアイアのほうに顔を向けながら言う。

「……確かに」

「オレは直接戦ってないから分かんが、そいつも只者じゃないだろう。」

多分、外で待機でもしてるんじゃないか。キロがヤバくなったときのために」

「……………」

アイアも、もうそれ以上何も言わなかった。

「さて、キロ。少し待たせたが……一対一……勝負だ」

ロンガの利き手ひだりてが光を放ち、銀色に光る大剣を生成する。

ブレード・オブ・シルフ

【風霊の大剣】……」

「ふっ、一対一ってルールだからな、ムラマサは使わないさ。」

だが、今度は本気で行く」

その顔は、嗜虐的な笑み。

「少しは強くなってないと——」

両雄が、同時に、互いに、向って、疾走を、開始する。

「——死ぬぜお前！——」

ロンガ・シーライド VS キロ・ウッドビレッジ。

その第二戦の火蓋が、斬って落とされた。

第九閃——END——

第十閃『裏切りと寝返り』

「少しは強くなつてないと——死ぬぜお前」

キロ・ウツトビレッジ 黒髪の青年は、“手袋”をつけた手で構えながらそう言った。

「ハ！ てめえこそ、オレがあの子の時のままだと思つたら大間違いだ！」

ロンガ・シーライト 銀髪の少年は、“大剣”を振り回しながらそう言った。

視線の交錯。

一瞬の思索。

両者共に、石の床を蹴つて走り出す。

「フン、僅かばかりの間に何が出来るという！ 見せてもらおうか——」

キロの右の拳底。それをかわされたと見るや右手を引き戻し、すぐさまロンガの脇腹を抉るように左の手刀を突き出す。

「くっ……！！」

反射的に、大剣でガードしそうになるロンガだったが、キロの“スキル 神器”の能力を思い出し、咄嗟に背後へ跳んだ。

「……なんだ、結局逃げるだけか？」

挑発するように——半分は訝るように——キロが言う。

「ハ、“魔力を食う手袋”…… 何であれガードできねえのは厄介だな」

グローブ・オブ・ベヒーモス 【暴食獣の手袋】。触れた魔力を際限なく吸収し溜め込む、左右一対、手袋の“スキル 神器”。

それ故、魔力によって存在を保っている“神器”や“魔法”の効果で生み出されたものは、強度以前に、其処に“在る”ということが出来なくなってしまう。

また、身体に直接触れられれば、そこから魔力を吸われてしまう。

「……………」

ニマリ、と、ロンガは笑む。

「風絶——一閃！！！」

ひだり
利き手で持った銀の大剣で空を一斬り。

圧縮された風の刃が、キロへ一直線に飛ぶ。

「無駄だ！」

払い除けるように、キロは右手を振って。風の刃は掻き消えて。

「ハ！」

されどその隙に。ロンガはキロに肉薄し——

「はあああああつ！！！」

大剣で斬り上げる！

「くっ——」

キロの手袋をした左手は、切先の軌道上。ソレが身体へ届く前に、大剣は崩れ去る——筈だった。

——ガイイイイン——

「……………ばっ……………かな……………！？」

弾かれ高く上がるキロの左腕。

同じく振りあがる風纏う大剣。

その風に圧され飛ばされ、空を舞う赤い水滴。

「（——浅いか！）」

続けざまに、キロの右側から、風ぐように一閃が放たれる。

それをキロは手袋で弾き返した。

もつとも、大剣のその重量である。キロはバランスを崩し、一瞬足が覚束なくなる。

「おらああああああ！！！」

そこにロンガは、弾かれた反動を利用して、左回りに回転し、今度は逆側から、大剣を叩き込む。

「くそおっ！！！！（どうなってやがる！！！！）」

辛うじて——その“神器”^{スキル}を以って——キロはそれを凌ぐが——

「まだまだあああッ！……！」

今度は正中線を切り裂くような縦斬り。

「う、うおおおおおおおおおおおッ！……！」

防ぎ切れないと考えたキロは、全ての防御——受身すら——を捨て、その場から思い切り跳び退った。

その結果、ロンガの大剣は石の床を叩き碎くに終わり、キロは何度か転がって、腰が抜けたような姿勢で喘いでいた。

「は、はあ……はー、はー……」

（つく、防御どころか、恥まで捨てたぞ今！……！）

「ハ、かわされちまったか……」

そういうロンガも、キロほどではないにせよ、息を切らしていた。

「……………」

キロはしばし逡巡し、

「……………なるほど。そういうことが……」

／／／／／／／／／／

「どういうこと……？」

ロンガとキロ、二人から少し離れた位置で、アイアは呟く。

そこには、アイアの父グレイン、^{サラマンダー}“火竜”の^{スピリチュアル}“精霊憑き”キヨウ

コ・フレアライズ、その妹メイコも一緒だ。

「あのキロってヤツの能力は、魔力を吸うことでしょ？　どうして

ロンガは……あの手袋に“神器”^{スキル}をぶつけて平気なの？」

その問いには、傍らのグレインが答える。

「おそらくだが、ヒットの瞬間に、ピンポイントでヒットする場所に多量の魔力を送り込んでいるんだろう。」

魔力を吸収するとは言え、一瞬に全て消し去るわけじゃない。瞬間、無くなった分を補ってやる事が出来れば、それで充分“神器”^{スキル}

の形状は保てるわけだ」

「……なるほどね……」

されどそう呟いたのは、アイアではなく。

遠い眼でロンガとキロの闘いを見ていたキョウコだった。

/ / / / / / / /

「しかし、そんなにいい策とは思えないがな」

ロンガを睨みつつ立ち上がりつつ、キロは言う。

その額からは一条の血が。

「ハ、そうか？」

「確かにこうして一撃への足掛かりにはできるが、結局お前は魔力の消失を抑えられてるわけじゃないし、結局オレの“手袋”にはお前の魔力が溜まっていくんだ。

つまるところ、ジリ貧なのは変わらねえんだよ！」

キロはそう言うと、ダン！ と、床を踏み鳴らし、ロンガへ突進する。

ロンガはそれに横薙ぎで応戦するが、

「ふっ……！」

ギンッ！ と乾いた音がして。

「……！！ な……ッ」

ガツチリと。

両の刃を押さえ込むようにして、堅く分厚い手袋が、ロンガの大剣を捕らえていた。

「つつ……やっぱヘビーだな、大剣の一撃は

ブレード・オブ・シルフ

キロがそう言う間に見る見る間に、【風霊の大剣】は碎け崩れ去り消え去っていく。

「く——」

慌てて距離を取ろうとするロンガだが、もう遅い。

既にそこは、キロの射程範囲！

スッ、とキロの手がロンガの目の前に伸びる。

「吐き散らす万華鏡——！！！」
カレイド・ヴォミット

上下に構えられた両手の手袋から放たれる、魔力の散弾。

「が、ハ——」

それは一瞬ロンガの足を空に浮かせたが、吹き飛ばすほどではなく、されど動きは止まらざるを得なくて——

「ヴォミットブロー——！！！」

右の拳底と共に放たれる、高密度の魔力の散弾。

散弾、とは形容するけれど。それはあくまで“魔力を放つ”コトが、本来の役割でないが故に、真に『弾丸』にはできないだけであり、吐き散らす万華鏡の数倍の密度をもつソレは最早、小型の砲弾と殆ど変わらなかった。

即ち。

今度こそロンガは吹っ飛んで。

無慈悲に壁に叩きつけられ、無残に床に落ちた。

「が、は……、く、くそ……っ」

地に伏すロンガは、顔をゆがめ、キロを睨むことしかできない。

「ふん、やはりその程度か。ロンガ・シーライド。

オレに勝てないようじゃ、イミルはもっと倒せないぞ？」

「！……」

《クスクスクス……》

ロンガの頭の中で、キロの嘲笑の顔といつか聞いたきりの“風霊シルフ

”の声が重なる。

「~~~~ツ……！！！」

歯を食いしばり、何とか立ち上がるうとする。その眼に宿る怒りは、キロへのものか、醜態を晒す自身へのものか。

ソレを見下ろしていたキロの視界を、

ジャキリ、と。

紅く燃える炎が遮った。

「いやー……最初に言わなかったか？」

『二人同時は無理!』『一対一だ!』って」
苦笑いを浮かべながら、横目にその“炎”の持ち主を見る。
その視線の先には、当然、キョウコ・フレアライズが。
「ええ……だから一対一よ？」
あなたをぶった斬りたいのはロンガだけじゃないの。
そのロンガがもう戦えないんだから…… 順当に行けば私の番で
しょ?」

Φ

Φ

「誰が……『もう戦えない』だ……!!!!」

ザゴン!

ロンガの目の前に、めらめらと燃える大剣が突き立てられる。
「土下座しながら言っても説得力ないわよ?」

確かに。床に這い蹲り、両手について上体を僅かばかり持ち上げ
ているその様は、見様によつては土下座に見えるかもしれない。

「いや、土下座じゃねえし! オレはまだ」

「負け犬は黙ってなさい」

ピシヤリ、と。ロンガの言葉を遮って。

「……………」

目の前に突き立てられた大剣と正反対の温度を持つソレに、ロン
ガは黙り込むしかなかった。

「え。言い包められんの、ロンガ!?!」

そんなキロの声も空しく響き。

「ふふ、じゃあ、第二ラウンドってことで——」

「二人とも、いや三人とも、ちよつとまちなさい」

キョウコとキロが視線をぶつけ合ったところで、近づいてきてい
たグレインの止めが入る。

その後ろから、アイアとメイコも付いてくる。

「……………」

集まった面々の顔を見まわして、キロは顔を強張らせる。

「……なんだ？ オレを帰さないつもりか？ ならさっさとかかってきたらどうだ。一応は相手してやんぞ！」

叫ぶキロの視界の隅で、アイアがロンガを助け起こしている。

「ロンガ、大丈夫？」

「ハ、大丈夫に見えるか？ ……ならきつと大丈夫だ」

そういつて立ち上がったロンガの眼は、値踏みするような色を湛えて、キロを見ていた。

内一人は手負いとはいえ、“^{スレリウル}精霊憑き”二名。それに加え“^{ウイザード}魔法使い”三名。

対魔力使用者において、無類の優位性を誇る【^{グロウプ・オブ・ベヒーモス}暴食獣の手袋】が有るとは言え、完全に危機な^{ピンチ}その状況で、キロ・ウツドビレッジは笑っていた。しかめっ面のまま、口元を大きく歪めて。

「……おかしいんだよ、キロ君」

「おかしい？ はっ、何がだよ」

「君がここにいることが、だ」

キロは眼を細めて、言葉の主、グレインに視線を固定する。

周りの者も、グレインの言葉を怪訝に思い、真剣な面持ちで次の言葉を待っている。

「おかしいんだよ、キロ君」

グレインは繰り返す。

「僕が邪魔なら、ロンガ君を攫っていききたいなら、腕利きを集めて大人数でこの屋敷を襲撃でもすればいいのに、イミル含め“七罪星”はソレをしない。

何故か？ 理由は簡単」

そこまで言つて、グレインは鋭い眼でキロを見据える。

「集められる人数にも限度がある。それにこの街は、一僕の家（シルストーム家）含めいくつかの“^{ウイザード}魔法使い”の家と、“魔力”の使

用に大反対の教会勢力、さらには“七罪星”なんて異能集団が混在する、言ってしまうえば特殊な街だ」

ロンガはグレインの台詞を聞きながら、初めこの街に来たときに協会の許可の下、例外的に“魔力”を振るう“断罪者”と一戦交えたことを思い出す。

もつとも、アイアの姉、ティレイの乱入というか、無差別勝手な攻撃で『勝負』にはならなかったが。

「大きな人数を集めれば、教会に感付かれて睨みを利かされかねないし、下手を打てばそのまま激突、戦闘、ってことにもなりかねない。」

だから、そう簡単に大人数で攻めるわけにはいかないんだ。

かと言って、今日のように一人や二人では逃がしてしまうし、何より本気で戦うなら互いに無事では済まない」

暫しの静寂。

「キロ君。僕は君の単独行動が、組織としての“七罪星”の意向に沿ったもの、少なくとも許可を取ったものには、どうしても思えないんだよ」

「……話が長いぞ、グレイン。って！ ハモってんじゃないよ！」

ツツコみまでハモるロンガとキロ。

「あんたら、ホントは仲いいんでしょ……」

呆れたような顔でアイアが言った言葉はも、あながち間違いではないかもしれない。

「ハ……とにかく、今この状況で、キロがここに来るのはおかしいってコトか」

「いくらロンガ君との一騎打ちに勝ったとしても、僕たちにキロ君を大人しく帰す理由がない。」

仮に、この街の事情云々がなかったとしても、キロ君ならここに乗り込んできたじゃ済まないのは分かっているはずだ」

表向きはロンガに応えてのその言葉。だが、グレインの話し方は

明らかにキロへ意識を向けていた。

「じゃあ……このヒトは、どうしてココへ……?」

メイコがキロとグレインの顔を交互に見ながら。

「はあ……なんか、剣呑な雰囲気だなあ、オイ」

両手のひらを上に向け、呆れたような諦めたような苦笑いを浮かべ、口調は軽く。キロはそう言った。

「単刀直入に言う」

軽かった口調が、少し重みを増す。

「^{シルフ}風霊”ロンガ、それに”^{サラムンダー}火竜”キョウコ。

お前らはいますぐ——」

『^{エイク・クリス・ガンハンマ}氷属性：鎚撃電弾　!!!』

呪文の詠唱が広い部屋に響くと共に降り注ぐ、複数の大きな氷の塊。

「くっ……!?!」

「ふん」

「わっ」

「はっは!」

それはおそらくキロを狙ったものだったのだろうが、その大きさと数に、近くにいたキョウコ、グレイン、メイコまでもその場を飛び退いた。

ズガガガガッ

氷の塊が、固い床を抉り、突き刺さる。

「姉えちゃん!?!」

ロンガ達のいる一階ロビーと、二階の廊下は吹き抜けになっていて、空間的には繋がっている。

その二回の廊下の柵に片手を置き、アイアの姉、ティレイ・シルストームは立っていた。

「驚いたな……もう復活しやがったのか……」

憎々しげに、キロが呟く。

「キロ・ウッドビレッジ」

ティレイの口から出たのは、キロの名前。

「ご苦労様」

続けて出たのは、あるうことか労いのそれ。

その場にいる全員が、困惑した面持ちでティレイを見上げる。

「！ バカな！ ティレイお前、まさか……！」

逸早く、何かに気づいたグレインが大声を上げる。

「さようなら、お父さん」

ニコリ、と。

一片の曇りも偽りも無く、満面の笑顔を残し、ティレイは奥へ姿を消した。

「くっ……！！」

それを反射的に追いかけるように、グレインは走り出し、階段を駆け上がる。

「……？ なんだ？ 一体何が……」

「とにかく、私たちも上に行ってみましょう、ロンガさん」

うるたえるロンガにメイコが言う。

「ああ……」

頷きつつもロンガは、キロを見やる。

「……ロンガ、オレも行っても構わないか？」

「……………」

「オレはもしかすると……」

キロのその顔に浮かぶのは、後悔と焦燥の念。

「ハ、勝手にしろよ。ただ、後ろから不意打ちとか、そういうのは勘弁な」

ぶつきらばうに、ロンガは言う。

「感謝する……」

「ロンガ、早く行かないと。歩ける？」

アイアの言葉に頷き、ロンガは足を踏み出すが、すぐによろめき、

結局アイアの肩を借りることになった。

Φ

Φ

「リックス！」

シルストーム邸、二階。

ロンガ達がほんの数刻前までいた、その部屋には、怪我をして自分の部屋で休んでいたはずのリックスが、横たわっていた。

「お……親父……」

「リックス、何があつた？ テイレイは。キアラはどうした」

リックスの身体に、目立つた新傷は無い。

額を押さえ、僅かに頭を振って、自分の意識をしっかりとらせてから、リックスはこう言った。

「親父、大変だ。キアラが……キアラがさらわれた……！！」

「……………！！」

「さらわれたって誰に……まさか……」

言葉を失うグレインをアイアが代弁する。

「ティレイ姉えだ……」

歯を噛み締めて、リックスはその名を口にします。

「そのときのこと、詳しく話してくれる？」

アイアが沈痛な面持ちで、屈んで、リックスと視点の高さをあわす。

「僕は、キアラに呼ばれたんだ。ティレイ姉えが大変だからって……多分あんたらが階下で白熱してるときだったろう、ココまで声や武器のぶつかる音が聞こえてたよ……」

ロンガとキロをみながらそこまで言っつて、リックスは再び目の焦点を虚空に求めた。

「キアラと二人、この部屋に来てみれば、ティレイ姉えが立っ

て……

そこからはいまいち覚えてない……何か、そう、聞いたことの無い呪文を姉えが唱えたんだ……

そしたら急に身体が動かなくなつて……視界がどんどん暗くなつて……

くそ！」

荒々しく、右手で床を強く殴りつける。

リックスは、齒を食い縛り、押し黙つてしまう。

「どういう……ことだ？ いや、どういふつもりなんだ、お前の姉貴は」

傍らのアイアにロンガは言葉を向ける。

「わからない……けど……ひゃっ!？」

これまで膝を付いていたグレインが急に立ち上がり、横のアイアも、前のロンガも押し退けて、キロの胸倉を掴みにかかった。

「つな……!!」

「お父さん!？」

「キロ！ お前は……いや、お前らは知っていたのか!? 分かっていたのか!」

「な、何の話だ!? オレはただ……これ以上『七罪星』……イミルが動き出す前に、“四大精霊”は今すぐ街を離れたほうがいいと……」

キロの言葉に、ロンガとキョウコが訝しげな視線を送る。

「ねえ、あなたはその『七罪星』側なんじゃないの？ それがどうして私たちに忠告を？」

「……詳しいことはまた話すが……簡潔に言つて、『七罪星』の目的に不満を感じた。そういうことだ」

「キロ君……じゃあ、『七罪星』が“知っていて”、キアラをさらうつもりで来たんじゃないんだな？」

今だキロの胸倉を掴みあげたまま、嘘を許さぬ口調と顔で、グレインが言った。

「あ、ああ…… お前も言ってたろ？ オレが敵対勢力の一人として独りで来て、無事に済むはず無いんだから。グラムもムラマサも本当にココにはいない。」

それに、あんなやり方で、どうしてそいっただけが部屋に残るってわかるんだ」

「ハ、なーんか、ややこしいことになってきたな……」

とりあえずなんだ、確かなことは、キロが寝返ってアイアの姉貴も寝返った。

……そういうことだよな、グレイン」

「ああ…… どうやら、そういうことらしい……」

そこまで言って、グレインは初めてキロの胸倉から手を離す。

キロは一度、咳払いをして、

「『もしかしたら』と思ってロングとサシ張ってはみたが、期待はずれにして予想通りだったよ。たぶんこの調子じゃあ、傭兵団としての『七罪星』はともかく、そのトップ集団としての“七罪星”を相手取れば……勝ち目は薄い」

キロの辛辣とも取れる言葉に、ロングは言葉を詰まらせるが、結局何も言うことは無かった。

「でも…… ホントに姉えちゃんは裏切ったの？」

「可能性は高い…… いや、間違いなく確かだ」

アイアの口から出た疑問を、グレインはあっさりと否定する。

「どうして！ そんなことが分かるの？」

「ハ、アイア…… 見てなかったのか？」

椅子を引き寄せ、そこに座ると、ロングが言う。

「あいつ、さっき魔法使ったとき、“魔導具”…… 持ってなかったぜ」

「――！！」

「……？ ねえ、メイコ、魔導具ナシで魔法って使えるものなの？」
キョウコが自分の妹に問いかける。

「いや、少なくとも普通一般の常識としては不可能だよ……」

「そうか、お前らは見たこと無いんだな、ブラッドボックス」

「肉体と繋がったままのブラッドボックスでも、ある程度の魔法の行使は可能だからね……」

それにソレの製作者たる僕が感じたんだ、間違いない。ティレイはブラッドボックスを持っている」

「……………」

フレアライズ姉妹は、説明を欲しそうな顔をしていたが、今は訊くべきときではないと判断したのか、口を噤んだ。

すでに“神器”の消えた手で、キロは頭を掻いて、

「結局、オレがココに来たのも、遅かった、いや逆効果だったのか

……………」

キアラとやらをさらったのは、ホントいい手だ。

“さらわれた”以上、早く助け出さねばならない。“早く助け出さねばならない”となると、一度町を離れて、とか、悠長なことは言ってられない」

ため息を交えながらそう言った。

「ハ、『攻められないなら攻めてきてもらおう』ってことか……」

「……………」キロ君の話を聞く限り、さらわれたのがキアラだったのは、偶然のようだが、まあ、一番さらいやすかったのも事実か……

どちらにせよ、まずいことになった……………」

「？　ねえお父さん、キアラがさらわれたってだけで充分まずいことなんだけど……………」もしかして、ほかに何かあるの？」

頭を抱えて俯く自分の父親に、不思議そうな顔を向けてアイアは問う。

「それは私も気になるわね、あなたの『知っていたのか』って言葉、キアラちゃんが“さらわれた”事実とは別のことを言ってるように聞こえたわ」

そこにいた全員が、グレインに注目する。

そんななかで、グレインは重々しく口を開いた。

「仕方ない。いや、特にアイアやリックスには、今まで黙っていて悪かった。」

「皆にも話そう、キアラの秘密。いや、これは僕自身の秘密とも言える」

「……………!!」

「そして、ロンガ君、キョウコ君、キロ君、いや、アイアもリックスもメイコちゃんもだ」

「……………？ なんだよ、親父」

「私も……………ですか？ 言うかなんで私だけ『ちゃん』付け……………」

「夜明けまでに、」

目を閉じグレインは言う。

「君達全員、」

目をゆっくり開きグレインは言う。

「今の二倍は強くしてやる！」

力強く。怒りと決意に満ちた眼と表情で、グレインは言った。

「よ、夜明けまでに、って……………」

「はっはっは！ 早い話、『今夜は寝かさないぞ』ってことさ！」

娘をさらわれた怒りやら娘が敵となった悲しみやら、様々な感情が裏返ったのか、グレインのテンションはいつの間にかあがりきっていた。

「お父さん……………きもいよ……………」

ま、それぐらいしないとダメなのかもね。私だってロンガ達に置いていかれるのは御免だし」

と、覚悟を決めるように、アイア。

「ハ、望むところだ。いや、望んでたところだ。戦いの直後ってコトで、ちとキツイが、ホント、それぐらいやらねえとダメみたいだな」

心底うれしそうに、心底凶悪な笑みを浮かべて、ロンガが。

「今より強くなれるなら、断る理由は無いわ」

「もちろん、私も」

キョウコ、メイコのフレアライズ姉妹も。

「くつくつく……ったく何年ぶりだよ……稀代の天才、「電王」、
“凍血の魔法使い”！数々の異名をとったグレイン・シルストー
ムの指導を受けるのは！」

キロも子供のような笑みを浮かべながら。

「本来なら、僕は外野のようだけど……双子の姉を実の姉にさらわ
れて、僕も相当頭にきてる。参加させてもらうよ、親父」

リックスも、確かな決意を眼に宿して。

「覚悟しなよ、皆。僕の指導はそう甘くないよ。

そして覚悟してるイミル……我が娘に手を出したこと、後悔させ
てやる！」

声高に、グレインはそう叫んだのだった。

第十閃——END——

第十一閃『懇願と告白』

「かつての友に、一泡吹かせてやろうじゃないか」

グレインのその言葉は、即ち、『ロンガ達に修行をつける』ということ。

力強く言い放ったグレインにメイコが、

「でも、修行って言ったって、時間なんか無いじゃないですか。どうするんです？」

と、首をかしげながら言う。

「はっはっは！ 流石に充分とはいかないだろうが、うん。」

ココにいる皆には、それぞれ素質がある。“七罪星”ともやり方次第では戦える程度までには持つていけるさ」

「……つまり今のままじゃ、どうひっくり返っても勝てない、と」
苦笑いしながらアイアは言った。

「わかつちやいるつもりだけど、なんだかなー」

ダラリと手を下げ背を曲げて、気だるそうな声を出す。

「ハ、修行するにせよ何にせよ、その前に色々と聞かせてもらわねえとな」

その場の空気を仕切りなおすように、ロンガが言う。

その視線は、グレインを捕らえていた。

“七罪星”のこと、キアラのこと、グレインには様々なことを聞かなければならない。

「ああ、もちろんそのつもりさ。でもそのまえに……」

グレインはそいいいながら、キロに視線を移す。

それにつられ、ロンガの眼もキロのほうへ。

「……………」

「僕はキロ君が寝返った理由を先に聞きたいな」

グレインが問うと、恐らく話を切り出すタイミングを計っていたのだろう、キロは緊張を解くように、長く息を吐いた。

「流石はグレイン。何でもお見通しってトコロか」

「はっはっは！ 流石に何でもは見通せないさね。まあ、君が何か言いたがってることぐらい、ココにいる全員気づいてたよ」

笑いを浮かべながらグレインは言う。

「（ハ、気づいてるわけねえよ！ 適当言いやがって！）」

と、ロンガが心の中でツッコむ横で、

「（え、皆気づいてたの！？ ウソ、私だけ？）」

アイアは勝手にうろたえていた。

「そういえば、まだ聞かせてもらって無かったわね。あなたがどういう経緯で『七罪星』を抜けて、今ココにいるのか……」

抑揚の無い声で、キョウコは言う。

「『七罪星』のやり方が気に入らないとかなんとか言ってたけど……結局、あなたがココに来た理由——きっかけは一体何なの？」

「はあ、分かってるよ、どうせ話すつもりだ。そんなにオレが信用ならんか？」

両掌を上に向けて、うすら笑いを浮かべながらキロは言——

「「なるわけねえだろ！！！」」

ジャキツ！

「おっと……」

一方は椅子に座るロンガから。もう一方は壁際に立つキョウコから。

左右から突き出された二振りの大剣。

それをキロは、

「ふっ！」

と、一瞬脚に力を込めたかと思うと、華麗にバック宙を決めつつ、いつの間にか生成していた“神器”^{スキル}で以って両側の大剣を打ち砕きそのまま——着地と共に、床に両膝をつき腰を曲げ掌と額を床につける——いわゆる“土下座”の体勢をとった。

「ロンガ、キヨウコはもとより、その場にいた全員が、凍ったように固まり、言葉を失った。」

「ハ……………バック宙しながら土下座とかお前……………何、ツツコミ待ち？」

ある種馬鹿馬鹿しいような沈黙を破ったのは、ロンガだった。

「いや……………バック宙から土下座に入ったのには深い意味はないんだが、なんとなく、な」

「……………アンタ、この空気どうすんのさ」

遠い眼をしたリックスが言う。

「いや……………できれば無視の方向で……………」

キロの顔は見えないが、きつと気まずさを堪えるのに必死だろう。「はっは！　それでも土下座をやめないってコトは、その“土下座”自体にはちゃんと意味があるんだろう？」

グレインのその言葉に、キロは少し唖ってから、

「……………お前らが……………オレのことを信用できないのは分かる。というか、元々敵だったのを信用しろ、と言うほうが無理がある。それでも」

そこまで言うと、キロはキツ、と顔を上げて、グレインを、ロンガを、キヨウコを、部屋にいる面々を順番に、睨むように懇願するような眼で見た。

——否。実際、懇願しているのだ。

「それでも、恥を忍んでプライドを捨ててでも、お前らに頼みたいことがある」

「頼みたい……………こと……………？」

アイアが、キロを促すように呟く。

「つてか、こんなので尺取らないで、さっさと言いなさいよ」

「流石に冷たすぎるよおねーちゃん！！！！」

バツサリとしたキヨウコの言に、メイコが大声でツツコんだ。

「ハ、まるで自分の存在を誇示するかのようなツツコミっぷりだな

……」

「ロンガ・シーライド……何故それを僕のほうをむいて言う？」

眉間に皺を刻んでのリックスの台詞。

「お前も負けるなよ？」

「どういう意味だそれは……！！」

「エイク・ブラム・ウオク氷属性：弾丸氷塊　……！！」

「「ギャツ……！」

リックスとロンガの後頭部に、こぶし大の氷塊がクリーンヒットする。

「全く……そーいうのは、もうちよつとシリアス味の薄いトコでや
りなさいよね！」

頭を抱えうずくまる、自分の弟とロンガをアイアが咎める。

「ハ、仕方ねえじゃねえか、この小説、キャグパートとシリアスパ
ートの区別無いし」

頭をさすりつつ顔を上げてロンガが言う。

「いや、まあ……そうなんだけどね？」

「なあ、そろそろ……話していいか？」

呆れ果てた、と言った感じでキロは土下座を止め、今は正座の状
態だった。

「はっはっは！　愉快なのはいいけど、尺を無駄に使うのは困り者
だね！」

『一番愉快で一番尺を使うお前が言うな』と、キロもロンガもア
イアもリックスもキヨウコもメイコも、皆総じて思いはしたが、誰
もツッコむ者はいなかったという。

「ごほん！」

キロはわざとらしく盛大に咳払いをして。

「簡潔に、単刀直入に言う」

――刹那、部屋を沈黙が埋め尽くす。

「グラム・ブロックエッジを救ってくれ。そのためになら、オレは
どんな協力も惜しまない」

そう、力強く言い放ったキロの眼は、真っ直ぐとグレインを見据えていた。

「――」

「グラム……って、あの、“魔法使い”^{ウィザード}の女の子のこと？」

アイアが訊ねると、キロは頷いてから、

「そうか。お前はグラムと一度戦ったんだっとな、アイア・シルストーム」

と言いながら立ち上がり、服に付いた埃を払った。

「ふん、グレイン、お前には『B3-17』とでも言ったほうが分かりやすいか？」

「なっ――！！？」

「……親父……？」

リックスが、怪訝な顔をして立ち上がり、父親に近寄る。

アイアもグレインの様子に、ただならぬ雰囲気を感じていた。

「グラム……まさか――いや、そんな筈は……アレは確かに――だがキロ君なら――」

椅子に座ったまま、グレインは額に手を当てて、ブツブツと呟いている。

「ハ、つたく、さつきから話が進まねえったらねえ。

なんなんだ、その『B3-17』ってのは。その他洗いざらい、知ってることを話したらどうなんだよ」

ロンガが苛立たしげに、グレインに詰め寄る。

やがてグレインは、長く細く息を吐くと、

「そうだね。キアラのコトも話すと言っていたし、むしろ丁度いいか……」

言いつつ、グレインは己が娘のほうを向く。

「アイア、君が『ブラッドボックス』の話をしたとき、『腕に変化する魔導具』とそれを形容したけれど、実際僕の右目がそうであるように、“ブラッドボックス”が媒介とする体の部位はどこでもいいんだよ」

「……？ それとどう関係が？ そのグラムって子は右腕が“ブラッドボックス”だったってことでしょ？」

「右腕だけ……だったらどんなに良いか」

吐き捨てるように、憤りのこもった声でそう言ったのは、キロだった。

「はあ……さっきのキロ君の口上と被るけれども、僕も簡潔に、単刀直入に言っとしようか」

言葉を紡ぐグレインの顔は、形容するのなら、そう。神に祈りをささげ許しを請うような、そんな表情だった。許されるはずが無いと、わかっていながら。

「『B3-17』——グラム・ブロックエッジ。『B3-18』——キアラ・シルストーム。

この二者の身体は、その全てが“ブラッドボックス”なのさ」

Φ

Φ

「——え？」

「——な、んだ、よ……それ……」

ロンガやキョウコですら、眼を見開き、息を呑んだその告白に、当事者の姉弟であるアイアとリックスがともに声を発せられる筈が無かった。

『それは一体どういうことだ』、と。

「なにも何も、どういうことも何も……そのままの意味だよ。

頭の中から爪先、脳、筋肉、心臓、その他内臓、器官に到るまで、“ブラッドボックス”という物質でできた——言わばサイボーグ。それが我が娘の正体なのさ」

グレインは重苦しくそういうと、頭に手を当てたまま、項垂れ黙

ってしまった。

「それじゃあ、なんだ。僕の！ 血を分けたと思っていた双子の姉は！ 人造人間だったってのか！」

リックスが叫ぶ。

グレインはそれを聞き、

「『人造人間』……それは違うよリックス。

ブラッドボックス

“BB”には、媒介となる肉体が——“BB”化できる肉体が必

ブラッドボックス

要なのさ。

グラム

『B3 - 17』と『B3 - 18』は産まれる前、胎児の状態から

キアラ

少しずつ、その身体を“BB”に馴染ませてきただけ。

キアラは本当に君達と血を分けた、寸分の違いも無く僕の娘だ」
リックスとアイアに向けてそう言って、おもむろに立ち上がる。

「だから」

グレインの表情。決意に満ちたそれを見たロンガは笑っていた。

「僕は命を懸けてでもキアラを救いたいし、後悔もしている。

だから『七罪星』も辞めたのだしね」

「ブラッドボックスボディ（Blood Box Body）」

でB3……全く、ひでえ計画だったよ」

キロが自嘲するように言う。

「コレは、僕が、僕の過去とつけるべき勝負でもある……のかも、
知れないね」

「ハ、てめーらの過去なんぞはどうでもいい。

アイアの妹がさらわれた理由が知りたかったんだ、オレは」

ロンガがぶつきらばうに、言って。

一度閉じた眼を再び開く。そこに、確かな闘志を燃やして。

「人造人間だかサイボーグだか、くだらねーことはもういいさ。

叩き潰しやあ、いいんだろうが、『七罪星』！！」

「さ、夜明けまでに強くしてくれるんでしょ？ もうそんなに時間無いわよ」

ロンガに触発されたのか、キョウコが笑って言う。

「はっはっは！ 君達が少し頑張れば済む話さ！」

「くだらないって……………おまえ……………」

部屋から出ようとするロンガを睨むリックス。

「ふふ！ 確かに、くだらないね」

「！ アイア姉えまで！」

「なにがあつても、身体が何でできていても、キアラはキアラですよ？」

そこにどんな差があるって言うのよ。ね」

明るく笑ってアイアは言う。

「……………！！！」

「それに、姉えちゃんもきつと、何か事情があるはず」

「ああ……………」

「アイアさん、リックスさん、置いていかれますよ？」

メイコの声に應えてから、アイアとリックスは二人で部屋を出た。覚悟を、決めて。

Φ

Φ

「ハ、それで？ アイツは何処に行った」

シルストーム邸の広々とした、と言うよりは広すぎるロビー。

そこに集まった面々だが、肝心のグレインの姿が見えなかった。

「さつき、『用意がある』とか言って、どこかに行ったぞ。何を始める気なんだろうな」

キロが辺りを見回しながら。

その時、階上から、あの快活な笑い声がまた聞こえてきた。

「はっはっは！ お待たせみんな！！」

「ふえ……………」

ドズン、と、その重量を誇示するかのような音を立てて、ロンガ

たち目の前に置かれたそれは、何やら特殊な呪具、魔導具の類のものだった。

長身のグレインの腰を超える高さの筒。上下の底面以外、透明なガラスらしきモノでできたその中には、恐らく普通ではない、水と巨大な水晶が。

そしてグレインの右手には、怪しい文字の書かれた羊皮紙が三枚。「ふう……これを運ぶくらい手伝ってもらえばよかったかなー」

と、自分の肩を揉みながら。

「……グレイン、コレは？ オレも見たことが無いぞ」
キロが大きな筒を指差して言う。

「てつきり、『七罪星』時代の時のやり方で行くのかと思ってたが」
「はっはっは！ あれも確かに効果的だが不安定だし、何より時間がかかるからね。」

荒療治の力押しにも程があるが、この方法を使わせてもらうよ」
「で？ コレで何をどうしようって言うんだ？」
ロンガの質問に、グレインは大きく息をつき、真剣な声色で言った。

「コレが最初で最後の説明にして最終確認だ。いいかい？」
この修行は効果的だ。成功すれば全く無傷のままに、強大な力を手に入れられるだろう。

しかしこの世の中、ハイリスクハイリターンは世の常だ……ぶっ
っちゃけよう、この修行、失敗すれば死ぬ」

「……はい？」

ほぼ全員が引きつった笑みを浮かべてグレインを見た。

「ちょ、死ぬって何さ！ どんな修行よそれ！！」

「全くだぜ親父！ 強くなるために死んじゃったら元も子もねえ！」
アイアとリックスの姉弟が大いに焦って叫ぶ。

「はっはっは！ 心配しなくても、アイアとリックス、それにメイ
コちゃんには、この修行、受けてもらうわけには行かないんだよね。
残念ながら、コレは“スピリチュアル精霊憑き”専用なのさ」

「精霊憑き」^{スレリウル} 専用……って、じゃあ、私たちはどうすれば？」

不安がるメイコ。

グレインはにこやかな笑顔で、

「大丈夫。僕の本職は“魔法使い”^{ウィザード}だ。ちゃあんと“魔法使い”^{ウィザード}用の修行も用意してあるさ」

と、右手に持った羊皮紙の束を振りながら言った。

「？」

「さあ！ ロンガ君、キロ君、キョウコちゃん。僕の修行を受けるか否か！」

死に打ち勝つ覚悟があるか否か！」

口角を吊り上げて、明朗な声でグレインは言った。

それに応えて、

「ハ、愚問だな。死ぬ覚悟なんぞとくに済ましてあるさ。オレはやるぜ」

と、ロンガは言った。

「フン、言ったはずだ。オレはどんな協力も努力も惜しまないと。必ず強くなってやる」

と、キロは言った。

「力が欲しい。そのためなら、死だろうが生だろうが乗り越えて見せるわ」

と、キョウコは言った。

「はっはっは！ 全く、頼もしい限りだね！」

皆決意の笑みを浮かべる四人から少し距離を置いて、アイアとリックス、メイコの“魔法使い”^{ウィザード}組は口を開けて呆けていた。

「ねえ、リックス……」

「なんだ、アイア姉え」

「たまに“精霊憑き”^{スレリウル}がほんとーに化物に見えるんだけど……やつぱりあれ、脳味噌の構造とか違うのかしら」

「……さあ……違ってても不思議じゃないと今思った」

「妹たる私でも、お姉ちゃんの言動はたまに理解できませんからね

……」

「キアラを助けるために協力してくれるのはとても有り難いし、皆それぞれ目的もあるんだろうが……」

「流石に、死ぬ可能性のあることを、あんなに楽しそうにやってもらっちゃ、私たちとの差を感じずにはられないですね……」

「そういう意味では、“魔法使い”でありながら、楽しそうなお父さんが一番ズレてはいるよね……」

と、三人が苦笑いで話をしていると、

「それでは！」

唐突にグレインの声が響いた。

それと同時にグレインは、自分の右眼窩に指を突っ込み、眼球を引きずり出す。

右手の中のそれが、手のひら大の立方体が変わっていくのを、幾度か見たロンガはもう見飽きたのか眼をそらし、対照的に初めて見るキョウコは興味深そうに、ため息すら漏らしながら見ていた。

「あ、そうだ、コレを渡しておかなきゃ」

空になった眼窩から血の涙を流しながら、グレインは左ポケットから何かを引っ張り出した。

「ペンダント……か？」

「まあ、今は何も聞かずに、コレをつけておいてよ。絶対役に立つからさ！」

グレインの言葉を訝しながらも、ロンガたちはそれを首につけた。

「Сократить / 切つて / Открыть / 開く / Га

лстук / 結んで / Закрыть / 閉じる /

Сон в темноте / 闇にて眠る / Спящая / 眠り姫 /

расавица / 眠り姫 /

Сила / 汝が力は / Некоторые / 一部の / фанта

стические / 夢幻の中に！ /

グレインが魔法を詠唱する声が響く。

その魔力に反応してか、筒の中の水がごぼごぼと泡立ち始めた。

「それではまずはロンガ君」

「ん？」

「夢の世界へ、いつてらっしやい!!」

「ハ、え、ぬあぶっ!!」

思いつきりの力を込めて。グレインは右手のブラッドボックスを、ロンガの額へパイ投げでもするかのように、叩き付けた。

※※※※※※※※

——ここは——

「ハ、なるほどねえ……夢の世界って、そういうことか……」

何処までも真っ白で真っ白な、床も天井も壁も分らない部屋^{セカイ}。

『クスクス、久しぶりだねロンガ。しばらく来ないから寂しかったよ』

「ハ、“風霊”^{シルフ}か……なるほど。つまりは、お前を倒せば強くなれる、と。そういうことか？」

ロンガはそこまで言っただけで、後ろを振り返り、声の主を見た。『クスクス……あの“魔法使い”^{ウィザード}随分と面白いことをしてくれるね。いいよロンガ。決着をつけようじゃないか』

「……………!!」

そこにいた“風霊”^{シルフ}の姿は、前に見たような子供の姿ではなく。ワンピースのドレスのような服を着た、色の薄い髪の女だった。

「『“神器”^{スキル}発動——【風霊の大剣】……!!!!」

白いセカイでの勝負。コレで何回目だったか。

そんなことを考えながら、ロンガは存在の無い床を蹴って、駆け出した。

第十一閃——END——

第十二閃『夢の世界と其処の覇者』

ロンガ・シーライドの精神世界――

真っ白で真っ白で、壁も床も天井も区別の無い部屋。くうかん

ただただ白いだけで、限りがあるのかすら判別できない。

それでもロンガはここに“来た”とき、その“中心”だけは何処なのか理解でき、始めに自分が立っている場所はいつもそこだった。しかし今――

その場所に立ち、銀色の大剣を持って佇むのは――

「シルフ風霊”……！！”」

『クスクス……久しぶりだね、ロンガ。ボクも随分と姿が変わったけれど、ちゃんと認識してくれてうれしいよ。ま、この姿自体、キミの深層に存在するイメージだから、当然と言えば当然なんだけどね』

明るい口調で語るシルフの姿は、今までロンガより遥かに小さい子供であったのに対し、今ロンガの目の前にいるそれは、成長した女の姿だった。

「……………どういう趣向だよ、おい」

簡素なイメージのする、ワンピースのような衣服。そこから覗く長く細い脚と腕。

その姿は言うなれば、ロンガのイメージによって構築された姿であり、それに対し年齢を推し量ることは、意味があるとは言えないが、見る限りでは、ロンガと同じか少し上程度に見えた。

「ハ、とりあえず、オレはお前を倒せばいいのかな」

左腕を薙ぐように振って、“神器”スキルを生成し、言い放つ。

《そう！ 倒せばいいんだよ！！！！》

「ん！！！！？」

突如響いた、ロンガのもので、シルフの物でもない声。

「な……誰だ!？」

『馬鹿な。ココはボクとロンガしか存在できないはず——』

《正確には。 “ロンガ君しか存在してはならない” ハズなんだけどね》

「——っ」

声を辿って目線を動かす。

“それ”は、ロンガの足許にいた。居た。

《ふう……やつと話ができたか。初めまして、魔導具『ユメロ・タ
イプR』！ です!》

流暢に喋るそれは、ウサギの姿をしていた。

否、正確には、ウサギのぬいぐるみのような姿をしていた。継ぎ接ぎの。

『く——何だお前は！ ココはロンガの精神空間、ロンガの想像が創造した空間だ！^{セカイ} 元から内にいるボク以外、ロンガの他にココで存在できるものか!』

その“ウサギ”に向ってシルフは眼を見開き、怒鳴る。

《そんなこと、一介の魔導具が知るわけ無いだろう？

ただ、私はソレを実現するための魔導具なんだから——寧ろココにいないと、私は欠陥品だということになってしまう》

『魔導具——、クス……あの“魔法使い”^{ウィザード}の差し金か……!』

一度笑い声を漏らしはしたものの、その顔はより怒りに染まったように見えた。

「って、ココの主人たるオレを放って会話してんじゃねえよ!」

と、足許のウサギのぬいぐるみを踏みつけて。

継ぎ接ぎのソレは、そのままハロウィンパーティーに出してもいい位の不気味さがあった。

《ろ、ロンガ君!? その脚を除けたまえ! 死ぬ! 圧殺される!——!》

「ハ、要はあのグレインが、精神世界に潜った“精霊憑き”^{スピリウル}のナビ

ゲートのために製作った獣ってコトだろ？」

《ま、まあ、その通りだが、だからその脚を早くッ……！！》
言わば、ナビ獣か。と、ロンガは吐き捨てた。

「ハ、だったらお前なんぞ必要ねえ」

脚をウサギの上から下ろすロンガ。

《ふう……って、》

今度はそれを、ボールのように乱暴に蹴り飛ばした。

《むぎやあああつ！！》

ロンガから遠く離れて落ちるウサギ。

「生憎、ココには何度か来たことがあってね。とにかくコイツを倒せばいいんだろ？ それだけ分かれば充分だ」

左手の大剣を一回転させて、ロンガは構えた。

シルフの持つものと、同じ形をした、ブレード・オブ・シルフ【風霊の大剣】。

「クスクス、結構酷いことするんだねロンガ。でも、お陰でボクもすっきりしたよ。」

それで、僕を倒すだって？ クスクス」

シルフも、大剣を構える。

「それが如何に難しいか！ 身を以って知るといいよ！」

「ハ！ 成長しただけじゃなく、随分と感情が表に出るじゃねえか。いいぜ！ そっちのが楽しいからなあ！！」

両者共に、床と呼ぶのも憚られるような、名ばかりの床を蹴って、互いに向い駆け出した。

起き上がった“ウサギ”は、それを眺めながら。

《『成長した上に感情が出るようになった』、か……間違いなく、彼の中で“精霊”が占める大きさが増している……」

“精霊”は“彼ら”が自身の異能に対し抱く感情の具現。その姿は“彼ら”の深層でのイメージであり、当然その強さもそれにより決まる。

“精霊”を倒す……それは自らを倒すこと。

さあ、ロンガ・シーライド。その難しさ、身を以って知るがいい》
少し長めの独り言。
それは当然ロンガの耳に届くことは無く。
剣戟の音に、刻まれ、吞まれ、消えた。

Φ

Φ

「……そいつを、どうするつもりなんだ？」
七罪星のアジト。その地下深く。
金髪の少年、「傲慢」のビリー、ビリー・L・パッフェルベルは、
暗闇の中呟いた。

凄絶な笑みを浮かべる「強欲」のイミルに向って。
「フ、なあに、ただコレを囷にするつもりなだけさ……」
イミルの目の前には、椅子。そこに座るは、キアラ。
虚ろな眼を薄く開け、生気の無い顔を力なく俯けている。
まるで、糸の切れた操り人形のように。

「いや。だけだった。と言うべきか」
動かないキアラを前に、イミルは上機嫌で語る。

「やはりだ。シルストームの屋敷で一目見ただけでは確信できなかつたが、コイツは……いや、コレは、間違いなくBBBブラッドボックスボディの成功例……

……！」

「……………」

「ククク、素晴らしい！ 自己崩壊し消滅したと思われていた一体の現存が確認されただけでも幸運だというのに、行方不明だったもう一体までとは！

コレならば。四大精霊全てがそろわなくとも……！」

拳を握り締め、肩を震わせるイミル。

「……だが、そうモタモタもしていられまい。グレインのことだ。

明日にはコイツを『我が娘』だのなんの言って、取り返しに来るだろう。

もつとも、それが当初の狙いではあったが」

そこまで言って、後ろのビリーを振り返り、

「シャドウーラに全幹部を配置に付くよう伝えてきてくれ。その後お前も、俺と一緒に来い」

「……わかった。了解だ」

上気した声のイミルの命に、必要以上に抑揚を殺いだ声でビリーが応える。その顔には笑いが。

「？ 何かおかしいことでもあったか？」

「いや、別に。ただ、あんたが自分の歳を考えない行動に走るんじゃないかと、少しヒヤヒヤしてただけだ」

身を翻しながら、ビリーは言う。

イミルはその背中に向かい、

「フ！ 何を。俺はまだまだ若いわ！ それに、この俺だぞ？ 時間による老いなど、バツサリと断ち切ってくれる」

そう、大言壮語した。

Φ

Φ

キロ・ウッドビレッジの精神世界——

「右手には満月。左手には真昼の太陽。かと思えば、夕日に三日月、曇り空！」

下に眼をやれば、岩場に砂地に、沼、草原！」

パッチワークのような自分のセカイを見渡しながら、キロは嘆くように叫ぶ。

「ココは、言いたいドコなんだああああ……！」

《ドコもクソも、お前の精神なかだよ》

「うお!？」

いつの間にかキロの足許には、継ぎ接ぎのクマのぬいぐるみ。接ぎの縫い目が、顔の真ん中を斜めに走り、厳つい様相を呈すそれは、地面に胡坐をかいて座っていた。

《一応、自己紹介だ。オレは、魔導具『ユメロ：タイプB』》

「ま、魔導具だと……?」

《ああ。オレは、いや、オレたちは、グレイン・シルストームが製作した、精神ダイブ補助用魔導具。現実世界じゃ、ただのアクセサリだよ》

“クマ”の言葉を聞いて、キロはぼん、と手を打った。

「あのペンダントか! なるほどなあ…… ン、てことは、ココはオレの精神世界ってことなのか……」

《そうだ。さっきもそう言っただけだが?

しかし、まー、随分ふざけたセカイだなあ、おい》

クマはキロのセカイを見回しながら、溜息でもつくように言った。
「ふざけたセカイってなんだよ……」

《コレをふざけたセカイと言わず、なんと言う!?

どこか一場面の記憶が“精神世界”として現れるのならまだしも、お前のセカイは、時間も場所もごちゃ混ぜ。一体どうなってんだ?》
「どうなってるって…… 寧ろオレが聞きてえよ……」

そっついながらも、キロは、自分のセカイの異常さを感じ取っていた。

具体的にはないが。このセカイは、自分の精神世界であるのに、自分の芯となるものが、なにも、無い。このセカイの中心が分からない。

『浮かない顔をしているな、我が主よ』

「——っ!？」

満月の方向。そこから響いた大地を揺らさんばかりの低い声。

「お前は——」

そこにいた、怪物を。否、精霊を。キロは一目見ただけで、それ

と理解する。

それは、はつきりとした認識が無くとも、常に自分と共にあった存在だからだろう。

ベヒーモス
「“暴食獣”」

キ口の三倍近い体躯。岩のような肌。大きな口に巨大な二本の角。牛とも蛙とも獅子ともつかぬその容貌。

『ホウ……何やら異物がいるようだが……まあいい。ところで主よ』
あゝ

言つて、ベヒーモスは一步足を踏み出す。
五本の指の在るその前足は、キ口の“神器”、
スキル
【暴食獣の手袋】
そっくりだった。『ワシは、腹が減ったぞ』

「——ッッ……!!」

唐突に、角を向けて突進するベヒーモス。それを、

「おい……てめえ……」

キ口は“神器”
スキル
を生成した両手で角を掴み、しっかりと、受け止めていた。

「どういうつもり……だ!」

ベヒーモスの角を必死に押し返そうとするキ口。

しかし、両者の力は拮抗していて、共にピクリとも動かない。

『なに。主が我が主に相応しいか。確かめてやろうとした……までだ!』

「!」

荒々しく頭を振り上げるベヒーモス。

拮抗を崩され、バランスを失ったキ口は、為す術なく吹っ飛んだ。

「くっ……!!」

背中を打ちつけもんどりうったが、落ちた場所は砂地。

キ口はすぐに起き上がり、臨戦態勢をとろうとする。

が、

「はあっ!?!」

獅子のような後ろ足で地を蹴り、獅子とは似もつかぬ前足を振り

上げて、ベヒーモスは跳びかかっていた。当然、キロに向って。

それを、岩の地面を蹴って、避けるキロ。

泥の上に着地するが、そこを狙ってベヒーモスの巨腕が振り下ろされる。

派手に跳ねる泥飛沫。

『?』

「オレなら——」

下から響いたその声に、ベヒーモスは身体を振るわせる。

「ココだあ——!!」

四足のベヒーモスの腹下から放つ、最大(・・・)火力の“ヴォミットブロー”。

『ごあ……っぬう!!』

ベヒーモスは、閃光が奔ると共に呻き声をあげたが、すぐさま身体を振り、キロを跳ね飛ばした。

跳ね飛ばされたキロは、空中で姿勢を変え、草地の上で受身を取り、なお止まぬ勢いを、砂地に着地して止めた。

「はあ、はあ……やっぱり、オレの精神^{なか}、というだけあって、グロ―ブの魔力量の調節も思いのままか。もつとも、同じ精神の産物たるお前には、然して効いてないみたいだがなあ」

口元を拭いながら、キロは言う。平らな岩場に立って。

キロとベヒーモスの闘いを、“クマ”は興味もなさそうに、しかししっかりとそれを視ていた。

《ふむ。この短時間に、この場の状況だけでなく、特性すらそこまです理解したか。

流石は“「称号」持ち”、と言ったところだが……なるほど見えてきたぞ……

さて。奴は、自分の立つ地形が、常に自分に都合のいいものに成っていることまで、気づけているのかね？

“精霊”と互角なところを見ると、そこまでそれに侵されてはい

ないようだが、キロ・ウッドビレッジ。

お前の”芯”を見つけないことには、ソレを倒すことは難しいぞ
お……》

あくまでクマで、あくまでぬいぐるみのはずなのに。

その“クマ”は、嗜虐的な笑みを、その顔に浮かべていた。

Φ

Φ

「ところでさあ…… ロンガたちがやってる修行って、具体的にはどう
いうものなの？」

グレインの言う、『ウィザード魔法使い”用の修行メニュー”を受けながら、アイアは己が父に向かい言った。

「ん？ 興味あるのかい？」

腕を組んでアイアのほうを振り返り、応えるグレイン。

「まあ、そりゃあ……」

「そりゃ、あるに決まってるんだろ」

姉の言葉を引き継ぎつつ、リックスも会話に加わる。

「私も！」

と、遅れて寄ってきたのはメイコだ。

「ふむ…… やれやれ、随分聞きたがりの多いことだ」

そう言いつつもグレインの顔は、満更でもなさそうな笑みを浮かべていた。

そういったことを語るのが好きなのかもしれない。

「まあ、あまり時間も無いことだし、休憩がてら手短に行こうか。

君たちは、“精霊”とはどんなものか、知っているかい？」

話し始めたグレインと、話を聞くアイア、リックス、そしてメイコ。

その四人の視線は、石の床に申し訳ばかりに敷いた毛布の上、川

の字に眠る“精霊憑き（スピリウル）”の三人に注がれていた。

Φ

Φ

キョウコ・フレアライズの精神世界——

そこは、暗く閉ざされた協会。

ステンドグラスを通してのうつすらとした明かりしかない。

否。明かりは、あった。轟々と燃えて煌々と周りを照らす巨大な松明。

その松明が、音を立てて大きく振られる。

《うわあああああ！！！！　ちょ、タンマ！　ストップ！！！！》

「うるさい焼け死ね」

《ちよっと！！　せめて会話をしてくれよ！！》

炎纏う大剣が振り下ろされ、刃が教会の床を叩く。

《ひひひひひひひひひひ》

間一髪それを避けた、継ぎ接ぎ模様の“ヘビ”の悲鳴と、硬い物がぶつかり合う音が混ざり合って響く。

「ふん……すばしっこいわね……下等生物のくせに……」

キョウコはそう言いながら刃を引く。

“ヘビ”は安堵のため息を吐いて（手があればきつと胸を撫で下ろしているだろう）、改めてキョウコに目を向けて言った。

《正確には、生物ですらないけどね……》

「ふーん、じゃあ、アンタ何者？」

「え！？　いや、さっきも言ったろ！？　聞いてなかったのかよ！」

ゴオツ——！

と、激しい音と熱を振りまいて、“ヘビ”の横を駆け抜ける。

「やかましい。さっさと説明なさい」

黒く煤けた床からは、燻るように煙が昇っていた。

《は……はい……（滅茶苦茶だよこの人——！！）》

「なんか言った？」

《い、いえ……》

心の中で冷や汗を山ほど、否、海ほど掻きながら、魔導具『ユメロ：タイプS』は自分の存在理由、今キョウコというこの場所の説明をした。

「ふーん、じゃあ、私は“サラマンダー火竜”と一戦交えることになるわけね——楽しみ——あら？」

《どうしたんだ？》

「おかしいわね……いつもは強敵と戦うの、とっても楽しみなのに——なんだか、今回は、今回だけは——戦いたくない……ようない？」
《（なるほどね……この子の“火竜”を形作るのは、畏怖や嫌悪……か？）》

『それは当然だろう、キョウコ・フレアライズ』

教会全体が共振するような声と共に、その一角、キョウコの背後から狂うような熱と、焰の明かり。

「——！！？」

『なぜならワタシは、お前の恐怖で出来ているのだから』

《な……おいおい、ウソだろ、“サラマンダー火竜”……！！ 桁が違うぞコレは……！！》

燃える爪。巨大な翼。長い首。熱を放つ鱗。

高い高い教会の天井一杯に。

広い広い教会の幅全体に。

ねつりよう圧倒的存在感を以ってそこに居たのは。

「火竜……ドラゴン……」

まさに竜の名に相応しい、掛け値なく文字通りの、ドラゴンだった。

ブレード・オブ・サラマンダーその前肢の爪は、キョウコの持つ【火竜の大剣】と同形。

『まったく……嘆かわしいことこの上ないな。キョウコ・フレアライズ』

グレインの製作した魔導具である『ユメロ』をして、『桁が違う』と言わしめたサラマンダーは、高い位置にある頭を下ろすことも無く、睨みつけるようにキョウコを見下ろしながら、尊大な口調で教会の空気を振るわせる。

『決して力では負けていなかった。他の何においても負けてはいなかった。』

それを、たかが“風霊”^{シルフ}の小僧に不覚を取りよってからに『

「あの日のことを言ってるの？　はん、そんな昔のこととつくに忘れたわ」

あの日、とは、ロングとキョウコが戦って、そしてキョウコが敗北を喫した日。

そして、キョウコが贖罪の旅に出ることを決意した日。

『嘘を吐くな。お前とワタシは一心同体。それくらいの嘘、疑るべくも無い』

もとより、キョウコもそんな嘘が通じるなどとは思ってはいない。サラマンダーのその台詞も、彼（？）一流の冗談、だったのかもしれない。

『来い。お前がワタシを振るうに値するか否か。その身を以って示して見せよ』

そこで初めて頭を下げ、真正面からキョウコを睨む。

「……………」

『おい……………何か言えよ……………見られてるだけで燃え上がりそうだよ……………』

キョウコの足許で、継ぎ接ぎの“ヘビ”が縮み上がる。

ふう。と。キョウコの口から吐息が漏れて。

「いいわ」

ジャキリ。燃え上がる剣の切先を、眼前を埋める竜の眉間へ向けて。

「あなたは私の“恐怖”で出来ている。そう言ったわね？」

『ああ。その通りだ。自らの能力に抱く“恐怖”。それそのもの、

とも言えるな』

サラマンダーの応えを聞いて、キョウコの口元は妖しく笑みを形作る。

「なら私は。あなたを倒し、私の恐怖を断ち切って」

キョウコの言葉もそこで一瞬切れて。

「もつと強くなってやるんだから」

『《だど！？》』

サラマンダーだけでなく。“ヘビ”の声もまた、広い広い教会中に響いたのだった。

第十二閃——END——

第十三閃『回帰と覚悟』

『恐怖を……断ち切る？ 打ち勝つ？

いいだろう。ワタシはお前の恐怖でできている。見事ワタシを倒してみせよ。

キョウコ・フレアライズ』

老獯な口調で、ドラゴンは言った。

サラマンダー
火竜。

精霊の中でも極大の熱量を誇るそれは、キョウコの世界、広くも窮屈な協会の中でキョウコの眼前に鎮座していた。

「もちろん。そのつもり、」

ぐつ、と、キョウコは脚に力をこめて、

「よっ！」

思い切り跳び上がった。

『笑止！』

「――！！」

剣を振り上げサラマンダーに迫ったキョウコだが、しかしその刃は届くことは無く。

サラマンダーの腕の一振りですぐに打ち飛ばされてしまった。

派手な音を立てて、石の床に叩きつけられる。

「……………ぐ、う……………」

キョウコが苦しそうに上体を起こすと、ミシリ、と骨の軋む音がした。

『さあ、どうしたキョウコ・フレアライズ。

お前は……その程度か？』

その光景を、“ヘビ”は付かず離れずの距離で見ている。

《……大重量の大剣を持ったまま、巨大なサラマンダーの頭部まで飛び上がる身体能力は流石だけれど……無闇に飛び掛って勝てる相手じゃないね。

あのサラマンダー……自分が恐怖でできている、なんて言っただけど、大概の“精霊憑き”^{スピリウル}は自分の能力に多かれ少なかれ恐怖を覚えるもので、よって程度の差はあれ、大概の精霊は『そう』なんだよ。

それでも、わざわざそう言うことは……並大抵じゃ済まないぞ、キョウコ・フレアライズ……》

Φ

Φ

「“精霊”が、どんなものか？」

アイアは、父親の言葉を、反芻するように繰り返した。

“精霊憑き”^{スピリウル}が宿す“神器”^{スキル}の能力……もつというなら、それを言い表す名、でしょうか……？」

直接その問いに答えたのは、メイコだった。

「そう。“精霊憑き”^{スピリウル}が“精霊憑き”^{スピリウル}として覚醒する、一体どのタイミングでその名づけが為されるのか、詳しいことは何も分かったやいないがしかし、彼ら曰く、『知らない間に理解できている』んだそうだよ、その“神器”^{スキル}を」

「……理解できるのはその名前だけじゃないってことか……」

リックスは、今まで睨めっこをしていたグレインから渡された一枚の羊皮紙から眼をそらして言った。

アイア、メイコも同様の物を持っている。

「で？　それが、今のあいつらの状況と、どう関係があるんだ」

「うん、それでね、要は“精霊”っていうのは存在しない、モノですらないもの……のハズなんだけど、こういう理屈なのか、これも

不思議な魔力の力なのか……“スピリチュアル精霊憑き”はね、知らない間に飼っている、宿していることが多いんだよ」

「……その、精霊、を、か？」

リックスの言に、グレインは無言の肯定を返す。

同時に、次のように言葉を紡いだ。

「知り合いの研究者はね、“スキル神器”を使うたび、その魔力が精神にも影響して、自身が期せずして持った異能に対する、感情や想いが、明確な存在として徐々になんたら云々とか言ってたけどね」

「あ、絶対最後面倒になったな……」

「はっは！ その通りだよアイア！」

アイアのツツコミに、グレインは高らかに笑って応えたのだった。

「……メイコさん……だっけ。あの親父をどう思う」

とのリックスの問いに、

「あ、メイコで構いませんよ、リックスさん。ええ、まあ、楽しそうでいいんじゃないですか？ 軽いノリで」

「軽いノリ……ねえ……」

リックスがため息を吐きながら、手に持った羊皮紙に眼を戻そうとしたそのとき、

「ところで、お父さん」

アイアがまた声を発した。

「“次”はないの？」

「はっは、次って何を——」

言いかけて、グレインは固まる。

「まさか……全部、解いたのか！？」

「「なっ！？」」

リックスとメイコも同様に、驚きの声を上げる。

彼らが持つ羊皮紙には、幾行にもわたり、古代魔法に使われる文字で文章が。

グレインの言う、『ウィザード魔法使い”用の修行”とはつまり、コレを読み解くことで、魔法を使う際に必要な言霊を、より自由に扱い、

あわよくば、古代魔法の一つか二つを習得しよう、というもののなのだが、この難易度は並大抵ではない。

「あ、ああ、確かもう一部か二部、別のがあつたはずだ。

取ってくるから、しばらく待つてなさい」

「うん、お願い」

輝きださんばかりの笑顔で、床に座るアイアは、立ち上がるグレインを見送った。

「おいおい、マジかよ……まだ始まって三時間ぐらいだぞ!？」

僕はせいぜい二行半つてところなのに……」

アイアの羊皮紙を覗いてみると、その行間全てにびっしりと文字が書かれていた。

「あれ、まだそんなくらい？　メイコちゃんは？」

「私は、えっと、八行とちよつと、ですね」

ちなみに全部で二十行。

「何、僕、大分置いてかれてる？」

「ていうか、コレ……夜明けまでに終わるんでしょうか……」

「はっはっは！　こんなものは、コツを掴めば徐々に速くなっていくものだからね」

いつの間にか戻っていたグレインがメイコの背から声をかけた。

「お父さん！　早かったね」

「ああ。はい、コレ。それから、全部終わらなくなつて別に構わない。大事なものは、それで君たちが言霊を理解し、少しでも呪文として使えるようになることなんだから」

そういつてグレインは、またもとの位置に座った。

「それで、さっきの話の続きは？　途中で終わつてたでしょ？」

「ん、ああ。つまるところ、僕が“スピリチュアル精霊憑き”にかけた魔法と、彼らに課した修行というのは、自らの精神の中で、自らが生み出した“精霊”に打ち勝つこと。

自分の感情、という、ある種最も抗い難いものに勝つんだ。魔力を扱う力は、精神と共に成長する。だとすれば、これ以上無い成長

が期待できると思うよ」

「なんか、分かったような、分からなかったような話だな」

「でも、ま、そりゃあ苛烈な戦いを繰り広げてるんでしょ。私たちも頑張らないと」

アイアの言葉は、ともすれば皮肉にも聞こえたが、しかしその口調は、そばで眠る三人に対しての心配や気遣いが滲み出ていた。

「そうですね。頑張らないと」

アイアの言葉を繰り返したメイコは、最後にちら、と、姉達を見て、

「（そういえば、『失敗したら死ぬ』とか言われてなかったつけ、あの修行……」

ま、いつか。集中集中……っと）」

そんなことを思いながら、視線を例の羊皮紙に合わせた。

Φ

Φ

ぼた、ぼた。ぼた。ぼた、ぼた。

「はあ、はあ、はあ……くそ……」

ぼた、ぼた。ぼた。ぼた、ぼた。

白いセカイのなかで、真っ赤な血を腹部から落とすように流しながら、ロンガ・シーライドは立っていた。

辛うじて、立っていた。

『ホラ、どうした、ロンガ・シーライド。ボクを倒して強くなるんじゃないかったのか？』

ロンガの目の前、“風^{シルフ}霊”が見^{くだ}下すように見^{おろ}下ろして言う。

『ひょっとしてもう限界か？ 所詮はその程度なのか？』

「ハ、うる……ッせえ……！！」

低い姿勢から放たれたロンガの右手は、シルフの頬を掠めるに終

わった。

しかし、シルフがそれを避けた一瞬の隙に、ロンガは“神器”【
ブレード・オブ・シルフ
風霊の大剣】を生成し、横薙ぎに斬りつけた。

後ろに跳び退ってかわしたシルフだったが、一瞬間に合わず、その右手は半分ほどが失われていた。

『クス。やってくれるね』

シルフが短くそう言う内に、その右手は鈍く光を放ちながら、元の、完全な右手に戻っていた。

『けど、ま、ここは現実とはかけ離れたセカイ。今の程度のダメージは、ダメージにすらならないよ』

「ハ……！！ マジかよ、やっと一太刀浴びせたと思ったのに……」
ロンガの口からは、悔いの言葉と共に鮮血が溢れ出す。

『キミは、このセカイが何故真っ白なのか、知っているかい？』

「ハ、なんだよ、いきなり」

『いやあ、どうもこうもどういうわけか、キミがキミのお父さんと再会した頃から、どうにも調子がよくってさ』

手振りを交えて話すシルフの顔には不敵な笑みが。

『いつか話したろ？ このセカイは、間違いなくキミの精神世界で、主導権はキミにあるのだと』

「……………！！？ ……！ 嘘、だろ……………？」

何も持たない右手を、高く上に上げたシルフの頭上、ロンガが見た物は。

『考えてもご覧よ。キミのモノであるハズのセカイで、キミではない異物の傷が治る。キミが存在するべき中心にボクが立つ』

整然と、凄然と、何もない真っ白な中空に在って尚、存在感を失わない、数十にもおよぶ、銀色の大剣の群れ。

『まだ完全ではないが……このセカイの主導権、既にボクの手の中だ』

「ハ、ハ……おいおい……お前は一体、どこの英霊だっ、って話だよ……………」

傷の痛みなど、疾うに消えている。否、忘れている。

今はただ、眼前の光景に圧倒されて、ロンガは目を見開いたまま、苦笑いを浮かべるしかなかった。

『キミの中の、ただの精霊だ』

シルフが右手を振り下ろす、その動作と共に、幾本もの銀の閃きが、ロンガに向い、落ちていった。

Φ

Φ

「ぜー、ぜー、ぜー……つく……」

砂地や草原、さらには沼や岩場の混ざった、そのもの継ぎ接ぎのセカイのなかで、キロ・ウッドビレッジは立っていた。

“神器”【グローブ・オブ・ベヒーモス暴食獣の手袋】をはめた手を胸の前に構えて、満身創痍で立っていた。

「くそ……！　なんだってんだ！！　始めは何とかなると思ったが……ちい！」

キロが悪態を吐くのも無理は無い。

“スピリチュアル精霊憑き”ベースと言えど、所詮は人間。魔力を扱ったため、魔力に耐えるため、多少ばかり身体も丈夫ではあるが、そんなものは誤差の範囲。

対して“ベヒーモス暴食獣”。優にキロの三倍はある体躯に、並の獣を遥かに超える脚力。その馬力はキロとは比にならない。実在し得ない、キロの精神^{なか}だけの存在とは言え、少なくとも当のキロには、今其処に、掛け値なく存在しているのだ。

『どうした主よ。つらいか。苦しいか。』

加えて、いくら攻撃を加えても、一向に弱る気配を見せないベヒーモス。

実際、キロの息も上がって、どうにもギリギリ、といった体^{てい}だっ

た。

「はー、はあ、はあ……」

『案ずるな。今にワシが、すべて飲み込んでやる』
言って、ベヒーモスは大口を開けた。

「まずい——！」

何が来るのかも、何をされるのかも判らないまま——その判別を置き去りにして、キロは反射的に回避行動に出た——ハズだった。結果的にキロは一步も動くことができなかった。

「なっ……！？」

その足は、幾本もの茨に絡み付かれていたから。

「どうなってやがる……！！」

（さっきまでは、こんな足場じゃなかったはずだ……！）
もがけばもがくほどに、茨の刺は喰い込み、キロの自由を奪っていく。

そうこうしているうちに、大きく開かれたベヒーモスの口腔が、怪しい光を放ち始めた。

「（……！！^{ヴォニットブロー}魔力砲……か！？）」

“すべて飲み込んでやる”

ベヒーモスの言葉を思い出し、キロは自然と、笑みを浮かべていた。

「いいぜ……受けてやるよ！」

どちらが相手を喰らい尽くすか……勝負だ“^{ベヒーモス}暴食獣”……！！」

噛み合わせるように組んだ両手を胸の前へ、そして腰のほうへ持つていく。

「なんかどっかで見たことのある構えで情けないが……より直線的に、より重く放つには、コレが一番いいんでな……」

『いくぞ、主よ……』

ベヒーモスの口腔の光が、より強く、鋭くなっていく。

「天国か地獄か……勝負だあ……！！」

両者ともに。互いに向い、閃光を放った。

$$\Phi$$
$$\Phi$$

「何故だ……何故だ、キョウコ・フレアライズ……」

広大な教会内部の様相をした、キョウコの精神世界。

キ口のベヒーモスすら遠く及ばない程の体軀を有するそれは、どこか悲しそうな目で、床に張り付くように倒れたモノを見ていた。

「う……！！……！！くう……っ」

引き裂かれ、焼け焦げ、それでも尚立ち上がるうとするそれは、いや、それが、キョウコ・フレアライズだった。

「何故お前は、そんなにも脆く弱いのだ……」

「……！！……！！」

《（まともに言葉も話せないか……無理も無い。あれだけズタズタにされた上、この力の差だ……）

もう戦意なんか残っちゃいないだろう……）

“ヘビ”は、必死に立とうとするキョウコを、思い深げに見ながら黙考していた。

しかしヘビの予想は、ある種の心配は、杞憂に終わる。

《なっ！？》

息は荒いどころか浅く、巨大な“火竜”を見上げる目は虚ろだったが、キョウコは、立ち上がっていた。

『何故だ、何故だ。お前は何故恐れている。何を——恐れている』

立ち上がったキョウコに、サラムンダーは語りかける。

「ワタシはお前の恐怖から出来ている。しかし——何をそんなに恐れることがあるのだ、キョウコ・フレアライズ。」

お前が恐れているのは剣を振るうコトではないだろう。

お前が恐れているのは、外の世界。この閉じた教会がその証左だ。お前は贖罪を――裁かれることを望みながら、それを恐れている。

世から眼を逸らし、それで許しを請おうなどと？

ワタシという恐怖を超える？ 己が殻も破れぬ雛鳥が？』

サラマンダーはそこまで言って、前足を上げて、息を吸うように上体を上げて。

そして、

『お前には無理だ。』

このような場所に、いつまでも足を留めているようなお前にはない！』

焼け付くような言葉とともに、サラマンダーの姿が巨大な炎に変わり、

「……………！！」

《な——》

キョウコも、ヘビも、雪崩のように襲い来るそれに、飲み込まれ消えた。

Φ

Φ

「ハ、結局のところ、精霊つてのはまあ、随分とツンデレなんだな」
ロンガ・シーライドは、真っ白なセカイに立って、目の前の“それ”に向って言葉を向ける。

「それともお前だけか？ 『このセカイが何故白いか』なんて。

あからさまなヒントだしてよお……………」

『クス……………まさか、あんな一瞬で判るとはね』

「ハ、当たり前だ。このセカイを作った——望んだ——のはオレだからな。

ココは——あらゆることから眼を背けるためのセカイだ」

『クス、正……………解……………』

今やロンガの身体に一切の傷は無く。

それはつまり、ロンガがこのセカイの主導権を取り戻し、あらゆる傷から“眼を背けた”結果なのだ。

そして。

白いセカイに、今やシルフは立つてはいなかった。

ロンガの足許、横たわるシルフは袈裟に大きな傷を負ってはいたが、血を流すことは無く、その顔は安らかというよりは、嬉しそうだった。

『けれど、眼を背ければ、また新しく何かが眼に入る』

「ああ。だからオレはイミルに復讐すると決めたんだ。

母さんが死んだことから、その原因を作ったのが親父だって事実からも眼を背けてな」

例の“ウサギ”はロンガのそばに再び寄ってきていたが、流石に言葉を挟むようなことは無かった。

『それで？ その方法じゃ誰も救われない、そんな事実からも眼を背けたの？』

「ああ。そうだよ。復讐なんて、結局のところ、オレ自身のエゴだ。だけど、それしか、オレの進む道は無かったし、これからも無い」

『じゃあ、その道が終わったらどうするの？』

淡々と語るロンガに、シルフは下から、やさしく語りかける。

「ハ、そのときは、またそのとき考えるよ。だから……だからさ……」

……

ぽた、ぽた。ぽた。ぽた、ぽた。

『クス。どうしたの？』

ぽた、ぽた。ぽた。ぽた、ぽた。

横たわるシルフの胸に、小さな水の粒が落ちる。

「なんで……なんで“背けてる”って気づかせるんだよ……」

気づいたら、また……見ちまうじゃねえかよ……」

ロンガは、泣いていた。ぼろぼろと。ぼろぼろと。

「アイツがどうして憎いかなんて、忘れてたのに！ 眼を背けてたのに！」

どうして、思い出させるんだよ……どうして、風霊は母さんの姿
おまえ
でそこにいるんだよ……」

「クス。そんなの、キミ以外にわかるわけ無いだろう?」

その言葉が終わらないうちに。シルフの身体が徐々に消え始めた。
「でもね、ロンガ。眼を背けてばかりじゃ、キミは強くなかなれない。
ない。

復讐だけじゃ、誰の心も癒されない。

ま、ボクの言葉を聞いて、どうするかは、キミ次第だけだね」

「……………オレは、それでもやっぱり、イミルと戦うよ。

何をする気かは知らないが、アイツの企みは止めないといけな
気がするし。

なにより、オレの恨みはそう簡単に収まらない。

復讐だけじゃ救われないかもしれないが、復讐なしじゃ救われな
いんだ。

でもまあ、半殺し程度にして、ゆっくり話を聞いてやるのも悪く
ないな」

ロンガは、笑って言った。泣きながら、笑って言った。

「そう。ま、ボクはキミの剣だから。」

いつでも、キミが望むならどこまでも、キミの力になろうじや
ないか」

“風霊”^{シルフ}は柔らかな笑みを浮かべて、最後に母さんの声で、そう
言った。

Φ

Φ

『結局のところ、精霊というのは“精霊憑き”^{スピリウル}が生み出した架空の存在に過ぎない。故に、主人が死ねば精霊も消える』

“神器”^{スキル}だとか、そういった能力は、人間から“進化”して付加されたものに過ぎん。と、“暴食獣”^{ベヒーモス}は言う。

『だから、主人の力になるのは当然なのだが、それを、人格としては判っていても——』

キロは、ベヒーモスに最後まで言わせはしなかった。

手を振って相手の言葉を制したのである。

「言わなくても判ってんよ。“精霊”は、人格の成立する以前に、感情の塊なんだろう？ 恐らくはマイナスの、いわばブレイキになるような」

キロは、案外近くに胡坐を掻いていた“クマ”に確認するように視線を向けた。

クマのほうはと言えば、僅かばかりに頷いてからそれっきり言葉を発さなかった。

『わかって——いたのか』

「まあ、戦っているうちになくな。それにこのセカイのことも。」

要は、このセカイは精霊を相手に、心が負ければ負けるほど、主導権を握られていくんだろ？

さつき、オレの足許が茨になんかなってたのは、焦りを感じて、お前に心が負けていた——少なくとも負けかけていたからだ」

『では、お前に主導権がある間、お前に都合の良いように地形が出来上がっていたのを、わかっていたのか？』

「いや、気づいたのは今さつき、お前と撃ち合う場面になってからだ」

手のひらを天に向けるような動作で、キロは言う。

今や巨体を横たえる、ベヒーモスに向って。

ベヒーモスはゆっくりと目を閉じ、

『そうか』

と一言。

そして目を開き、

『では問おう、主よ。』

このセカイの意味は——お主の心の芯は——なんだ？』

その質問に、キロも一度目を閉じて。

そして開き、言った。

「決まっている。どんな事しても、何を捻じ曲げても、目的を果たす——

あいつと一緒にいる。その覚悟だ」

なんて、そんなオレの台詞を聞いてベヒーモスは、鼻で笑うように息を漏らし、そして消えた。

それはどこか、満足そうに見えた。

Φ

Φ

《あーあ……こりや終わったかな……》

轟々と、竜巻の様相を呈す炎を、“ヘビ”は見上げていた。

その竜巻の中心に、キョウコはいる。

自らの精霊に敗れた“精霊憑き”^{スピリウル}に待っているのは、精神の崩壊。

即ち——死。

^{サラマンダー}

《あの“火竜”……手加減も火加減も、する気はなさそうだったしな……》

広大、とはいえ、限りある教会のスペースの中、徐々に広がる炎の竜巻。

それでも”ヘビ”は微動だにしない。

造られた存在ゆえに、わかっている。

自分の役割。存在意義。意味、というものを。

《……………っ！！？》

唐突だった。前触れは何もなかった。

今までじりじりと半径を増していた——それだけだった炎の竜巻が、今までの何倍もの轟音を放ち、今度は上に、伸びた。

まるで抑えつけられ続けていたバネが、一気に力を解放するよう
に。

天井を破壊してもなお、天へと伸び続ける竜巻。

それに比例して縮まっていく半径。

《あ、——確か——》

この教会は、キヨウコの“外への恐れ”が生みだしたいわば心の
壁。

「うあ、あ。ああ、ああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
！！！！」

先ずは叫び声。次に細くなっていく紅い竜巻に浮かぶ黒い影。

ヘビがそれをキヨウコだと認識した、数瞬の後、炎の竜巻は、音
を立ててはじけ、消えた。

その内から現れたのは——

「……………ふう……………」

はらはらと、雪のように降りかかる火の粉を、右手に持つ、巨大
な炎で薙ぎ払い、キヨウコはため息を吐いた。

フレード・オフ・サラマンダー

【火竜の大剣】、ではない。

純然たる炎。剣の形を保った、高密度の炎だった。

その存在感は、キヨウコの“神器”^{スキル}であつたそれを遙かに超え、

見たものの心にすら焼き付く程。

そしてキヨウコは、それを持ったまま、教会の天井に開いた穴を
見る。

そうして再び右手に視線を戻すと、

「ふ」

と、息を漏らして笑った。

「いいわ。やったげる」

左手を添えた、“炎”を振りかざすと、

「はあああああああああああ！……！」

自らを包む、教会の壁（じゅうぶ）に向かって、それを振るった。

……ありがとう、サラマンダー火竜。

おかげでもう少し、つよくなれそう前に進めそうよ。

Φ

Φ

「さて。もうそろそろ時間だね……」

グレインは懷中時計を見ながら言う。

「準備はいいかい、三人とも」

「うん。バッチリだよ！」

明るい調子でアイアが言う。

「まー、バッチリであろうがなかるうが、やるしかないんだろっけ
だよ……」

本当にこれだけで強くなってるのか？」

リックスの不安ももつともな話である。

夜も明ける頃合、三人がやっていたことと言えば、ひたすらに古代文字の解読作業。それもリックスの成果はほかの二人には遠く及ばない。

「はっはっは！ まあ、この修行は、その人の素質を引き出す修行

だからね。

上がり幅に差はあるだろうが——きつと驚くさ」

「あとは、お姉ちゃんたちが目覚めるのを待つだけです」

メイコがアイアの顔を見て言う。

アイアよりも背の低いメイコ。自然、見上げるような形になる。

「——うん。そうだね」

キアラを思い出たのか、アイアの表情には改めて決意と覚悟が浮かぶ。

「——さて、一番乗りに精神^{なか}から出てくるのは誰かな？」
そういったグレインの顔は、少し楽しそうだった。

第十二閃——END——

第十四閃『帰還と出発』

「念のため言っておくけれど、この修行は成果に個人差が大きく出る。

まあ、そこはどんな修行でもそんなものかもしれないけれど、特にこれは素質の方に働きかけるタイプだからね——」

グレインは、言葉通りに念を押すようにして、アイア、リックス、メイコの三人に言う。

「大丈夫よお父さん。ここにいる三人に素質が無いように見える？」
アイアの顔には、不敵な笑みが。

「はっはっは！ 頼もしい限りだ」

そう言ってグレインは笑うが、それと対照的に、リックスはその口を真一文字に結んでいた。

「（言ってくれるぜアイア姉え……僕には正直、あんな修行で強くなれたとは——）」

「ふふ、大丈夫ですよ、リックスさん」

「……メイコ？」

愉しそうに、メイコは笑っていた。

怪訝に思ったリックスが、その顔をまじまじと見つめるが、「ふふ」と吐息を漏らすように笑うだけで、メイコはもう何も言わなかった。

“励まされているのだ” そう判ったとき、リックスもまた浅い吐息を吐いた。

その時だった。

「うつつがあああああっ——！！」

「「——！！？」」

「おや」

「えっ……何!？」

吼えるような声を聞き、うろたえる三人とは対称的に、グレインは落ち着き払っていた。

「流石は“「称号」持ち”、と言ったところかな。

キロ君。君が一番乗りだ」

「聞いて……ないぞ、グレイン……」

声を絞り出すキロ。随分と疲弊しているように見える。

「なんで、メインのバトルより、帰ってくる方が大変なんだ畜生!」
「!」

グレインに詰め寄るキロ。

「はっはっは! それはかなり個人差あるらしいからね」

「うっわ、キロ半泣き?」

「……ヒトの苦勞も知らないで引くなよアイア……」

チャキツ

「——っと?」

キロの目の前に向けられたのは長剣の切先。
当然、リックスの魔導具である。

「氣安くアイア姉えを呼ぶな(^^)」

「ちよっ!？ ……そっいゃそんな設定もあつたな……」
アイア限定シスコン設定。

早くも忘れ去られかけている設定である。

「……それ以前に顔文字は反則じゃ……?」

アイアの方をちらりと見ながら、メイコは言った。

「はは……横書きでよかったわね……」

Φ

Φ

「く、あぁっ……っ」

キヨウコがキロとは対称的に、緩やかな欠伸と共に、背筋をのばして起き上ったのは、それから20分ほど後。

ロンガが重そうに頭を振って、這い出るように起きてきたのは、そのさらに五分ほど後だった。

「おはよ、ロンガ」

「おう……おはよう」

アイアの言葉に軽く応え、キロやキヨウコたちを見やる。

「なんだ、遅かったなロンガ」

「まったく、待ちくたびれたわ」

「いや、お姉ちゃんが起きたのもついさっきだからね？」

ロンガ以外の五人は、ロビーの石の床に敷いた毛布の上に座り、茶を啜っていた。まるでピクニックのようである。

「ハ、いいのかよ、そんなことしてて」

そう言いつつも、皆の輪の中へ入っていくロンガ。

「はっは！ まあ、できることはしたし、あまり根を詰めてもいいことはないからね」

とは、紅茶のカップを掲げながらのグレインの台詞。

「少しは休息も必要、というわけだ」

キロもグレインと口をそろえた。

「ふーん……まあ、それもそうか……でも、あまりゆっくりはしてられないんじゃないか？」

その台詞は、アイアがカップに注いだ紅茶を受け取りながら。

「確かに、キアラも心配だしね……」

そう言つと、アイアは遠くでも見つめるように眼を細めた。

「ああ……」

——落ち着いてるな……もうちょっと慌ててもいいと思うんだが。

アイアの顔を見てそんな風にロンガが思っていた時、
「結構なだめるのに時間かかったんですよ」

と、メイコが耳打ちするように言った。

「ハ、そうなの？」

「ええ、もう一人で屋敷飛び出すぐらいの勢いでしたから」

「……………」

「私とリックスさんで、ほぼ押さえつけるようにして止めましたけど」

「ふーん……ぶふっ！！ くふふっ　くく、ぐがはっ！　ごほッ」
ほ……………」

急に咽て、紅茶を嘔き出すロンガ。

「ロンガさん……………！？」

「く……………くく……………フハハハ！　ダメだ、面白すぎる、その図……………！！」

くく……………あはははははは！！！！」

腹を抱えて、転げ回るように笑うロンガ。

「流石に笑いすぎですよ……………」

メイコは呆れたように眼を細めた。

「なにがそんなに面白いのよ？」

「当のアイアが不思議そうに。」

「なにがってお前、くく……………メイコとリックスに押さえつけられて必死のもがくお前の様がだよ」

「……………なんか、ム力つくんですけど……………」

「はっはっは！」

「まだ笑うか！」

「いや、今のは、あっちだ」

そういつてロンガが指差したのは、アイアの父、グレイン。

「はっはっは！　さて、ロンガ君」

「ん？」

「そろそろ動けるかい？」

「ハ、動けるも何も」

ズツ、と、カップに残った紅茶を飲みほして、

「オレら、ずっと寝てたんだぜ？　寧ろ今すぐ暴れ回りたいぐらい

だ」

鋭い笑みをその顔に浮かべて言った。

グレインはその言葉には笑みを返すに留まり、視線を横へ動かす。「同じく。いい加減走り出したい衝動を抑えるのも限界だ」

その先にいたキロはそう言って立ち上がった。

「あら奇遇ね、私もそんなところよ」

キョウコのその台詞は、クスクスという笑い声に紛れて。

「はっはっは！ これは随分と頼もしそうだ」

グレインもひとしきり笑うと、「さて」と、キロと同じように立ち上がった。

しかしそこで、何かを思い出したのか思案顔をして、やがて

「ちよつとみんな、待っててくれるかな」

そういつて一度奥の部屋へ引っ込んだ。

そうして、またロビーに戻ってきた時、グレインの手には、白く、

花のような装飾の刻まれた杖が握られていた。

「お父さん、それ……」

アイアが、引き寄せられるように立ち上がった。

「うん。アイア、君のお母さんの使っていた杖だ。

ずっと仕舞っておいたんだけど、キアラを救うためだし、これは君に使ってもらおう」

「お母さんの……杖……」

うん！ 私、頑張るよ、お父さん！」

アイアの言葉を聞いたグレインは、ただ、微笑んでいた。

Φ

Φ

「もう一度だけ聞こう。準備はいいね？」

グレインの言葉に、他の六人全てが神妙な面持ちで頷いた。

それに返すように頷いて、グレインはロビーから正門へ続く扉の
ノブに手をかける――

「――！　　さて、グレイン！！！！」

ロンガがそれに気づき、グレインの動きを制止する――が、それ
はいささか遅く。

槍のような稲光がドアを突き破り、グレインの左腕を掠め、後ろ
に飛び退いたキョウコの足元に堕ちた。

「な、なんだ！？」

状況を飲み込めないまでも、明らかな敵意に、リックスは腰の長
剣を抜く。

「ち……どうやら先手を打たれていたみたいだな……」

キコが憎々しげに呟く。

破壊されたドアからロビーへ足を踏み入れる、招かれざる客。

「かつか！　　やっと出てきた出てきたあ！」

「全く。出てくるまで待つてろ、なんて、イミルさんも慎重すぎる」

「何であろうと。神に仇為すものを。裁く。のみ」

恰好は様々だが、放つ雰囲気、匂いは傭兵のもの。即ち、明らかに
『七罪星』の手のものが20人ほど。

そしてそれとほぼ同数の、黒いレザーのコートで統一され、マス
クで顔を覆った集団。神の名のもとに、異能を以って異能を消す、

“断罪者”達だ。

「ど、どうして傭兵集団の『七罪星』と教会勢力の“断罪者”がい
つしよにいるの！？」

アイアが喚くように言う。

「ハ、傭兵にまで助けを請うようになったか、教会の黒い狗ども」

ロンガの吐き捨てるような言葉に、最も前にいた“断罪者”の一
人が弾かれるように前に一步を踏み出して言った。

「違うぞ、その白髪……」

マスクのせいかくぐもってはいたが、その声には聞いたものをそ
の場に貼り付けるような、そんな重さがあった。

「我らは利害の一致により、“一時的”に手を組んだに過ぎん……危険因子、ティレイ・シルストームとそれに加担するものを始末するためにな……」

「やっぱ姉えちゃん繋がりが……」

そういったとき、アイアは苦虫を潰したような顔をしていた。

「ハ、どうやら、そのティレイが『七罪星』側なのは知らないみたいだな」

相手側には聞こえないように、ロンガがアイアに耳打ちする。

二人の“断罪者”を自分たちの前で倒して見せたのも、今となつては、この状況を作り出すための伏線だったのかと思えてしまう。

少なくともここに“断罪者”が数をそろえてやってくるのに十分な理由になるだろう。

「かつか！ まあ、そういうことで！

裏切り者キ口を含め、全員大人しく死んでくれや！」

傭兵の男が一人、指輪をした手を頭上に挙げる。

『オオオオオオオオオオオオ！！！！！！』

それを合図に、ずらりと現れる、精霊の宿る種種様々な武器。

光を放つ、杖や本やよくわからない魔導具たち。

「ふん、仕方ない。喰らい尽くしてやるから、覚悟しろよゴミども

！」

「丁度いいわ。あなたたちで試し切りならぬ試し焼きをしてあげる

！」

凶悪な笑みを浮かべて腕を振り上げるキョウコと、構えをとるキ

口。

それに応ずるように、“断罪者”の一人が大きく杖を振り上げ、

呪文を詠唱する――

「レザンド雷属性：巨大（レオ）――飛……ぐぎやあああああああああ
あっ！」

――が、それは彼自身の絶叫でかき消された。

「――！！！！？」

「な、なんだあ——！？」

驚きの声は、両陣から。

そこにいる誰一人として、その攻撃を捉えた者はおらず、誰一人としてその光景を理解できたものはいなかった。

それ程に、速く、鋭く、そして巨大だったのだ。

“断罪者”を引き裂いた氷柱の群れは。

「氷属性——エイク——レオ・クリス・ネイル電爪巨刃——……

ふむ。やはり解放なしでは、40%も威力が出ないな」

そう涼しく言つてのけたのは、グレインだった。

「ハ——（40%！？ 人間一人をズタズタにするのがか！？）」

「ロンガですら、苦笑いを浮かべ動きを止める中、逸早く我に返つたのは、『七罪星』の中の一人だった。

「ひ、怯むな！ この数の差だ！ 恐れることは何もないッ！」

その声に、まるで凍りついてた川に亀裂が入り、流動を始めるように、固まっていた軍勢から雄叫びが上がり始めた。

「ふむ、これはまずいね……ロンガ君にアイア、それにみんな、ここは僕に任せて先に行つてくれないかい？ 裏門からなら出られる筈だ」

「お父さん？」

「この人数——かずそれに、あえて僕たちが屋敷を出ようとするまで待つていたこと——十中八九、時間稼ぎの為の刺客だ……」

視線は相手に向けたまま、何時になく重い調子でグレインは言う。

「つまり、時間を稼がなければならぬ理由が、向こうにはある——」

「……キアラが危ないかもしれない、つてこと？」

アイアの目が見開かれる。

キロも大きく舌打ちをした。

「グラムも——」

「急ぐんだ。下手をすると、“時間切れ”も有り得る！」

「でも、お父さん一人で……」

『逃がすかよおおお！！！！』

傭兵と“断罪者”の群れの中から、六人が一気に飛びかかってくる。

その手には、“神器”^{スキル}と思わしき武器が。

「氷属性：電爪連刃」<sup>エイク
ガトル・クリス・ネイル</sup>！！！！」

氷の刃の六連射。

六人の“精霊憑き”^{スピリウル}を全て討ち落としたのは、リックスだった。

「おお！ ホントに威力上がってやがる！」

「リックス……」

「と、いうわけで、アイア姉え！ 僕もここに残る！ 二人いれば、まあ、なんとかなるでしょ」

そこまで言うと、ふい、とリックスはアイアに背を向けた。

「だから……キアラを————よろしく頼む」

「——！！ うん！」

アイアは力強く、頷いたのだった。

「早く、行きましょう！」

メイコの声に、ロンガ達は移動を始める。

が、ロンガ一人、途中で立ち止まった。

「ロンガさん！？」

「ハ、心配しなくても行くさ。でも、その前に——」

そう言って、ロンガはおもむろに屈むと、

「『白髪』^{しろが}つつたる、このマスク野郎！！！！」

立ち上がると同時に。

初めにロンガと言葉を交わした“断罪者”に向かい、拾ったティークップを投げつけた。

「ぶがつ！」

目を見張るほどの剛速球。

カップは碎け散り、“断罪者”は昏倒する。

それを突き刺すように指差して、

「銀髪と言え、馬鹿野郎！」
そうとだけ叫ぶと、皆を追いかけるように駆け出した。

Φ

Φ

ロンガ達の去ったロビーの中、グレインとリックスは、圧倒的多数と睨みあっていた。

所詮は二人。この人数で押しきれない筈がない。と、その場にいる誰もが——グレインとリックスでさえもが——そう思っていた。

しかし“大軍”は、状況は、動こうとしない。
どうということはない。

たった二人——にも関わらず、グレインの立ち居振る舞いがあまりに余裕を見せていたからだ。

「ほら、誰でもいいし一斉でもいい。早くかかってきなよ。」

それとも、尻尾を巻いて逃げるかい？」

たかが“魔法使い”二人に？ と、その顔には不敵な笑み。
ウィザード

一撃で“断罪者”一人を倒して見せた光景と相まって、
イメージ

「くっ……」

ロビーの中の誰かが、そんな風に悔しそうな声を漏らした。

もともと、“大軍”の——というよりは『七罪星』の目的としては、ロンガ達を逃がしてしまった時点で完全な達成は絶望的で、そうなれば、戦力として小さくはないグレインとリックスをこの場により長く留めておくべきと、この場にいる“七罪星”の何人か、特に頭の役割を担う者たちはそう考えた。

しかし——

「ふざけるな、凍血の魔法使い！ 神の加護のもとにある我らに恐れはないぞお！」

“圧倒的に勝っているのに攻めあぐねている”、そんな状況に、

いつまでも耐えられる筈もなく、また“断罪者”には、時間稼ぎに付き合う理由も無かった。

『『おおおおおおお！』』

先陣を切った大柄の“断罪者”。それを切っ掛けにして、傭兵も聖職者も一緒になって、雄叫びを上げる。

「はっはっは！ その呼び名、どうやらまだまだ廃れてないみたいだねえ。」

まるで現役の頃に戻ったようだよ――

さあ！ 覚悟はいいかい、リックス！

「ああ。僕はあんたの息子だからな。あんたからもらったこの剣にかけて――こんな雑兵に後れは取らないさ！」

リックスは剣を振るい、グレインはその右目へ手を伸ばし――
高らかに呪文を響かせて、戦いの火蓋を切った。

Φ

Φ

時は少し戻り。

「グレイン、大丈夫だよな？」

廊下を走りながら、ロンガは言った。

「まあ、リックスってあのガキがついてりゃ大丈夫だと思うが……」
ロンガの少し前に行くキロが振り向きもせずに応える。

「随分とハツタリが巧いのねあの人」

そのすぐ横でキョウコが本当に感心したように言う。

「ああ……聞けばあいつ、空間移動の古代魔法まで使ったらしいじゃないか……そこに“精霊憑き”^{オレたち}の精神に干渉する魔法……」

「どう考えても、あの人数相手に戦える状態じゃ……ないよね……」
キロの考察に、アイアはその口で結論を出した。

「ハ、まあ、それを分かってるからこそ、リックスも残ったんだろ

うさ」

吐き捨てるようにそう言うとロンガはスピードを上げ、皆の先に進むと、その先にあつた扉を、勢いよく蹴り開けた。

派手な音を立てて開く両開きの扉。

朝焼けの光が、外へ躍り出た五人へ降り注ぐ。

「ちよつとお！ 乱暴すぎよロンガ！！ 誰の家だと思つてんの！？」

「ハハハ、悪い悪い——まあ、ほら、ココは啖呵切つとかないと」

「はあ？ 啖呵？ 何言つて——」

アイアの言葉は、そこで凍りつく。

「ちつ……まあ、そら、正門だけで終わらせないよなあ……」
苦々しげにキロが言つと、それに応えるようにロンガが、

「ハ、さながら逃げた魚を捉える網、か」

と、前方を睨みながら。

そこには五人の“断罪者”と三人ほどの傭兵らしき人物が。斧を構える者もいれば、杖を握りしめる者もいる。

それでも素手で直立する者も四人ほど。

「ほほう……まさか五人も逃げてくるとはな。

少々計算外だが——丁度いい、その白髪！」

素手の“断罪者”がロンガを指差して叫ぶ。

「先日の続きをしようじゃないか」

「ああ？ 先日っていつだ——つてか、白髪しろがみつて言うなクソボケ！」

「おつとそうか、このマスクでは分からないよな——」

軽い失敗をしたときのように、額に手を当てる“断罪者”。

「じゃ、これを見れば分かるかな」

そういつておもむろに右手を天に掲げる。

「——“神器”——！！——」

他に二人の“断罪者”、一人の傭兵が、同時に叫ぶ。

「——【毒鳥の長槍】ア——！！——」

サーベル・オブ・マッドスラッグ

「【大蛞蝓の曲刀】ッ！！！」

グローブ・オブ・レイス

「【冷霊の手袋】！」

サイズ・オブ・オルトロス

「【双頭狗の大鎌】——！！！！」

光と共に現れる、紫色をした槍、滑りのある大きく反った刀、冷気を放つ手袋、刃が二つある大鎌。

「誰かと思つたら……姉ちゃんにやられた雑魚じゃん！」

「ざっ……誰が雑魚だとこのポニーテールうウー！！！」

槍を持った“断罪者”がアイアに向かって激昂する。

「あれは、あの女の格が違いすぎるだけだろうが！」

ええい！ どの道そのつもりだが、誰一人生きて帰さん！ やっ

ちまええ！！！！」

強烈に悪意を、殺意を放ち向かってくる敵を、ひどく落ち着いた目でアイアは見ていた。

ひよつとしたらその眼には、軽蔑の色も混ざっていたかもしれない。

い。

アクセル

「魔力解放——オン——」

元は母親のものだという白い杖を水平に構え、呟く。

スピリチュ

敵は、四人の“精霊憑き”に加え、人間であっても、相応の実力

ウィザード

者であろう戦士や“魔法使い”たちがさらに四人。

フリザ

チェイン

ブランブル

「氷よ、縛れ 茨——！！」

その四人がすべて、細く鋭い氷の茨に、全身を絡めとられた。

「な、何い！？」

槍の“断罪者”が叫ぶ。

網のようなそれは、実際に網のように細いにもかかわらず、大の

大人がいくらかもがいても、全く碎ける気配がなかった。

「こ、この人数を一度に……」

感嘆の声を漏らしたのはロンガ。

「な、く、は、はなせえええ！！！」

傭兵の男が叫ぶが、その声はむなしく響くだけだった。

「もう、アイアさん、全部もってっちゃ嫌ですよー」

男たちの声とは対称的に、やわらかな声で言うメイコ。

その顔は、満面の笑みで包まれていた。

「魔力解放オン——」
アクセル

大きめの十字架を懐から取り出し、呪文の詠唱に入る。

「火よ。フエリその腕を以って打倒せよ。桜、火の粉は塵となり、怪しきは全て灰となる。——呑み込め、“灼熱庭園”バーンガーデン！！！」

次の瞬間。

大地に裂け目を開くが如く、地面から湧き出た炎が、氷に捕らわれていた八人を飲み込んだ。

——息を呑む暇すらなく。

『ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああつ！！』

断末魔だろうか。

絶叫が消えて、炎も消えて、息があるかとはともかく動かない八つのヒトガタが地面に墮ちる。

時間にして3秒間。

ロンガとキロは全く動けずにいた。

「なあ、ロンガ……」

「なんだ？ キロ……」

「もしかして、オレら、追いつかされてないか？」

「ハ、追いつかれるも何も、元から勝ってたかも怪しいぜコレ」

と、苦笑いを浮かべる“精霊憑き”スピリチュアル二人を尻目に、

「メイコちゃん！ ひどいよ、一人だけそんな派手なの使って！

なんか私が地味みたいじゃないの！」

「いーじゃないですか！ 私なんて、台詞も出番も全然ないんですから！」

……といっても、修行の成果なのか、予想を遥かに超えた威力が出ちゃいましたけど」

“魔法使い”ウィザード二人は、騒ぎながら睨み合っていた。

「おい、誰か止めてやれーきょうこー
って、あれ、キョウコは……？」

ロンガがあたりを見回すと、キョウコは何故か少し離れた場所で、
腕組みをしていた。

「どうやらメイコを見ているようだ。」

「ハ……ダメだ。『流石私の妹！ 誇らしい！』って眼をしてやが
る……」

「ほらお前ら、そろそろ行くぞ！ 時間ないんだろ」

キロが急かしながら、先陣を切って裏門を開けた。

ロンガとキョウコがそのあとに続く。

睨み合っていたアイアとメイコも、はっとしたあと、慌てた様子
で皆を追いかけた。

「『七罪星』のアジトまでは、オレが案内する。そのあとは存分に
暴れてくれ」

キロはそう言って、先導を買って出た。

朝霧の中、人影のない道を五人は走っていく。

「ん、なあ、キロ。あれは……」

それを視界におさめたロンガは、少し前に行くキロに声をかけた。

「ああ。オレの相棒のご登場だ」

相棒。 “猫刀^{マオトウ}ムラマサ”。

人がいないのをいいことに、往来のど真ん中にちょこんと座って
いる。

「……猫？」

ムラマサを知らないキョウコは訝しげな顔をする。

「ま、ただの猫じゃないかな。よう、ムラマサ！」

「久しぶりジャの、キロ」

「はっ！ 久しぶりってほどでもないだろうに」

言いながら、キロが少しかがむと、ムラマサはキロの身体を駆け
て、器用にも肩に登る。

「しゃ、しゃべった……」

メイコが信じられないとでもいうように、口を押さえながら言った。

「へえ、よく見ると普通の猫じゃないのね。怪物？」モンスター

キロの肩に乗ったムラマサの頭を人差し指でなでながら、キヨウコが。

「まあ、そんなところだ。ムラマサ、奴らの様子はどうだ？」

「どうもこうも、“「称号」持ち”はお前を除いて、全員地下に引っ込んでしまった。これでは監視も何もあったものではないわ」

小さな羽根をもつ黒猫は、二本の尻尾を振りながら語る。

「地下に？」

「ハ、なるほど、その猫に『七罪星』の様子を探らせてたのか」

ロンガがキロの後ろからそう声を投げかけると、

「適任じゃろ？」

ムラマサは笑ったように牙をむいてそう言った。

「ハ、確かに。そりゃ適任だ」

ロンガが肩をすくめて言った後、キロは一度振り返って、

「急ごう。何をするつもりなのか掴めないままだが——」

「……間違いなく、『何か』をする気、だよな」

キロから台詞を受け継いで、アイアが言う。

その言葉に全員が頷いて、また駆け出した。

Φ

Φ

「まさか、本部の地下にこんな空間があったとは……」

黒いロングコート、黒いサングラス、黒い髪の毛。

“黒ずくめ”という形容があまりにも相応しい。

そんな男が、薄闇の中に立っていた。

「昔、地下「ミッド」にあった研究施設に手を加えたものさ……」

黒ずくめの男に負けず劣らず、黒い髪の毛をした巨漢。

「来たるべき時のために……な」

「強欲」の称号を持つイミル・ルカーソンは、祭壇のように作られた台の上に立ち、ソレを見上げていた。

ソレは、赤い月が木に巻きつかれ捕らわれたような形をした、不気味な印象を与えるオブジェだった。

「一体それは……なんなんでしょう？」

イミルの背中を眺めるような位置に立っていた黒ずくめの男、「怠惰」のシャドウーラは、そんな風に言葉を投げた。

「フ、俺の「強欲」を満たすための、重要なパーツ……と言ったところか。」

シャドウーラ、お前なら、これが『どういうもの』かは解らずとも、『何のためのものか』ぐらいは分る筈だろ？」

首を動かし、シャドウーラに見せた横顔には、意地の悪そうな笑みが張り付いていた。

「……“理想”を具現するための——ですか……」

哀愁の漂う過去を思い出すかのように——もしかしたら本当に思い出していたのかもしれない——シャドウーラは言った。

「フ、わかっているのなら、そろそろ行け。他の者にも配置につくように伝える」

ここでやっと。イミルは後ろを振り返った。

「——戦争が始まるぞ！」

第十五閃『侵入と十字路』

「ここが……ギルド『七罪星』本部……」

目の前に建つ古びた洋館を見上げてロンガは息を呑んだ。

見た目は何の変哲もない洋館である。が、ロンガは、おそらく、戦いへ出向き、また戦いから帰ってきた者たちが入れ替わり立ち替わりするうちに染み付いたのだろう、戦いの匂いを感じ取っていた。そして同時に、何人分かの、殺しきれない気配も。

「ハ、中でお待ちかね、つてわけだ」

「おそらく、直ぐ中にいるのは下っ端ジャろう。」

幹部……「称号」持ち”の面々は地下ジャ

キロの肩の上、漆黒の尻尾を振りながら、ムラマサは言った。

「……さっきから気になっていたんだが、このアジトに地下なんてあったか？」

顔の横のムラマサに向かい、キロが問いを投げる。

「……なんであんたは知らないのよ？」

と、アイア。

「そう言われてもしらねえものはしらねえよ。そもそもオレは、そんなに『七罪星』とも仲良くはなかったしな」

「しかしそれでも、お主が知らんとなると、やはり“「称号」持ち”でも一部しか知らなかった用じゃノ」

「ああ、多分その確率の方が高い」

「ハ、いつまでくつちゃべってるつもりだ？」

細かいことは後でいいだろ？」

会話を続けるキロとムラマサに、ロンガは痺れを切らしたように言う。

キョウコもそれに同意するようなことを言い、続けて、

「それで、どうするの？ その辺の雑魚に負ける気はしないけれど、待ち構えてる中、馬鹿みたいに入っていくのは、少し気が進まないわ」

言って、頑丈そうなその洋館の扉を見やる。

「それはもつともね……ねえ、ロンガ、どうす……ってあれ？」

アイアが横のロンガを振り向いたときには、そこに彼はおらず。

ロンガは腕をパキパキと鳴らしながら、扉に近づいていく。

「な……何をやる気？」

「ハ、精神世界での精霊との修行……恐らく魔力の量も質も随分と増しただろうが、そも、その操作性、操作可能性も相当上がった気がするんだよねー」

言うのが早いのか、ロンガは右手をゆっくりと、力を込めるように握りしめ、力を込めるように後ろに引き、力を込めるように姿勢を低くした。

「へえ、成程、面白いじゃない」

その動作だけで、ロンガが何をするつもりなのか察したらしいキョウコは、そんな風に笑って言った。

「魔力を“神器”^{スキル}のカタチで“放出する”のではなく、身体の中で、腕の中で、増幅させ集中させる……」

ロンガはさらに重心を落とす。

ここに至ればすでに、アイアやメイコ、当然キロやムラマサにもロンガの考えは察することができていた。

「魔力による肉体強化だ！ ぶっ飛びなあー！」

溜めた力を一気に解放するように、爆発させるように、ロンガはその右手をアジトのドアへ叩きつけた。

周囲の空気が一斉に弾けたかのような破壊音。

跡形もなくなるドア。さらにそのドアの付いていた壁面までもが凹み、鋭くヒビを刻んだ。

破壊の後の沈黙。

そのなかで、ミシリ、と音がしたかと思うと、ロンガの右腕の皮膚に亀裂が入り、血が吹き出た。

「ロンガ!？」

慌てて駆け寄り、ロンガの腕をとるアイア。

「ちよつと、コレ大丈夫なの？」

「ハ、大したことは無いさ。しかしやはり、身体への負担は大きい
フィードバックみたいだな、“肉体強化”……逆腕みきうてにしているとよかった……」

右手を開いたり閉じたりしながら、ロンガは言う。

「まあ、何回かやるうちに慣れてコツを掴むだろうさ」

そう言ったのはロンガではなく、後ろから近づいてきたキロだった。

「フィードバックの少ないように、初めは弱めからやるといい」

「あら、まるで自分も出来るような——それもずつと以前から出来ていたような口ぶりね」

さらに後ろからキヨウコが。

「ふん、オレを誰だと思っている。“「暴食」のキロ”だぞ。

ま、どうやっても身体に負担はかかるし、得意じゃないんで本気の時ぐらいしか使わないがな」

「（こいつ……シルストーム邸の時も本気じゃなかったってのか……!?!）」

最後にロンガが心中でつつこみをいれて。

「ここでやつと、メイコが、

「ねえ皆さん、その……中……」

と、おそろおそろといった体で、ロンガが破壊した扉の先を指差して。

「……?」

メイコを除く四人と一匹全員が、彼女の言葉に、やっと室内を見回した。

「……………」

そこにあった表情は、あるいは驚愕、あるいは苦笑い、あるいは

しかめっ面、あるいは茫然自失。

ロング達を室内で待ち伏せていたギルドの傭兵全てが、彼らの会話の間、一言も発さずに固まっていた。

それくらいに、ロングの起こした破壊が衝撃的だった——というわけではない。否、それもあるだろうが、しかし主たる原因は、招かれた招かれざる客たる五人と一匹が持ち込んだ“空気”だろう。

「ああ、そっか、いたんだっけ」

「あ、ひょっとしてバトルフラグ？ 腕が鳴るわね！」

「多分、今のお前では勝負にならんだろう。ただの雑魚だよ」

「少なくともこいつ等は、ナ」

「どうでもいいけど、少しお腹がすいたわ……」

「そう言えば、ともに朝食摂ってないね、お姉ちゃん」

こいつらには、緊張感が無い。

敵地に踏み込むという、乗り込むという、その行為に伴われるべきはずの緊張感が無いのだ。

それは最早、敵地が敵地でないことを表し——この面子に自分たちでは絶対に敵わない、と、傭兵たちが悟るのに充分だった。

「ほら、キヨウコ、その辺に食い物ぐらいいあるだろうよ」

まるで酒場か何かのようなロビー。キロが指した一角には確かに酒樽や、食料の詰まった棚が置いてあった。

食い物へ駆けていくキヨウコを横眼で見送った後、キロは沈黙したままの傭兵たちを見回した。

「わりいけど、お前らに仕事をさせる気は無いんだ。このまま奥に進ませてもらうけど、構わない？」

「は、はいいい……どうぞ、お通りくださあい……」

引きつった笑みと震える声で、傭兵の一人が言った。

「ハ、オレ的には寧ろかかって来て欲しいぐらいだがな」

「ただでさえ物騒なことやってるんだから、これ以上物騒なこと言わないのー。時間ないんだし、ほら皆行くよ！」

急かすアイアに、それぞれがさまざまな体で従った。

Φ

Φ

「こつちジャ」

キロの猫、^{ベット}ムラマサの案内で、程なくして五人は一番奥の部屋——「「称号」持ち」を纏める「強欲」のイミルが、会議を開く際にどに使用していた部屋——の壁に隠し階段を発見する。

その隠し階段を降り切ると、そこは薄暗く広大な空間だった。

「——アジトの地下にこんな場所があつたとはな……」

苦笑いの交じった声を漏らすキロ。

「それで？ あんたがこの部屋の番人、つてわけか。「色欲」のシエスカ」

キロの視線の先、薄闇の中に立っていたのは、赤く絢爛な^{ドレス}礼装に身を包んだ女だった。

「うふふ、番人、ねえ……確かに、私を倒さないと貴方達は先に進めない、という意味では正確ね」

「ハ、他に何かあるってんだ？」

後ろに引いた左手を握りしめながら、ロンガは言う。

もちろん、“^{スキル}神器”をすぐに生成できるように。

「もちろん——貴方達をココで始末するために存在する——“刺客”よ！」

言うが早いとその女、自らの胸倉を掴んだかと思うと、着ていた服を一気に破り裂いた。

「な、なあああ！？」

アイアの声が木霊する。

「ハ、とんだストリップだな」

「ちょ、ロンガは見ちゃだめえ！」

「落ち着けばか」

慌てるアイアの頭を押さえ、ロンガは女——「色欲」のシェスカの方を指さす。

「寧ろお前はあれをよく見ろ」

ロンガの指先のさらに先、そこにいるシェスカ・ヒルバリンは、赤い礼装^{ドレス}でも、もちろん裸体でもなく、黒くより煽情的ではあるが、

これもまた礼装^{ドレス}と呼べるようなモノに身を包まれて、立っていた。

「成程ひよつとして、それがあなたの“神器”^{スキル}かしら」

キョウコは言う。

「ええ、そう。これは私の身を守る鎧であり、貴方達を挫く槍よ」

「……そうだとして、私たち五人を、それで相手する気？」

——キョウコは言う。

目の前の女の危険度を測りながら——牽制するように。

「ふふふふ、甘いわね。思い知りなさい、そして跪きなさい。」

この、私の！ “能力”の前に！！

シェスカの高らかな声と共に、黒い礼装が光を放つ。

「——！」

ロンガ達の驚きは、後悔は、一瞬にして、一斉だった。

Φ

Φ

「色欲」の称号持ち、シェスカ・ヒルバリンの“神器”^{スキル}である、

【夢魔の礼装】^{ドレス・オブ・サキュバス}の能力、効果は、端的に言ってしまうと、魅了による洗脳ないし洗脳による魅了である。

その礼装^{ドレス}から放たれる魔力光が、見た者の精神に強い影響を与えるのだ。

それは、“精神攻撃”というある種回りくどい手段でありながら、至極単純強力な能力である。

一度効きさえすれば。敵を敵でなくしてしまえるのだから。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……？」

「……………」

「何も起こらない……ぞ？」

訝しむように、ロンガは他の四人の、そして相対する女の顔を見回す。

「何も起こらなかった訳では、ないですね」

「ハ——！？」

ロンガですらが、それを聞いて竦むほどの冷たい声。その声の主は、あろうことかメイコだった。

ふう。と、彼女の口から息が走る。

「相手の精神に作用して、洗脳し染脳し魅了する能力なんでしょうけど……なんだか、そうですね……すつごく腹が立ちます」

「な……ちよつ、ちよつと待って……」

青ざめた顔で狼狽するのはシエス力だ。

「まさか貴方達……効いてないの！？ 唯の一人も！？」

「かっかつか！ こりゃあ傑作だなあ、おい！ 「色欲」のシエス力さんよ！」

大笑いするキ口。

「この中の一人にでも、効いていればよかった、いや、あんたにとつてはそれで充分だったんだろうが、残念。

あんたの“能力”は、オレ達を怒らせたただけだ！」

笑っていたキ口の顔が、憤怒と蔑視のそれに、一瞬にして変わった。

キ口の台詞を横で聞いていたロンガは、ぽん、と手を打って、

「成程、いまいち何と言ったらいいかわからなかったんだが、怒り

……この気分は、感情は、最高に最低な侮辱を受けたときのそれに

近い」

ちらりと、アイアの方を見やると、

「ぶつつつ殺す！」

「怒りすぎだアイア」

指先が白くなるほど、杖を握りしめて息巻いていた。

「はあ、まどろっこしいわねえ、こんなことするくらいなら、土下座で首を差し出しにすればいいのに」

妹のメイコ同様、キョウコの声も、北風に晒された鉄のよう。

「いや、嫌……ちょっと、ちょっとまってなんでどうして！ どうして一人も効いてないの！？ いやああああ、何少しずつ距離を詰めてるのおおおおおお」

狼狽するどころか最早取り乱すシエス力。憐れだった。

「そりゃ、十人いたら二人は効かないことのある能力だけとおおお！ それって五人もいたら四人は効くってことじゃないの！？

て言うか、一人でも効けば充分だったのにいいいい！」

「最後のはオレがもう言った」

生成した“神器”^{スキル}をはめた左手を握りしめながら、キコは鋭くツッコミをいれる。

メイコは首に下げていた十字架をシエス力に向け、見下した眼で言葉を放つ。

「覚悟はよろしいでしょうか、シエス力さん？」

アイアもまた怒りに燃える眼で、怒りに凍る表情で、杖を相手に向け、

「あんたの能力が私たちに通じなかった理由、その身に教えてあげるわ」

そう言い放った。

「灯が如く風前に消えろ、「色欲」のシエス力！」

「魂ごと焼いてあげる。安心して灰になりなさい！」

ロンガ、キョウコも共に“神器”^{スキル}を生成する。

「魔力解放——オン！」

「ひ、ひいいいいいいいい！！！」

一斉に襲いかかる五人。

「ああ、そうだ、あんたの能力が効かなかった理由だったわね」

「ハ、言つてやれ、アイア！」

ロンガの声に頷くと、魔力と詠唱を込めた杖を振りおろしながら、アイアは声を張り上げた。

「本気で好きなやつにいる人間に！ そんな能力が！ 効くわけねええええんだよお！！！！！」

Φ

Φ

アジト地下の薄明るい廊下を歩きながら、アイアは眉間を押さえていた。

「（なんで私、あんなこと言っただろ……）」

本気で好きなやつにいる人間に！ そんな能力が！ 効くわけねええええんだよお！！！！！」

「（あの時は勢いに任せて言っちゃったけど、そもそも私の好きな人って……）」

額にあてた指の間から、前に行く銀髪の少年を覗いてみる。

「（こいつも好きな人……いるのかなあ……）」

そんな風にアイアが考えていると、

「ハ、しっかし不愉快だな……」

前から悪態が飛んできた。

「へー！？ あ、いや、え、何が？」

あまりに唐突で、うろたえてしまう。

「はあ、何が何も何から何までだよ」

ロンガは、苛立たしさを多分に混ぜた言葉を吐き捨てた。

「わかってて乗り込んだとはいえ、何から何までやつらの思い通り見たいじゃねえか、これじゃ……」

そう言っただけで、ロンガは、アイアの方を、そしてそのさらに後ろを振り返った。

「確かに……未だに何を企んでるのか判らない不気味さもあるしね……」

ロンガにつられて、背後の薄闇に眼をやりながら、アイアは呟いた。

長い廊下。三分の二ほどは進んできただろうか？

そこに、キロやフレアライズ姉妹の姿はない。

壁や天井、床の材質は黒く艶を放っているが、いまいち何なのかわからない。

石のようにも思えるが、触った感触はそれとは少し違う感じがした。

「……他のみんなは大丈夫かな？」

どこか気味の悪さを感じたアイアは、足を速め、ロンガの顔を後ろから覗き込むようにして言った。

「ハ、まー、キョウコとメイコは、多分大丈夫だろ。サラマンダー“火竜”なのは、ある意味キョウコだけじゃなかったしな……」

「だよね……あの二人、本当に恐ろしいよ……」

ロンガとアイアは、二人して苦笑い。

「あと、キロはキロで、あの能力だからな……　　よっぽど相性の悪いやつと当たらない限り大丈夫だろ」

そう言っただけで、ロンガは歩みをとめた。

「さて。ステージ2（ツー）、真ん中ルート、ご到着……ってな」

壁や天井と同じく黒い、しかし華麗な装飾の施された、重そうな扉。

それを前にして、アイアはゴクリと息を呑む。

この先にはまた、行く手を阻む“刺客”が、爪を研いで待っているのだ。

「いくよ、ロンガ」

「ハ！ それはオレの台詞だ、盗るんじゃねえよ！」

ロンガとアイアは、共に、同時に、扉へと手をかけた。

Φ

Φ

「分かれ道い！？」

——数分前。

ロンガは頓狂な声を上げた。

「うん……なんか、ここ十字路になってるみたい」

アイアが路の先を指差して言う。

見れば、なるほど壁は途中で途切れ、そこから路は十字に枝を広げている。

覗いてみると、曲がった後はしばらく行くとまた曲がり角に突き当たり、直進した場合と同じ方向に路は続いているようだ。

「どうしましょう……」

不安げにメイコがロンガを振りむく。

「どうしよう……つつてもなあ……」

これは慎重に選ばねばならない。

仮に三つの路のどれか一つしか先へ通じていないのだとすれば、間違った路を選んでしまうことは、時間の無駄では済まないような結果を招くかもしれないからだ。

ロンガが横目で見やると、キョウコは片眉を吊り上げて、その量の多い髪をボサボサと掻き回していた。

そうして一つ溜息をつくと、

「アイアちゃんの家をやつてきた例の大群からして、敵は時間を欲してることは間違いないんでしょ？　だったら、迷つてる時間なんか万分の一秒もないんじゃないの？」

「いや、確かにそうだが——」

ロンガがさらに続けようとしたところで、

「なあに、迷う必要なんか万分の一ミリもありやしないさ」

後ろからキロが制した。

手には——先のシエス力戦で蓄積した魔力を保持しておくつもりだろう——グロブ・オブ・ベヒーモス【暴食獣の手袋】をつけたままだ。

「この先のどれが通じていようと、どれもが通じていようと、一つを選べないなら全部選んでやればいい」

「ぜんぶ……ですか？」

眼を丸くするメイコ。

その瞳孔にキロの顔が映る。

「せっかく五人と一匹もおるのじゃからナ。路が三つならば三手に分かれて進めばよいではない力」

キロではなく、その肩に鎮座する黒猫、ムラマサの声。

まるで品定めでもするかのように、キロ以外の四人の顔を舐めるように見回していく。

「でもそれは……」

唾液を呑み込みながらの、アイアの言葉が零れる。

「ああ。仮に“正解”が一つで、そこに敵戦力が集結していたりすれば、唯でさえ強敵たる“七罪 星”を多勢に無勢で相手取ることになる。だが少なくとも、全員で時間を無駄にすることは避けられる」

飄々と、軽い口調でキロは言う。

「はつきり言っておくが、さっきの「色欲」みたいなラッキーはもうないぜ。」

「怠惰」のシャドウーラ、「嫉妬」のライニー、「傲慢」のビリー、そして「強欲」のイミル……元同胞のオレですら能力を知らな

い・判らない奴らばかりだが……」

「間違いない強者ツラモノぞろいジャ」

「さあ、どうする？ お前らが決めてくれ。もちろん、手分けするとなったら、オレは一人でいいぞ。ムラマサがいるからな」

沈黙する一同。

固まった空気の中かで、ロンガとキョウコはゆつくりとその視線を動かしていく。それが互いにぶつかり合った瞬間、

ダン！

「はひ！？」

地を踏む音に、アイアは肩を竦ませる。

弾かれるように互いに背を向けたロンガとキョウコ。

「ハ、行くぜ、アイア。何人来ようが構わねえ、オレが全部真つ二つにしてやらあ！」

そう言うところでは真ん中、直進の路をずんずんと進んでいく。

「え、ちよつと待ってよつ、」

アイアはロンガを数歩追うと、キロやキョウコ、メイコを振り返り、

「つじ、じゃ、行つてきます！ みんな頑張つてね！」

眉をひそめて笑うと、数度手を振って、前に向き直り、ロンガを追って走っていった。

「……元気ね、あの子」

ポツリ、とキョウコの口から言の葉が舞う。

「妹は攫われ、姉は敵に廻り……一番辛いはずなんだがな」

キロは眼を細めて、キョウコの言に応えた。

「……………」

「ん？ なんだメイコ、オレのイケメンな顔になにかつ、ぶつ」

肩の上の、即ち顔のすぐ横のムラマサからの猫パンチ。

が、メイコの顔から真剣さを感じたのか、一匹は男の肩から跳び

下りた。

キロは訝しみつつ、メイコが口を開くのを待った。

「……キロさんは、辛くないんです？」

だからメイコは、一つ息を吸うと、先刻から腹にとぐるを巻いていた思いを、吐き出してみることにしたのだ。

「キロさんも、アイアさんと同じぐらいには、辛い思いをしてるんじゃないんですか？」

メイコの背は、キロに比べて遥かに低い。

自然、キロはメイコに上目づかいで見上げられる格好になる。

「大事な人を捕らわれて、拳句かつての仲間と戦うことになってい——辛くないわけ、ないですよね」

「メイコ、そんなの、肉親……それも他ならぬ姉妹きょうだいが関係しているアイアの辛さと比べられる訳がないだろう？」

「じゃあ、自分が辛い思いをしている、というのは認めるんですね？」

「……………」

キロは答えない。応えない。

傍らのムラマサも黙っている。

やがて、

「行くわよ、メイコ」

そう言つて、キョウコは十字路を左に進んでいく。

それでも数瞬の間、メイコはキロの顔を見つめていたが、間もなくキョウコに従った。

「キロ、小生こせいらも行かんと……」

「ああ」

ムラマサの催促に短く応え、十字路を右へと駆け出した。

前に行くムラマサの、その一対の小さな羽根と、二本の尻尾を視界に収めながら、キロは唇をかんだ。

「（認めよう……認めようじゃないか）」

確かに。そう確かに、オレにとって『七罪星』と過あつごしてきた日

々は、少なからず楽しかった。魅力的だった。捨てがたかった。

「暴食」の称号は未だに誇りだ。

だがあいつらはそれ以上に、オレの大切なものに手を出した。傷つけた！

許せるはずもない。許すわけにもいかない。

「（七罪星は、オレが潰してやる！）」

Φ

Φ

「ふむ、まあ、概ね思惑通り、といったところか」

ロンガ達の選んだ全ての路がやがて行きつく先。

最奥の部屋、巨大な球体つきのオブジェの下で、イミル・ルカーソンは呟いた。

「ビリー、お前は一番の部屋、ライニーは二番、シャドウーラは三番だ」

広いその部屋には、イミル以外の人影はない。

しかし、どこからともなく——まるで降るように、三人分の了解の旨が響く。

「シエス力のところで、もう少し手古摺ってくれば良かったのだがな。」

その分、期待しているぞ、“称号持ち”屈指の戦闘能力者たちよ！
鈍く赤い光を放つ球体が、それに巻きつく木のようなオブジェと、イミルの影を一緒くたにして地面に張り付けている。

「もう少し……もう少しだ——待っている■■。もう少しで俺の悲願は成就する……！」

不気味な赤のなかで、イミルの顔は歪んだ笑みを浮かべていた。

第十五閃——END——

第十六閃『称号と開戦』（前書き）

非常に短いですが、受験を控えているせいもあってか、大分間が空いてしまいましたし、投稿しようと思います。

第十六閃『称号と開戦』

「あんたが、次の相手か」

ロンガとアイアの二人が扉を開けて這入った先は、「性欲」のシエスカがいたのと同じような、広く四角い、物のない部屋だった。

「こんにちは。貴方がロンガ・シーライド？」

物静かな声で話すその女は、服装こそ何の変哲もない、有体に言うならば、ボーイッシュな印象すら受けるものだったが、しかし自身は、まるで修道女のような空気を放っていた。

「それから、貴女はアイア・シルストームね」

目線を、ロンガからアイアへ。

その口調は、水面のように静かだった。

「『それから』って、まるでオマケみたいに言わないでくれる？」

右手に持った杖で空を切ると、アイアはその、修道女然とした女を睨んだ。

「あら」

失言でした。とでも言わんばかりに、右手先で口を押さえる女。

しかし、さほど感情の起伏は感じられず、それこそ無風の湖のよう。

「……」

それでもロンガは、そしてアイアは、警戒を緩めない。緊張の糸を弛ませない。

この女が紛れもなく“「称号」持ち”であり、キロが警戒するほどの実力者である以上、その湖の底には、魔物が潜んでいるに違いないのだ。

「あたしの名は、ライニー・ファンクル。「嫉妬」の称号持ち……」

このくらいはキロから聞いているかしら」

「……」

「そしてあたしの“神器”^{スキル}の名は【狂戦士の鎧】^{メイル・オブ・ヘルセルク}…… 貴方達を殲滅する、ステキな“神器”^{スキル}よ」

「ああ……!？」

未だに女の口調は変わらないが、これには、ロンガ達の方が声を荒げざるを得なかった。

「ハ、発動をするでもなく、“神器”の名だけ晒すとは、どういうつもりだ？」

「そうよ、もたもたしてないでかかってきたらどう？ 私たちには時間がないのよ」

「あら、ふう……随分せっかちなのね」

初めてそこで、女の、ライニー・フランクルの口調に感情の色が灯った。

しかしそれは、臨戦するそれではなく。どこか残念そうな――物足りなさそうな、そんな感情が多分に含まれているようだった。

「お話がしたいのよ」

怪訝な顔をする二人に向かって。

「だって、戦いが始まっちゃうと、お話なんてできないでしょ？」

「ハ、そりゃ、まともに話す余裕なんてないかも知れんが――」

「んー、あたしが言ってるのはそういうことじゃないんだけどなー」

困ったような顔で、目線を泳がせてライニーは言う。

しかしすぐにまた、眼の前の二人を見据えると、

「いいわ、多分、すぐ後悔することになるわよ」

不敵な笑みを浮かべて。「嫉妬」のライニーはそう言った。

「……ハ、何、慣れてるさそんなもん」

「……ロンガ？」

「とりあえず、補助頼むぜ、アイア」

ロンガは、駆け出すために、重心を落としながら、後ろのアイアへ声をかけた。

「え、あー、じゃあ、遠目に見守りつつ頑張るね!」

「いや、それはもうちょい頑張ってくれ」

そんな台詞とともに、苦笑いすら置き去りにして、ロンガは床を蹴って駆け出した。

当然、その左手には魔力を握ったまま。

「フフ」

ライニーはライニーで、その身からあふれた魔力を纏うように、集束させていく。

「「^{スキル}神器」発動——！！」

ロンガ・シーライド&アイア・シルストームVSライニー・ファンクル。

開戦。

Φ

Φ

「貴方が、次の門番？」

ロンガとアイアが辿り着いたのと同じような、薄暗く四角な部屋で、キョウコ、メイコのフレアライズ姉妹もまた、『七罪星』“称号持ち”と対峙していた。

「門番じゃなくて刺客だよ。ま、オレは同じだと思っただけだね」
短く切りそろえられた金髪。

色のついたゴーグルから薄らと覗く双眸からは、確かにキョウコを睨みながらも、吊り上がった口角とともに、楽しんでいるような印象を受け取れる。

「あら、そんなに私達と当たったことが嬉しいのかしら？」

キョウコのそんな台詞に、金髪の青年は、

「はは、実際ね、オレはお前と戦ってみたかったんだぜ、^{サラマンダー}“火竜”
キョウコ・フレアライズ」

青年は、実に明るい口調で、手振りさえ交えて話す。

「まあ、余計なオマケがついてきたが、とにかくオレはキョウコあんだの相手ができて光栄だよ！」

「ちっさいって！ 余計って！ オマケって！ それ、もしかして私のコト！？」

憤慨するメイコ。

「そ、そりゃあ、お姉ちゃんと比べれば、その……いろいろとちっさいかもしれないけど！」

「そんなに怒らないで、メイコ。別にあんたはそんなにちっちゃくは————ないこともないわねえ」

キョウコは顎に手を当てて、さも今気付いた、と言わんばかりに。「こつも姉妹で差が開くものかしら、こついうのって」

その台詞の始終、キョウコの眼はメイコの胸元に据えられていた。「うっ……お姉ちゃんまで…… いいもん！ いつかお姉ちゃんをも超えるビッグになつてみせるもん！」

「諦めるんだな、ちっさいの。オレの見立てでは、お前は、もう、それ以上、育たない」

必要以上に読点を用いて発音された青年の言葉は、終息に向かいかけていたメイコの怒りに、大量の油を注ぐ結果となった。

「むっつかあああ！！ 怒った、もう起こったよ、もうとつくに怒ってるけど！！」

火のような顔をして、メイコは懷から荒々しく“十字架”を取り出した。

言わずもがな、それはメイコの魔導具である。

「大きくなつてもじゃまなだけだね、こんなの」

「ソレの話はもういいーのっ！！ とつとあいつぶっ飛ばすわよ、お姉ちゃん！」

金髪の青年を指差して、炎のように言葉を吐く。

「とりあえず名乗りなさいよ、この金髪ゴーグルが！」

「怒りでキャラ変わってないか、お前……」

頬を引き攣らせながら、青年は呟く。

「はは、ま、名乗れと言われて名乗らないオレじゃねえ」
その瞬間。

ピリリ、と、周囲の空気が硬くなった——気がした。

「——っ」

怒り心頭だったメイコですら、感じとれる程の空気の変質。

怒りは刹那の間に警戒へと変わり、メイコは一步引いて青年の、
ゴーグルに覆われた瞳を睨んだ。

「くく、なんだ、思ったより冷静じゃないか」

笑う。

キョウコはそれを、無表情でじっと見つめている。

「オレの名はビリー・レフィ・パッフェルベル。「傲慢」のビリー
だ、よろしくな！」

キョウコ・フレアライズ & amp; メイコ・フレアライズ VS ビ
リー・L・パッフェルベル。

開戦。

Φ

Φ

「あんたが、次の刺客か」

キロもまた、広く四角い、何一つ目を引く物の無い空間へと辿り
着いていた。

「その通りだよ、キロ・ウッドビレッジ——」「暴食」のキロ
”よ”

重く、空気が下から震え上がるような、そんな声を響かせた、黒
いコートに身を包んだ男。

今その男は、薄闇の中、唯自分だけが真に“闇”であると言わん
ばかりに、黒く、濃く、重く、キロと対峙していた。

「はん、未だにその号で呼んでくれるとはありがたいな、“「怠惰」のシャドウーラ”よ」

軽口を叩きながらも、キロは臨戦態勢を取った。

既にムラマサは刀の形態へと変化し、キロの左腰に提げられている。

両手には、当然のように【暴食獣の手袋】グローブ・オブ・ベヒーモス。

「——ふん。戻る気などさらさら無し、か。最早最後通牒すら突き付ける気は無くなった。キロ、お前は今ここで果てる」

闇色に光るサングラスの位置を整えながら、重低音でシャドウーラは言う。

「よく言っぜ、あんたが余計なことをしなけりや——あんたがグラムのことを知り、グラムのことをイミルに教えたりしなけりやあ、ここまでの事にはならなかつたんだ」

言う間に、キロの顔は憎悪と憤怒に染まっていく。

「……」

実のところ、グラムという娘と、キロの間にどのようなことがあり、何を理由にキロがグラムに肩入れするのか、そこまでのコトはシャドウーラにも判っていない。

ただ単に、グラム・ブロックエッジという娘が、過去に、身体全ブラッドボックスボディてを呪式魔道具『ブラッドボックス』に置換するBBBの被検体であつたということ、そしてその生存例であることがたまたま露呈した、それだけのことなのだ。

「キロ、お前は、“キロ・ウッドビレッジ”という存在の構成物——過去も称号も立場も罪も咎も善行も悪行も思考も思想も理想も、これまでおおよそそれら全てに誇りを持っていたはずだ。

既存の自分を捨ててまで、お前はあの娘が大事か？」

「くく、確かに、オレは一切の自分を、卑下しないし、後悔もしない。だが……いや、だからこそ、オレはあいつが大事だし、そこに一切の躊躇はない！ あいつの存在は、とくに“キロ・ウッドビレッジの構成物”だ！」

感情の棘を剥き出しにして、キロは叫ぶ。

「ここは通してもらっぞ、シャドウーラ・エクステッド！」

キロの咆哮を受けて、シャドウーラは、

「いいだろう。ならば私も、自らの理念に基づいて行動するのみだ。

——「暴食」のキロ、その称号、貴様の死を以て剥奪する！」

キロ・ウッドブリッジ＋ムラマサVSシャドウーラ・エクステッド
開戦。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8850t/>

【精霊憑きと魔法使い】

2012年1月7日18時49分発行